

---

# 僕と彼女のなんとかかんとか

雨永祭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と彼女のなんとかかんとか

### 【Nコード】

N8748A

### 【作者名】

雨永祭

### 【あらすじ】

漫画家の僕と巨大口ボ作製を夢見る天才な彼女。二人を中心に戦ったりファンタジーしたりSFしたり熱血したりラブコメしたりするコメディ（のはず）です。

## 1・僕と彼女の出会い（前書き）

はじめまして。雨永です。初投稿です。文書とか酷いと思いますが、読んで戴けるとうれしいです。

## 1・僕と彼女の出会い

「ふう、やっとできた…」

午後5時半。僕以外誰もいない図書館を夕日が茜色に染め上げている。

「ん〜っ。だあ〜疲れた……」

僕は一伸びしてから机の上に広げていた原稿やらGペンやらを片付け始める。学生の身分で漫画家なんぞやってるもんだからいろいろと面倒臭い。

三日くらい前からテストが始まっているけど締切りが明日だからそれ所じゃなかった。お陰で三日三晩徹夜。

まあ原稿は仕上がったし、後は出版社に届ければ取りあえず今月分は終了だから気分も良くなる。とにかく家に帰ったら真っ先に寝たい。

僕は気分良く睡魔と戦いながら図書館を出て行った。

「…ふう〜っ。やっとできた……」

午後5時半。赤い夕日が差す校庭の片隅、そこにある作業小屋の中に私は居る。

私は自分で作ったモノを見つめる。

「…ふふっ、我ながらなかなかの出来栄え……」

言ってから、私はそれに繋がっているケーブルを引き抜き、それの上に跨がる。

「…ガフ二号・改の起動及び動作実験を開始します。

ゲートオープン！」

私の掛け声と共に小屋のシャッターが上がっていく。ガフの頭のハッチを開け、パネルに起動パスワードを打ち込んでいく。いよいよ起動すると思うとわくわくしてくる。

「…起動っ！！」

掛け声と同時にパネルのキーを叩く。

ヴウウウンという起動音の後、コオオオという音を上げガフは空中に浮く。

妖しく光るモノアイ。その頭に不釣り合いなネコ耳。亀の様な形をした銀の体躯と蟹の様なハサミは夕日で赤く輝いている。

「…いい感じ……あとは……？」

するとガフから突然、ぷしゅうううという変な音と共に煙が上がりが始めた。

「あつ、壊れちゃつ……ひゃあつ！」

ガフは突然動きだし凄まじい速さで外に飛び出す。

「暴走しちゃつた……早く止めなきゃ」

ガフは校庭を破壊し始めた。なんとか止めようと、頭のパネルを操作するけど一向に暴走は止まらない。どうしよう……。

ガクンッ

突然ガフは止まった。何だろうと思つて周囲を見回してみると図書館の方から男子生徒が一人出て来るところだった。

その少年の足元はおぼつかない様に見える。

嫌な予感がする……。

そう思つた矢先にガフは男子生徒に向かって動き出す。

距離は僅かに10m。

ガフは手のハサミから火炎放射器の砲身を伸ばし男子生徒に照準を合わせている。

男子生徒は全く気付かず舟を漕ぎながら歩いている。

なんとか今この状況を回避しないと。

でもどうやって？ ガフはどうしても止まらない。なら方法はもう一つだけしかない。

「危ないっ！！」

叫ぶと同時に炎が男子生徒に襲いかかった。

「…危ないっ！！」

眠気を切り裂く叫び声。

「えっ……！！」

赤い何かが目の前に迫って来る。熱が伝わる。

火だっ！

「うわあっ！！」

余りにも突然すぎて反応が少し遅れたがほとんど火傷もなく炎から逃れる事が出来た。

ふと手に何か違和感を感じた。見ると手には鞆の把手だけがある。……把手だけ？　なんで把手だけしかないだろ？　鞆本体は何処にいった？

わからない。

全くわからない。

なんで僕は火に襲われたんだろ……火？

よく把手を見てみると端の方が焼け焦げている。さらに周囲を確認する。

女の子を乗せた奇妙な物体。

それから突き出ている筒から少しばかりの炎がチロチロと出ている。

周囲を舞う紙だったであろうと思える灰と地面に落ちて見る影も

なくなつてしまつた僕の鞆と道具。  
すべて灰燼に歸した。

「あああああああああああつー!!」

「…大丈夫ですか?」

「大丈夫なわけな……い……」

心配そうな申し訳なさそうな、なんだか複雑な感じの顔で話し掛けて来た女の子。その瞳は潤んでいる。

怒鳴ろうと思つた。

殴つてやろうと思つた。

弁償させてから金を絞りとつてやろうと思つた。

でも、その顔を見た途端、なんだか胸の奥から熱いものが込み上げて来てそれどころじゃなかつた。

きれいに整つた顔、ちよつと眠そうな目に吸い込まれそうな漆黒の瞳、腰くらいまでで艶のある黒髪、透き通る様な白い肌……

「あつ、ほんとに大丈夫?」

「えつ?ああ、大丈夫」

少々見とれてしまつていた。なんか恥ずかしい。

そして、彼女はほんとに心配そうな顔で僕を見つめる。

「……いや、大丈夫ではないよ」

「…ごめんなさい。」この子”が起動実験中に暴走して……ほんとごめんなさい」

”この子”とはこの奇妙な物体の事なのだろう。罪悪感を感じてしまつているのはなぜなんだろう? 彼女は潤んだ瞳で僕を見つめている。

「いや、気にしなくていいよ」

僕は一体何を言っている？

「君はわざとやったわけじゃないんだろ？」

「…ありがとうございます。でも鞆とかは弁償させて貰えないですか？ 申し訳ないです」

返事は？ 弁償して貰うに決まってる。

「いや弁償なんていいよ」

っ！？ 僕は何を言っている？ わけがわからない。自分がわからない。

「えっ？でも……」

「いいつて大丈夫だから、ね」

僕はなんで笑ってるんだ？

「…ほんとに？」

「うん」

「…ありがとう」

彼女はとても嬉しそうに笑い僕に礼を言った。

……無茶苦茶にかわいい。もう抱き締めたくなるくらいに。って僕は何を考えるんだ？

心臓が激しく脈打っている。

彼女に聞こえてしまっんじゃないのかと思う程にバクバクいつてしまっている。なんとか誤魔化さなきゃ。

「そ、そういえば僕今日は用事があるからもう帰るよ！ じゃあね！」

「えっ、あ……」

僕は逃げた。もうわけがわからない。胸がドキドキする。まるで恋する乙女……え？ 僕が恋する乙女？ 僕は恋をしているのか？

恋なのか？ 一目惚れなのか？

誰か答えてくれ！

僕は家に帰るとすぐに布団に籠って今日の事を考える。

………原稿焼けたんだ………

「あああああああああああつ！……！」

道具が無い。時間が無い。今日も眠れぬ夜がやってくる。

あつ、涙が出て来た……

## 2・僕と彼女の夕食の風景（前書き）

色々ありましてタイトル変更しました。

拙い文章ですが読んで戴けるとうれしいです。

## 2・僕と彼女の夕食の風景

ああどうする？どうする僕っ！…まあどうするも…どうするもやる  
しかないんだよな…

「はあ…水波音ちゃんに連絡しないと…」

なんとか気を取り直して行動に移そうとした瞬間  
ドガンツ！！

という凄まじい音と共に部屋の戸が開け放たれた。

「奏、お腹が空いたわ。今すぐ夕飯作りなさい」

「ね、姉さん、なんだよいきなり今ちよつと原稿が燃えて大変なんだ。水波音ちゃんに連絡したりしないといけないから無理だよ」

「…なんですって？」

途端に背筋の凍る様な殺気を放ち始めた姉さん。

「私の言う事が聞けないのかしらあ？」

そんなことを言いながらジリジリと詰め寄って来る姉さん。

僕は段々と部屋の隅に追い詰められてる。

「聞けないのかしらあ？」

姉さんの殺気が更に禍々しいものになっていく。

「やばいっ！殺されるっ！誰か！助けて！」

「やっほーい！おつ邪魔っしまーすっ！かっなでくーん！素敵で  
無敵でああなたの愛しの担当者っ！水波音ちゃんがやって来ましたよ  
っ  
っ  
っ」

「やった！救世主だっ！」

「ね、姉さん！ほら、水波音ちゃんが来たから僕は出迎えないとっ  
っ  
っ！」

僕は姉さんから逃げる様に部屋を飛び出した。

それにしても良いタイミングで家に来たもんだ…

「水波音ちゃん！今行くからちよつと待っててっ」



…まったくフォローになつて無いよ水波音ちゃん。

「大体楓義兄さんはどうしたのさ？」

「楓さんはジジイに呼び出されたのよ」

「爺さんのところに…早く言つてよ、そういう事はさ」 まったくなんて事してくれんだ、うちの爺さんは。

「奏君つ、原稿の方はどうかやつ？」

「ナイスな質問です、水波音ちゃん！」

「丁度言おうと思つてたところだつたんですよ。実は原稿が…」

「…いただきます」

テーブルの上には山の様な太巻きとそれを囲む様に皿と玉葱の味噌が置かれてる。今日は別に節分でもないのにどうして太巻きなんだろ…？

「はむ、んぐんぐんぐん…」

やっぱり彼方ちゃんが作る料理は美味しい。

「んぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん…」

「……………か」

「んぐんぐんぐんぐんぐんぐん…」

「……………か」

「んぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん…」

「……………か」

「んぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん…」

「可愛い過ぎるぞ！こんちくしょ〜っ！」

そう叫んでガバツと抱き付いて来るのはメイド兼料理長の唐本彼方ちゃん。からもとが

料理がすごい上手でとても良い人なんだけど急に抱き付いて来るの





うを向いて身体を震わせてる。

「可愛いなあ〜もう〜」

「可愛い過ぎですよ〜お嬢様〜」

そう言っただけで彼方ちゃんと若魚さんは頼ずりをしてきて、要ちゃんはまだ何かを堪える様に身体を震わせてる。

なんか変な状況だなあ…。

「…という訳なんですよ」

「嘘くさ〜い」

訝しそうな目をする水波音ちゃん。

「そんなこと言われても困りますよ！事実なんですから」

「ぶーっ、まったく仕方ないな〜。ネームとかも消し炭になったのね？Gペンのスペアはあるんでしょ？」

「ええ、どうしたら…」このままじゃ掲載できなくなってしまうっ！

「この水波音ちゃんにまっかせなさ〜いっ！こんなこともあるのかと！ネームのコピーを取ってあるのさっ！」

「ほんとに?!流石水波音ちゃん！」

「じゃあ今から電話するね〜ん」  
「やった！これでなんとか…。」

「ご馳走さま。奏、アイス持って来て」

「え、嫌だよ。水波音ちゃんの電話を見届けないと」

「アイス持って来て」

「だから嫌だ…」

「持って来て」

「嫌だっ……」

「アイス、持って来て」

「嫌……」

「持って来なさい」

「い……」

「持って来い」

凄まじい殺気を放つ姉さん。

「……はい」

はあ、なんで姉さんはこんななんだろう？水波音ちゃんの方はどうなってるのかな。

「もっしもっし！季秋君かな？……うん……うん奏君の原稿が……あっ  
奏くん！私もアイスたつべる……あっごめんごめんそれでね……」  
……僕はパシリじゃないんだ。

「はい、アイス持って来たよ」

「遅い！」

「さ……んく……す」

遅い！って無茶苦茶だよ、姉さん。

……はあ、ところで水波音ちゃん」

ふと気になったことを聞いてみた。

「なあ……にい……」

「ネームのコピーって誰が持って来るの？」

「編集長。あっ、このアイスおいし……」

「編集長が持って来るんだ……」

……ん？編集長？編集長だっ……て？！

「水波音ちゃん！あなた一体何編集長を小間使に使ってるの！？」

「季秋君だからいいのよ……ん」

「幾ら長年の友達だからって一応上司でしょっ……？」

「奏五月蠅い。黙れ」

「そうそう。細かいことは気にしない」  
「…なんだかなあ。」

「むう、この酒うんまいよー！」

「ふふっ、だろっ？取り引き先から貰ったんだ」

「はあ、晩酌…いやアル中なだけか。」

ピンポン

「奏、出て〜」

「嫌だ」

「出て」

「いや…」

「出なさい」

「い…」

「出る」

「…はい。今行きまーす」

「ああ僕って弱いな…。」

「はいはい、今開けますよ」

「玄関を開けると誰かが倒れて来た。」

「うわっ」と

「玄関に横たわったのは男だった。」

「大丈夫ですか？」

「はあ、はあ、や、やあ…奏…君。災難…だっ…たね」

「へ、編集長っ！死にそうな顔色してますけど…大丈夫ですか？」

「大…丈夫…ではないよ。でも、ほら呼び出しが、かかったら、急



「編集長っ！水…って編集長っ!？」

玄関に横たわっていたのは先程の五倍は酷い有様の編集長だった。その傍らには姉さんと水波音ちゃん。

……何があつたのか考えるのは止めよう。きっと考えてもろくな事じゃないんだろう。というか絶対考えたく無い。

「とにかく、大丈夫ですか？水です。どうぞ」

「ああ、ありが…ああっ」

編集長にコップを渡そうとした瞬間、コップを姉さんに奪われた。

「丁度喉乾いてたのよ…っく」

一息でコップの中身を飲み干す姉さん。

「…ぷはあっ、何これ水じゃない最悪」

そう言つて僕にコップを押しつけてリビングに戻って行った。

…何ていうか横暴だ。横暴過ぎる。

「うっうっうっ…」

編集長マジ泣きしてるし。

すると

「編集長」

驚く事に水波音ちゃんが編集長に手を差し延べた。

「…ひつく、水波音ちゃん…」

僕は予想外事に動けなくなつてしまった。そして、編集長は水波音ちゃんの差し出された手を取ろうとしている。

「…季秋君、この手何？」

「はへえ？」

なんちゅー不抜けた声を出すんだこの人は。

「ネームのコピーは？」

「…はい、これですうっ」

「っ苦勞ご苦勞。じゃあ後は帰ってねっん。はいっ奏君！ネー

ムの「コピー」

「ど、どうも」

ネームのコピーを渡されたけどなんか素直に喜べない。

「…あうううううっ」

「水波音！早く続きを飲むぞ！」

「はいはあーい！いつまいつくよーん じゃ季秋まった明日〜」

バンバンと泣き崩れる編集長の肩を叩き姉さんのとこに去って行った水波音ちゃん。

…悪魔かよ。

「うっうっうっうっ…」

「大丈夫ですか？傷は浅いですから…多分。ひとまず立って下さい。打ちのめされてる編集長に手を差し延べると余程嬉しかったのか僕に抱き付こうとした。

「…っ！」

なんとか抱き付いて来た編集長を避ける僕。

…思いの外速かった。ヤバかったなあ。

「何すんですか、いきなり」

「ああっ！ご、ごめん君の優しさがあんまり嬉しかったからつい…」

…優しさに飢えてるのか。

「…えーと、上がって行きますか？」

「いや、その提案は嬉しいけど身体が持たないよ。水波音ちゃんと日由ちゃんが飲んでるんでしょ？」

「…ああ確かに止めた方が賢明ですね」

きつと地獄絵図だ。

「あはは、でしょう？それに仕事が終わった訳じゃないしね」

「そうですね、色々頑張ってください。水波音ちゃんに負けないで」

「そっちこそ負けないでね。それじゃこれで…あっ締切りは四日後迄だからさ、頑張って」

「はい」

玄関から出て行く編集長。その背中は何んだか哀愁を帯びていた。

「………編集長。………よし！頑張るかあ」

## 2・僕と彼女の夕食の風景（後書き）

評価・感想お待ちしております。

### 3 ・僕と彼女のお手伝い（採用編）（前書き）

更新遅くなりました。すいませんでした。

文書や流れが変なところがあるかもしれませんが悪しからず。

### 3・僕と彼女のお手伝い（採用編）

「…おはよ…」

「おはよ、ご苦労様だね、奏」

「ありがとう、義兄さん」

あの後僕はずっと原稿とにらめっこ。やっぱり徹夜。  
僕が食卓に着くと、

「はい、朝食」

「あい、いただきます…」

「もぎゅもぎゅ…」

僕が食べてると上はYシャツ、下はパンツ一丁というあられもない姿の姉さんが起きて来た。

「んあ…おはよ…楓ざくん…液キャベ…うつぶ」

よく見ると水波音ちゃんを引き摺っている。泊まってたのか。

「おはよ、日由ちゃん、水波音ちゃん。二日酔いかい？お酒、程々にしないと駄目だよ？」

「わがってるわよ…」

「はよ…楓くーん…あだじにぼ…液キャベ…」

「はいはい」

大変だなあ…義兄さんも…。

「はい二人共」

二人は義兄さんから液キャベを受け取るとぐいっと一息で飲み干した。

「「やっぱ、まず…」」

「はい、水」

「「ぐっぐっぐっ…ばあーっ」」

親父くさっ。

「朝食だよ由ちゃん。水波音ちゃんもどっ？」

「食べる〜」

こうして座留家の朝は過ぎて行く。

「ご馳走さま」

「お粗末様。はいこれ」

そういつて義兄さんは食卓の上にウンケルを置いた。

「ありがと。んぐぐっ…ぷはあ。じゃあ行つてきます」

「いつてらしゃい」

「テストさぼつたらタダじゃおかないからね」

「いつてらしゃい」

サボらないよ、姉さん。でも寝ないと身体持たないな…。

そんなことを考えながら玄関を出て行く。

「つぶあああっ…眠い…」

「随分と眠そうじゃないか」

「おはよ〜奏」

「相変わらず仲が良いな、糞バカップル」

話し掛けて来たのはがっちりと手つないだカップル。背高のつぽでポブカットの長谷川はせがわのりこ矩子となぜかポニーテールでパツと見は女に

しか見えない男・守戸かみとちひろ千央。千央は男とも女とも取れる格好だった。

「なんだ？妬いてるのか？お前…まさか！千央を私から奪うつもりではないだろうなっ！？」

「奏！君は僕の事が…？嬉しいよ…でもごめん！僕はノリじゃないと駄目なんだ！」

なんで僕が千央の事が好きって事になってんだ？というかお前は男だろう。

「千央っ！」



「…っ！」

「あはは、相変わらずノリは奏をからかうのが好きだね」

「ふっ、まあね」

「こ、こいつら」。

「まあまあ、それでその女の子だけど、恐らく…」

「あの…」

「ん？」

誰かが僕達の会話を遮った。

その誰かは昨日原稿燃やした女の子だった。

「あれ？昨日の？」

「あつ…はい。日永歌澄ひながかすみつていいいます。」

日永歌澄…か、良い名前だな…。

「あつ、僕は座留奏つていいいます」

「座留…さん」

「あつ、奏でいいよ、日永さん」

「じゃあ奏さん、私も 歌澄でいいです」

「うん、わかったよ、歌澄ちゃん」

歌澄ちゃんはただ頷く。

「…それで昨日はすいませんでした」

「いやいや、大丈夫だからさ。気にしないでって昨日も言ったでし

よ？」

「確かにそうですけど…このままだと私の気が治まません。ですから、何か私に出来る事はありますか？」

「え？」

「だから、私に出来る事ありませんか？」

どうするべきかな…。

「えーと、そうだ。取りあえず放課後、図書館に来てくれない？返事はその時つてことでもいい？」

「大丈夫。じゃあ放課後に」

「うん、じゃあ」

可愛いけど表情が無い娘だなあ…。

矩子は何やらニヤニヤしていた。

「な、なんだノリ？」

「奏、あの娘の名前を聞いた時『良い名前だな』とか思ったな？」

「…なっ！」

いきなり何を言うんだ、こいつ。

「はははは。また、顔が赤くなってるぞ」

「うるさい…」

「まあまあ、二人共。ところで奏、日永さんの話聞きたい？  
何？」

「聞かせろっ」

苦笑する千央とニヤニヤ笑う矩子。

「…あ」

「重症だね」

「すっかりお熱だな」

「うっ、うるさい！さっさと行くぞっ！」

僕を見てしきりに笑う二人。最悪だ…。

僕と矩子は千央とクラスが違うから階段で別れる。教室に着くとスポーツマンといった感じの短めな髪で精悍な顔つきの長身の男子生徒が話し掛けて来た。

「よう、奏。おはよーさん。随分と眠そうだな」

「おはよ、謙治。そりゃ四日連続の徹夜は誰だって堪えるよ」

「大変だな…。おつ長谷川もおはよーさん」

謙治は俺の後ろから入って来た矩子にも挨拶をした。

「ああ、おはよう。」

ところで謙治君」

「なんだ？」

「君、今度は商業科Ⅰ組の岸和田陽子きしわたようしに告白されたそうじゃないか。ご苦労なことだな」

ほんとにモテるな謙治は。

「お前また告白されたんだ…ご苦労なことだな」

「ほつとけ。この学園の女は和心わしん以外眼中にねえんだよ」

「流石は我が学年一の色男…いやシスコンだな。岸和田陽子は学年の美少女ランキングでもかなりの上位だぞ。確か4位だった筈だ。

可哀相に…」

そんなランキングがあるのか…。 きっと歌澄ちゃんは1位なんだろうな…。

「謙治はシスコンというか、近親相姦の域だよ」

言いながら僕は自分の席に着く。

「ふん。ほつとけ」

「ちなみに奏、お前は男子のランキング13位と大健闘だぞ」

「あつそ」

「後、女装させたい男子で1位だ。千央はいつも女装とかしてるから対象外だそうだ」

……………なんだそれ。

なんだか哀れみの表情を僕に向ける謙治。

「奏…よかつたな1位で」

「謙治…いいわけないだろ。後、そんな顔で僕を見るな」

矩子は何やらほくそ笑んでいた。

「ところで奏、」

「どうした？」

何やら真剣な顔をする矩子。

「日永歌澄のランキングの順位は知りたいか？」

「何っ！知ってるの？教える！」

「か、奏？どうした？」

滅茶苦茶気になる…歌澄ちゃんの順位。

「……………」

じっと僕を見つめる矩子。

「……………」

「焦らすな！さっさと！言えっ！」

「な、何柄にも無く熱くなってるんだ？奏」

困惑顔の謙治。そしてやっと矩子は口を開いた。

「…1位だ」

「やっぱり…」

歌澄ちゃん滅茶苦茶可愛いからな。表情はあまり変わらないけど、あの時の顔が忘れられないんだ。

「なあ長谷川」

「どうした謙治君」

「奏、どうしたんだ？なんかどっかにトリップしてるぞ…」

「ああ、ついに奏に春が来たらしい」

「めでたいけど…大丈夫か？」

「大丈夫だろうさ。以前の様になるまい」

「そうだな。で、話からすると日永歌澄なのか？」

「日永歌澄だよ」

「また難儀そうなのに惚れたもんだな」

「まったくもってそうだな」

…すっかり歌澄ちゃんに熱上げちゃってるな僕。

そっういえば歌澄ちゃんに僕が漫画家だと教えるべきなんだろうか

…。

学校には一応秘密にしてるけど…大丈夫な気がするからいいか。  
ガチャと戸が開き、担任の高本<sup>たかもとくれは</sup>呉羽先生が入って来た。

「早く座りなさい」

全員座るのを確認すると呉羽先生は話を続けた。

「朝のSHRを始める。今日は古典と英語と数1のテストがある。  
頑張りなさい。後カンニング絶対にしない様にする。以上終わ  
り」

そう言つて呉羽先生はさつさと教室から出て行く。

相変わらずさばさばした人だなあ。

そんなことを思つてると謙治が来た。

「なあ奏、古典のテストでこれは絶対に出るぞっ！ってのはあるか  
？」

「相変わらず駄目なんだ。多分教科書の若紫あたりなんか出るんじ  
やないかな」

「…ふむふむわかったそれで他に…」

謙治に教えてると先生が入って来る。

「テスト始めるぞーさつさと席に着けー」

みんなガヤガヤと各自の席に戻って行く。 やった、仮眠が取れ  
る。

テストが渡される。僕はそれをさつさと片付けて速やかに眠りに  
ついた。

古典のテスト終了まで後30分ばかり時間がある。

あの申し出を受けてくれるだろうか？もし受けてくれたとしたら  
どんな事をするんだらう？

朝からそればかり考えてる。

不安もあるけど、なんだかとても楽しみ。

「……………」

心地良い眠りを誰かが邪魔してくる。

手でその誰かを払う。

「……………」

僕の健やかな眠り邪魔するな。

「起きろよ」

「ううっ……」

ああ起きたらいんだろ、起きたら。

「……なにするんだ謙治、気持ち良く寝てたのに」

「やっと起きたか……もう放課後だぞ」

「ああ、もう放課後なんだ……」

教室に人は疎ら。いつの間にか数1のテストは終わっていたらしい。

「ふあゝ、良く寝た」

「奏はアレか？今日も図書館で仕事か？昼飯食べに行かないか？」

「うん。あと、昼飯は弁当があるから遠慮しとくよ」

あまり歌澄ちゃんを待たせられないしね。

「そうか、それじゃまた明日な」

「うん、また明日」

僕に背を向け、片手を上げて教室を出て行く謙治はとても様になっ  
っていた。

さっ、早く図書館に行かないとな。

僕は鞆を持ち教室を足早に出て行った。

僕は小走りで図書館に入った。





もう少し信用して欲しいな…。

「むぐ」

おにぎりを啜えたまま頷く。とうか食べ過ぎじゃないかな…。

「今日の朝、何か自分出来る事がないかって歌澄ちゃんに聞かれたからさ。それでその返事をしにね」

それを聞いた陽子ちゃんは驚いていた。

「あの歌澄がね…」

そんなに珍しい事なのか…。

「ところでさ、ずっと気になってたんだけど…歌澄ちゃんはアレ全部一人で食べるの？」

そう聞いて5段の重箱を指差す。

「そだよっ！いつもあんな感じだよっ、ぶっちゃけ常軌を逸してるよねっ！」

「ほんとだね…」

一体あの小さい身体の何処にあの量のおにぎりが入るんだろうか？

「ご馳走さま、奏さん待たせてごめんなさい」

「いや、大丈夫だよ」

すごい食べっぷりだったよ…。

「朝の返事…教えて」

なんだか告白の返事をするみたいだなあ。

「私は邪魔かなっ？」

「ああ、陽子ちゃんも誰にも喋らないなら別に大じょ…。」  
すると歌澄ちゃんが、

「ダメ」

はつきりと拒絶した。

え？なんでダメなんだろう？

「なんで陽子ちゃんがいるとダメなの？歌澄ちゃん」

「…なんか…嫌…」

二人は親友じゃないのか？なんか陽子ちゃんは新しい玩具を手に入れた子供みたいに笑ってるし。

「ウフフツ。わかったよっ！わったしは図書館の外で待ってるよっ！」

そう言っつて楽しそうに陽子ちゃんは去っていった。

「いいの？」

「うん…それで返事…」

「あ、ああ、返事ね。手伝って貰えないかな？」

「何を？」

小首を傾げる歌澄ちゃんは滅茶苦茶可愛い。

「漫画。誰にも喋らないでね？実は僕、漫画家なんだ。昨日燃えちゃったのは、鞆だけじゃなくて、完成した原稿も一緒に燃えちゃったんだよ」

「…えっ」

かなりの衝撃だったらしい。絶句していた。

「えーと時雨しぐれかすゆき和雪わゆきって漫画家知ってるかな？僕なんだ、それ」

「…う…そ…」

身体を震わせながら潤んだ瞳で僕を見つめてくる。

その目は反則だよ。可愛い過ぎ。

「…ほんとに…時雨和雪…？」

「う、うん」

するとおもむろに僕の手を両手で握ってきた。

「えっ？ど、どうしたの？」

歌澄ちゃんはうっとりした目で僕を見た。そして、

「すごい…すごく嬉しいです。私…ファン…なんです。うわあ、どうしよう、どうしよう。はうう…幸せ…。サインくれませんか？」

えーと、整理すると、歌澄ちゃんは僕のファンで、僕に会えて心底嬉しいということになるんだよね。

……………役得じゃないか！

「いいよ」

僕は満面の笑みを浮かべているんだろうな…。

「で、何に描けば良いのかな？」

しばしの熟考による沈黙。

「……………そうだ！家に来て貰えませんか？」

……………家？

「なぜ、歌澄ちゃんの家へ？」

「もちろんサインを先生の著書（同人誌）にして欲しいからです  
なるほど確かにそれしか無いんだろうな。

でも、歌澄ちゃんは忘れてるよ。

「歌澄ちゃん、喜んでくれるのは嬉しいし、サインを君の家に行っ  
て描いても良い。でも、取りあえず今は落ち着いてくれないかな。

話はまだ途中だよ」

「…あ」

言われて顔を真っ赤にして申し訳なさそうに俯く姿。僕にとって  
それはそれは可愛くて可愛くて愛しくて愛しくて…。溢れだしてく  
る保護欲。猛烈に抱き締めたい衝動を何とか押さえ付けて話を続け  
る。

「大丈夫、気にして、無いから。…とにかく、歌澄ちゃんには僕の  
アシスタントをして貰いたい訳なんだよ」

「分かりました。もう嬉しすぎます。喜んでやらせていただきます」  
とても嬉しそうな歌澄ちゃん。怖いくらいに瞳が爛々と輝いてい  
る。

うーん、昨日、朝、今とで全然キャラが違う様なそうじゃないよ  
うな…。いや、状況の問題なんだろう。

「期間は今日を含めた三日間。仕事場は僕の家。多分遅くまでかか  
ると思う。下手したら泊まり掛けなんてのも有り得る。だから、家  
の人とか大丈夫？」

歌澄ちゃんは少し考えてから答えた。

「……………大丈夫」

「うん、じゃあよろしく。あと、先生とかは止めてお願いだから。奏で頼みます」

「…うん」

これでは手伝って貰うだけだな。

「話も終わったし、陽子ちゃんをそんなに待たせる訳にもいかないでしょ？それになんか頼んでた物があるみたいだし。帰ろうか。…ところで、何を頼んでたのか聞いても大丈夫？」

純粹に興味をそそられたんだよね。

「うん」

頷き、教えてくれた物はなかなか意外で結構マニアック（多分）な代物。結構マニアックな趣味なんだなと思った。まあ人の事は言えないな。

歌澄ちゃんが頼んでいた物、それは、

「『勇○王ガ○ガイガ○GGG戦闘記録集』」

…熱いロボットはほんとに最高だと思えます。いや、蝶・サイコロ。

そんな感じ陽子ちゃんに合流した僕と歌澄ちゃんは、『勇者○ガオガ○ガ○GGG戦闘記録集』を陽子ちゃんが歌澄ちゃんに渡してから三人で学校を後にした。

### 3・僕と彼女のお手伝い（採用編）（後書き）

次話は人物紹介です。意見や感想お待ちしています。

閑話・ノリと千央の紹介コーナー！（前書き）

登場人物紹介とこの小説の舞台となる柳泉市の紹介です

## 閑話・ノリと千央の紹介コーナー！

「今日は僕、守戸千央と、」

「私、長谷川矩子が送る！」

「人物紹介っ！」

「と、言う訳で僕らがこの小説の登場人物紹介と舞台となる柳泉市の案内をすることになったんだけど…ノリ」

「どうした？千央」

「なんで僕達なのさ」

「まあ、そういうな。私も一緒なのだからそれで良いではないか」

「まあそだね」

「それに早く終わらせて愛を育みたいじゃないか…」

「……よし僕頑張るよ！」

「それじゃ始めようか千央」

「うん！まずは登場人物紹介からだね」

「面倒だからパソコンの画面を見て貰っちゃおう…」

「それがいいな、楽で」

「うん、ではどうぞ！」

くらしめ  
座留 奏 かなで

性別 男 年齢 15歳

身長 170センチ 体重 55キロ

誕生日 12月8日

射手座

A B型

髪は白髪が混ざったショート（黒く染めてる）

容姿は中性的な顔立ちというか割と大きめの目をしておりむしろ女顔（意外とモテるが本人に自覚無し）

眼鏡着用

柳泉学園高等部普通科1年

姉夫婦と共に生活

趣味は所謂アキバ系で『時雨 しぐれ 和雪 かずゆき』の名で漫画家をしているこの

小説の主人公

成績はすこぶる良い。

サークル『橘小社』の主宰者

ひなが  
日永 歌澄 かすみ

性別 女 年齢 15歳

身長 148センチ 体重 39キロ

誕生日 11月10日

蠍座

O型

髪は黒の腰まであるロング

容姿は幼さの残る人形の様な美少女。いつも眠そうな目をしてる。学園でもトップクラスの美少女。ファンクラブあり。

柳泉学園高等部工業科1年

メイド二人と執事一人と共に生活

趣味は所謂アキバ系（特にロボットもの）にプラモデル作り。

ロボット工学の世界的権威世で天才なこの小説のヒロイン

成績は不動の学年トップ

座留くわいじゆめ 日由ひより

性別 女 年齢24歳

身長 165センチ 体重45キロ

誕生日6月28日

蟹座

B型

髪は黒の背中の中頃まである姫カットで容姿はかなりの美人（人によって好き嫌いが別れると思われる）で意志の強そうな目をしている。

『CW』（自分で作った会社）の社長。

楓（旦那）と奏の三人で生活している

趣味は弟苛めとドライブ。

『CW』の詳しい事は不明。本人曰く

「世界征服の橋頭堡となる会社なのよ」

との事

世界の敵な感じがする様な気がする奏の姉。

柳泉学園のOG。

座留 くらとめ 楓旧姓 かえで 明刀 あとう

性別 男 年齢 24歳

身長 185センチ 体重 68キロ

誕生日 9月28日

天秤座

O型

髪は肩まである黒髪を後ろで束ねている。

いつもニコニコ笑っている。

日由（妻）と義弟の奏の三人暮らし

趣味は家事と料理

柳泉学園OB

柳泉市のカリスマ主夫な奏の義兄

小羽都 こばと 水波音 みはね

性別 女 年齢 23歳

身長 158センチ 体重 48キロ

誕生日 2月14日

水瓶座

A型

髪は茶色のウェーブのかかったセミロング

容姿は美人。幼さが残るが妖艶な雰囲気がある。興談社きんだんしゃのアフター

スクール編集部勤務の『時雨和雪』の担当者。一人暮らし

趣味は釣りと美少年へのナンパ（すぐに逃げられる）

柳泉学園OGで日由、楓、季秋とは親友

奏の貞操を付け狙うシヨタ女

叶井 かない 季秋 ひであき

性別 男 年齢 24歳

身長 176センチ 体重 72キロ

誕生日 4月18日

牡羊座

A型

髪は短めの黒髪、容姿は優しそうでしっかりした感じの目で完璧な好青年

興談社アフタースクール編集部の編集長

趣味は読書と釣りと家庭菜園

柳泉学園OBで楓とは幼馴染み、日由、水波音とは親友  
ヘタレでパシリな編集長

唐本 からもと 彼方 かなた

性別 女 年齢 21歳

身長 178センチ 体重 51キロ

誕生日 7月24日

獅子座

A型

髪は黒のポニーテールで容姿は見る者が怖がる凛々しい目に笑うと口許にのぞく魅力的な犬歯。全身からワイルドさをかもちだしている。

日永家（歌澄の住む家）のメイド兼料理長  
趣味は料理と犬の世話と可愛い物収集

歌澄と犬をこよなく愛するワンワンメイド

明刀 要あとう かなめ

性別 男 年齢 19歳

身長 192センチ 体重 85キロ

誕生日 9月6日

乙女座

O型

髪は少し長めのショートで容姿は鷹の様な鋭い目と大きな身体でどつからどう見てもヤーさんに見える。

日永家（歌澄の住む家）の執事

趣味は可愛い物収集と庭弄りとネットサーフィン

歌澄と可愛い物命！の乙女執事

那波 若魚なば わかな性別 女 年齢 27歳

身長 164センチ 体重 50キロ

誕生日 5月30日

双子座

B型

髪はくせっ毛のある黒のショートヘアで容姿はクリっとした目で可愛らしい人。

日永家（歌澄の住む家）のメイド長

趣味は家事と歌澄のピンナップ撮影（盗撮）

歌澄命！の腹黒メイド長

長谷川 矩子はせがわ のりこ

性別 女 年齢 16歳

身長 178センチ 体重 53キロ

髪は黒のショートカットで長身

柳泉学園高等部普通科1年

家族と生活している

趣味は奏をからかう事と読書

サークル『橘小社』のメンバー

千央の愛しのマイハニー成績は上の中

守戸 かみと 千央 ちしろ

性別 男 年齢 15歳

身長 156センチ 体重 43キロ

誕生日 7月1日

蟹座

A B型

髪は黒くツインテール（或いはポニーテール）で可愛いククリク  
リとした目に小柄な身体完璧に女に見える容姿。

柳泉学園高等部情報プログラミング科1年

家族と生活している

趣味はパソコン弄りと変装（女装が主）となりきりとコスプレ

サークル『橘小社』のメンバー

矩子の愛しのダーリン成績は上の中

白羽 しろは 謙治 けんじ

性別 男 年齢 15歳

身長 185センチ 体重 78キロ

誕生日 5月5日

牡牛座

## A型

髪は黒で短髪で容姿端麗スポーツ万能。女子の人気はダントツで1位  
柳泉学園高等部普通科1年  
家族と生活している

趣味は素振りと日本刀収集

剣道部所属

キングオブシスコン野郎

たかもと  
高本 呉羽

性別 女

身長168センチ 体重53キロ

髪は黒のセミロングで知的な感じの眼鏡を着けていて有能そうな秘書に見える

柳泉学園高等部物理教師

きしわた  
岸和田 陽子

性別 女 年齢16歳

身長160センチ 体重51キロ

誕生日4月23日

牡牛座

O型

髪は黒のセミロングのストレートヘアの活発そうな娘

柳泉学園高等部商業科1年

家族と生活している

趣味は店番と散歩

文学部所属

なんだか不思議な少女

「……と、まあこんな感じだよ、なんか序盤から登場人物が多過ぎる気がしないでもないよね」

「まったくだな…じゃあさっさと次に移ろうか」

「うん！次は柳泉学園と柳泉市の紹介だね！」

「では、紹介を始めよう」

「ここは柳泉学園。小中高大学院一貫校で柳泉市の中央に位置している」

「確か…学園の生徒は全部で一萬五千人くらいだったけか、多過ぎだよ」

「そうだな。高等部には普通科、工業科、商業科、言語科、情報プログラミング科の五科がある。二、三年は五科ごとの棟に別れるが、一年の内は全員が同じ棟で学園生活を送る事になっている」

「小中高は生徒会が管理・運営を任されてるんだけど、これは小説本編で説明されるよ…多分」

「そうそう、学園行事はその年と行事によってルールなどがかなり普通と違っている。本編を楽しみにしてくれるといい」

「次は町だね」

「そうしようか。学園の東西南北に門があり、それぞれの方位に商店街がある。東には工業地帯が広がっていて、西には住宅街が広がっているんだ」

「それで、北には森林公園が広がってるんだよ。南は遊園地や大型

デパートとかあるよね。…柳泉学園と柳泉市の説明ってこんなんで良いのかな？」

「…相当手抜きな学園と市の説明だな」

「確かにね…」

「まあ悪いのは作者だしな、これで終わりだと言っなら私はそれでいい」

「そうだね」

「千央。この後は、私の家で愛を語り合おう」

「うん！そうしよう！大好きだよ！ノリッ！」

「私もだよ、千央」

これで紹介コーナー1（？）は終わり。

………ってかなんだこの終わり方…

柳泉市は所謂学園都市ってやつです。

閑話・ノリと千央の紹介コーナー！（後書き）

心底微妙な感じだ…

次話は僕と彼女のお手伝い（作業・来訪編）です。

#### 4・僕と彼女のお手伝い（お仕事編）

帰り道。

僕は陽子ちゃんに気になっていた事を失礼極まりないだろうと思いつつも聞いてみた。

「陽子ちゃん」

「んにゃ？何かなっ？」

「すごく失礼極まりない質問なんだろうと思うけど…一体謙治の何処が良かったの？」

陽子ちゃんは少し驚いていた。

「ありやりや、知ってたんだ。いやぁー何処がいいかってかいつ？そこばかりは教えらんないなっ！」

「そっか、まあ無理に知ろうとも思わないけどね。でも、謙治はシスコン…いや、シスコンの域を逸脱して来ている変態野郎だよ？」  
「それでもいいのさっ！フラれたって私の気持ちは変わらないのさ！」

滅茶苦茶良い娘じゃないか。明日謙治を殴ってやらないといけないな。

可愛い娘二人に囲まれての帰り道はやはりいいものだと思う。

「じゃーにー」

「それじゃ、また明日」

「…ばいばい」

陽子ちゃんの家の前。

陽子ちゃんの家は岸和田本屋だったのか…知らなかった。

「じゃあ歌澄ちゃん僕の仕事場に行こうか」  
「…うん」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

黙って歩き続ける僕達。

うーん、なんとかこの状況を打破したいな…。

「…えーと、歌澄ちゃんに聞きたいことがあるんだけど…いいかな？」  
「？」

「…なんででしょう？」

「歌澄ちゃんの趣味って何なの？」

「…機械弄りとプラモデル作りと漫画にアニメにゲーム」

「へえ〜結構良い趣味してるね。ロボットが大好きなんだね」

「…うん」

と頷く歌澄ちゃんは何と無く嬉しそうに見えた。

「…私は勇者シリーズとガンダムが大好きです…最近のロボットアニメには勇者の熱さが足りてません」

「確かにね。僕は最近のロボットアニメはCGに頼り過ぎだとも思うんだよな」

「…確かにそうですね。私、何となくそれが許せないんです。まあそれでも見るんだけれど…」

こんな感じにロボットアニメについて語り合いながらの帰り道。

…普通女の子とする話じゃないな。

「ただいま」

「…お邪魔します」

そんなこんなで僕の家に着いた。

「奏、おかえ…」

と途中で言うの止めた義兄さん。すると、突然悍ましいオーラ発し始めた。

「に、義兄さん？どうした？」

「…その女の子を家に連れ込んで何をするのかな…？」

おっ怒ってらっしゃる…なんで？言ってることもよく理解が…。

「に、義兄さん。この子は…いつ!？」

ユラユラと揺れながらこちらに向かってくる聞く耳持たずの義兄さん。

「…その娘連れ込んで何をするのかな？」

見ると歌澄ちゃんは義兄さんに対する恐怖から玄関に蹲って震えている。

「義兄さん！彼女は僕の原稿を手伝ってくれるんだっ！」

僕はこれはまずい！と思い、一気に捲し立てると我に返ったのか発散していたオーラが消えていった。

「なんだ、早く言ってくれないと。危うく奏を血祭りに上げちゃうところだったよ。あははは」

あ、危なかった。

歌澄ちゃんはまだ震えてる。なんか小動物みたいだな。…と、いけないいけない安全になったことを教えないと。

「歌澄ちゃん、もう大丈夫だよ」

「……………」

潤んだ瞳で僕を見上げる姿にいわれの無い罪悪感が込み上げて来る。

「もう大丈夫だから、ねっ？」

「いや、怖がらせてごめんね」

「…もう大丈夫…です」

なんかかといつた感じで答えている歌澄ちゃん。本当に悪い事し  
ちゃったな。

「えーと歌澄ちゃん紹介するよ。こっちが楓義兄さん。義兄さん、  
こちら日永歌澄ちゃん」

「よろしく、日永さん」

「…よ、よろしくお願いします…」

あーあ、すっかり義兄さんに怯え切ってるよ…。

「日永？どつかで聞いたような…」

義兄さん、急に黙るんじゃない歌澄ちゃんが怯えてる。

「歌澄ちゃん取りあえず上がって」

「…う、うん」

「義兄さん、」

「うん？なんだい？」

「僕達部屋で原稿描いてるから」

「わかったよ」

「後、姉さんが帰って来ても部屋に入って来ない様にしてくれよ」

「はいはい。じゃあ原稿頑張ってるね。歌澄ちゃんもね」

「…ありがとうございます」

まだ怖がる歌澄ちゃんを促して部屋に向かった。

「日永…日永…ああ要が執事やってるって家か…」

「ようこそ、僕の仕事場へ」

奏さんの部屋はすごかった。まず、目を奪うのは部屋の壁を全面  
を覆う本棚。本棚にはジャンルを問わず、漫画を含めた様々な本が

敷き詰められている。机の上には山積みの資料、パソコン、漫画を描く為の画材なんかが置かれていた。そんな部屋に明らかに異様な空気を出している物があつた。

それは薄汚れた布に包まれた棒の様な物体。

「…奏さん、あれは？」

その物体を指差すと

「えーと…ごめんね。ちょっと教えられないんだ」と言葉を濁した。

かなり言い難いことらしい。

「それで、具体的にやって貰うことだけど、ベタ塗りと消しゴムをかけるのをやってくれないかな？」

「…分かりました」

失敗しない様に頑張らないと…やっぱりその前に家に電話しないといけないな。

「…あの、」

「どうしたの？」

「電話借りてもいい？」

「どうぞ、机の横にあるから」

「…もしもし」

『はい、日永です』

若魚さんが出た。

「…若魚さん、私です、歌澄です」

『お嬢様、どうしました？』

「…えと…今日は友達の家泊まりますので家のことよろしくお願  
いします」

『お友達…陽子ちゃんですか？』

「…えーと、うん、陽子ちゃんの家」

…あれ？私、若魚さんに嘘ついちゃった…

『分かりました、それでは夜になったら着替えを…』 「…あつ、着替えは持つて来なくて大丈夫だからっ」

『？そうですか』

ちよつと変に思ってるかな…？

「…じゃあ、彼方さんと要さんによく言っておいて下さい」

『分かりました、では楽しんで来て下さいね』

「…うん、うん」

電話の後に残ったのは罪悪感。でも、やっぱり奏さんの家に泊まるなんて言えない…。

「…電話ありがとうございました」

「うん、じゃあ始めようか」

「…うん」

「……………」

「……………」

沈黙の中聞こえてくるのは紙にペンを走らせる音ばかり。

僕は筆があまり早い方じゃないから一人でやるよりは少しペースが上がっている程度だけど、順調と言えば順調と言える。

原稿を描き始めて一、二時間たった頃扉をノックが沈黙を破った。

「義兄さん、どした？」

「一息つかないかい？」

「いいね、そうしようか。いいよね、歌澄ちゃん」

「…うん」



「…うん、大丈夫」

そんな感じで食べ始めた。

「むぐむぐむぐむぐ…」

次々と歌澄ちゃんの口に消えていく芋羊羹。そしてあつと言つ間にテーブル上の芋羊羹の山は消えた。

「……………歌澄ちゃん、よく食べる娘なんだね…」

「……………うん」

「あのすいません、まだ有りますか？」

「…マジですか、歌澄さん…。思わずさん付してしまつた…。」

「…う、うん。まだ、有るよ。ちよつと待つてて」

そう言つて芋羊羹を保管している場所に行つた義兄さんはすぐに戻つて来た。段ボールを抱えて。

「どうぞ」

と義兄さんが歌澄ちゃんが座っている横に段ボールを置くと

「…ありがとうございます」

と歌澄ちゃんは嬉しいそうにしていた。

あ、歌澄ちゃん可愛いなあ…。

ズズズツとお茶を飲みながらそんなことを思つてる内に義兄さんは僕の隣りに座り、歌澄ちゃんは羊羹を両手で持つてりすみたいに食べ始めた。

五分後—

「むぐむぐむぐむぐむぐむぐ…」

「むぐむぐ…ズズズツ」

「むぐむぐ…ズズズツ」 食べ続ける歌澄ちゃんと普通にお茶を飲みながら食べる僕と義兄さん。

さらに五分後ー

「むくむくむくむくむくむくむく……」

「むく……ズズズツ、はあ……。ご馳走さま」

「……………」

ひたすら芋羊羹を食べ続ける歌澄ちゃんと食べ終わった僕、そして既に食べ終えて何とも言えない表情で消えていく芋羊羹を見つめる義兄さん。

またさらに五分後ー

今に至る。

く回想終了く

「答えてくれ、奏、あの娘はなんなんだい？」

段々と詰問口調になって来ている義兄さん。珍しく動揺しているのか？…いや、違うか、恐らく食費が心配なんだろうな…ちゃんと言わないと。

「えーとね、義兄さん。歌澄ちゃんの今日の昼食はかなり大きめの五段の重箱一杯のおにぎりだったよ。それと、今日から泊まり掛けで原稿を手伝って貰うから歌澄ちゃんの分の食事を用意しないといけないんだ」

僕の言葉を聞き、目を見開く義兄さん。

「…それ、ほんと？」

「うん」

ガツクリと肩を落としてうなだれ全身が震え出す義兄さん。丁度その時歌澄ちゃんが芋羊羹を食べ終えたところだった。

「…ご馳走さまでした」

何となくまだ食べたそうな目をしている気がする。気を遣ってくれたんだろうか？遅い気がする…。

「ねえ、歌澄ちゃん」

すると突然義兄さんが歌澄ちゃんに話掛けた。

「…はい、なんででしょう？」

「歌澄ちゃんの家にも明刀要ってパツと見ヤクザの乙女野郎な執事はいるかい？」

明刀要ってあの乙女義兄さんか？！

「…はい、いますけど…知ってるんですか？」

「くっくはははは」

「…ひっ」

「…につ義兄さん？」

突然笑い出した義兄さんに怯える僕と歌澄ちゃん。

「おっと、ごめんね。要は、ぼくの弟なんだよ」

それを聞いて驚く歌澄ちゃん。

「…そうなんですか…奏さんのお兄さんだったんですか…あれ？でも苗字が違う…」

義兄さんは何やら考え込んでいるから、歌澄ちゃんの疑問に僕が答えた。

「ああ、義兄さんは座留家に婿入りしたんだ」

「…そうなんだ…世の中って意外と狭いんだね」

「うん、そうだね」

世の中の狭さに二人で感慨に耽っていると今まで考え込んでいた義兄さんが歌澄ちゃんに顔を向けた。

「ねえ歌澄ちゃん、家にはもう電話した？」

「…はい、しました」

「それじゃあ、この家に泊まるって連絡したんだね？」

急に歌澄ちゃんに質問を浴びせ掛けはじめる義兄さん。その表情は何かを企んでいる様に見える。

「…えーと…は、はいそうです」

なぜか歯切れが悪くなる歌澄ちゃん。

「…そう、歌澄ちゃんの家ってあの丘の上の屋敷だよな？」

「…はい」

「ありがとうね、じゃあ原稿頑張ってね二人共。ぼくは片付けたら買い物に行って来るからね」

そう言っつて義兄さん台所に消えて入った。

…なんだったんだ？

「…なんだったんでしょ？」

「…さあ？まあ取りあえず再開しようか」

「…うん」

取りあえず良い予感はないなあ…。

沈黙の中ひたすら作業し続ける僕と歌澄ちゃん。お互い一言も喋らないけれどそんなに悪い感じはせずに、むしろ良い雰囲気漂っている気がする。それに歌澄ちゃんはとても楽しそうにしている様にも見えるし。バーンツ！！

「ヤッフオ〜ッ！かつなでくーん！愛しの水波音ちゃんがやってまいりましたよ〜 お仕事ははかどってるかな〜？！にやははは」

突然やって来て、僕と歌澄ちゃんのナイスな雰囲気をぶち壊したテンション超爆シヨタ女。

おのれ…。

「今は水波音ちゃんが居ない方がはかどるので今直ぐ帰れ」

「アレ？その娘は誰？誰なのっ奏君っ！？私と言う者が有りながらっ…この浮気者っ！」

いきなり来たと思ったらなんて事を言うんだこの人は…。歌澄ちゃん物凄く困惑してるじゃないか。

「浮気者って何なんですか、水波音ちゃんは只の僕の担当じゃないですか。それと、この娘は期間限定で僕のアシスタントをしてくれる事になった日永歌澄ちゃんです。分かったらさっさと出てっつて下さい」

水波音ちゃんの襟首を掴んで部屋から締め出した。

「ああんっ！奏君のいけずう」

「ったくこの人は…。」

「あぁもうっ！どうせ今日も家に夕飯たかりにきたんでしょ？」

「…てへ」

「『てへ』じゃないですよ。だったらリビングで大人しくしてて下さい。早く原稿でかして欲しいんでしょ？」

「…はあゝい」

シヨンボリといった感じの声を上げてリビングに向かったらしい水波音ちゃん。

「はあゝい」

「って子供かあんたは。」

「はあゝ。ったくあの人は…」

「ほんと呆れるしかないよな。」

「…あのさっきの人は？」

「やっとといった感じで歌澄ちゃんが質問してきた。」

「あぁ、あの人は僕の担当さんで、姉さんと義兄さんの親友の小羽都水波音ちゃん」

「…そうなんだ。…愉快的な人だね…」

「…まあそうだね…続きやろっか」

「…うん」

「うーんっ、歌澄ちゃん」

「…はい？」

「そろそろ夕飯の時間だからさ、一旦終わろっか」

「…うん」

「ああ二人共、もうすぐ出来るから水波音ちゃん起こしておいてくれる？」

リビングに降りて来ると義兄さんが忙しそうにテーブルに料理を上げていた。

なんか今日は豪勢で量が多いなあ…

「うん、了解。今日は姉さん遅いね」

「なんか会社で何かごたごたがあったらしくて少し帰りが遅れるってさ。そろそろ帰って来るんじゃないかな？…で、歌澄ちゃん、つまみ食いしちゃ駄目だよ」

いつの間にか食卓に着いて出来ての料理に手を伸ばしていた歌澄ちゃん。

「…あつ、すいません。つい…」

恥ずかしそうに俯く歌澄ちゃんは抱き締めなくなる様な姿だった。

「…あはは…じゃあ水波音ちゃん起こして来るよ」

水波音ちゃんはソファで

「くーくー」

と幸せそうに涎を垂らして寝ていた。

「まったくこの人は…」

水波音ちゃんを起こそうとした時、凄まじい音と共に窓を突き破って何かがリビングに突入してきた。

「お嬢様っ！助けに来たぜっ！」

「お嬢様っ！御無事ですかつ！？」

やって来たのはメイドと執事。よく見ると執事は要義兄さんだった。

「…人ん家の硝子窓突き破って入って来るのはどういっつ見なのかな？糞乙女野郎」

「あ、あああ兄貴っ！」

「おい、どうした？乙女執事」

凄まじい負のオーラを放つ義兄さんと後退りをする義兄さん。そ

して、野性味溢れているメイドさん。水波音ちゃんはいまだ幸せそう  
な顔で寝ており、歌澄ちゃんは固まっている。  
…何んだこの状況？

4・僕と彼女のお手伝い（お仕事編）（後書き）

ヘル・アード・ヘヴンで殺られたゾンダ〇は残骸になってたっけか  
？（笑）

次回、乙女執事は苛められます。

## 5・僕と彼女の賑やかな食卓（前書き）

更新遅くなってしまいました。すいません。今回は長ったらしいですがお付き合いしていただけるととても嬉しいです。文章の方も滅茶苦茶になったりしてるかもしれませんが悪しからず。

### 報告

二話目を手直したんで読んでやって下さい。



「くははははっ！まだまだあっ！」

「はいはあーい、追加だよっ」

要義兄さんは顔を陽子ちゃんが作った『すり下ろし玉葱の海』に楓義兄さんの手でぶち込まれ続けている。楓義兄さんは悪魔の笑みを浮かべていて、要義兄さんは姉さんにポコポコにされ、さらに涙と玉葱のせいで見るに耐えない顔、陽子ちゃんは心底楽しそうにしている。

なぜこんな状況になったのか、それは要義兄さんと彼方さんが窓を突き破って入って来た後に起こった。

（回想開始）

……………

「人ん家の硝子窓突き破って入って来るのはどういう見なのかな？糞乙女野郎」

「あ、あああ兄貴っ！」

「おい、どうした？乙女執事」

凄まじい負のオーラを放つ楓義兄さんと後退りをする要義兄さん。そして、野性味溢れているメイドさん。水波音ちゃんはいまだ幸せそうな顔で寝ており、歌澄ちゃんは固まっている。

「…彼方ちゃんに要ちゃんどうしてここに？」

「お嬢様っ！」

ガバツと歌澄ちゃんに抱き付くメイドさん。

「…彼方ちゃん、だからどうして…」

「怪我っ！怪我はして無いかっ!？」

「…してません。ですからどうして…」

このメイドさんは歌澄ちゃんの身内なんだろうな。

「あの、歌澄ちゃ…」

「なんだテメエ…馴々しくお嬢様を『歌澄ちゃん』なんて呼びやが

つて…まさかテメエがお嬢様を…」

急にメイドさんに凄まれた。

「いや、なんだって聞かれましても」

「いいからさっさと答えるよ…」

物凄くドスを聞かせるメイドさん。そこで気付く。

「…あの彼方ちゃん」

必死にこのメイドさんに話し掛けてる歌澄ちゃん。なんとかして上げないといけない気がしてきたな。

「さっさと答えるよ、テメエ」

更に凄むメイドさん。

「メイドさん…」

「ああんっ!?!」

「貴女のお嬢様が貴女が話を聞いてくれないから困ってますよ?」

「へっ?!」

メイドさんが後ろを振り向くと歌澄ちゃんが切ないそんな顔でメイドさんを見つめていた。

「…彼方ちゃん、話を聞いて下さい…」

「うわあ…ああっ!お嬢様っ!ごめんっ!」

「…彼方ちゃんはもつと人の話を聞くようになっていつも…」

なんか説教を始め出した歌澄ちゃんと説教受けてシヨンポリしているメイドさん。

うーん…このメイドさんの場合、人の話を聞かないというよりも熱くなり過ぎて周りが見えなくなってるって感じだよな…。

つと、そっいえば義兄さんズは…。

「…なんで兄貴がいる…」

「それはここがぼくの家だからだよ要」

拮抗する義兄二人。なんとなく要義兄さんは顔が青ざめている様に見える。

「……………」

「……………」

一陣の風が吹いた瞬間要義兄さんが逃げ出した。

「逃すかつ!」

あつと言つ間に楓義兄さんに掴まった要義兄さん。

…情けな〜。

「嫌だーっ! いやーっ!」

情けない悲鳴を上げて必死に楓義兄さんから逃げようとする要義兄さん。

「情けねえ〜。あんなのが身内だと思つと恥ずかしくなつて来るな

…」

歌澄ちゃんとメイドさんが隣りに来た。話し掛けて来たのはメイドさん。

「同感です。あんな義兄は勘弁して欲しいですよ。ところでメイドさん、説教は終わったんですか?」

「ああ終わったよ。それよりも、俺の名前は彼方。唐本彼方だ。メイドつて呼ぶな。さっきは悪かったな、座留。話は全部聞いたよ」

「そうですか、それは良かった」

なんだか好感が持てる人だなあ。

「…奏さん、要ちゃんと楓さんは仲良しですね」

「…歌澄ちゃん(お嬢様)本気で言つてる(いつてるのか)?」

「…はい?何がですか?」

エエエ〜。

「…ところでどうして彼方ちゃんと要ちゃんが奏さんの家に?」

「ああそれは僕も気になつてたんですよ」

何せ窓突き破つて来たんだからね。

「ああそれはな…」

「ちよい待ちっ!」

突然誰かが彼方さんの説明を遮つた。

「陽子ちゃん?」

「…陽子ちゃん」

「ついて来てたのか?」

「んっふふふ　こんな面白そうなこと無いからねっ」  
ほんとに楽しそうだなあ。

「でもなんで陽子ちゃんが僕の家知ってるの？それに話からすると彼方さん達は陽子ちゃんに僕の家教えて貰ってたみたいだし…」

「うん、ここ楓先輩と日由先輩の家だからねっ」

「先輩？」

「あれ？知らないの？」

「うん」

「柳泉学園で明刀楓と座留日由を知らない人はいないくらい有名なんだよっ！」

そうだったのか…知らなかった。

「まあ取りあえず話を元に戻すけど、彼方さんと要義兄さんの襲撃になんで陽子ちゃんが関わってるの？」

「聞こうとしたら『きゅ〜』という音があった。見ると歌澄ちゃんが恥ずかしそうに俯いていた。

歌澄ちゃんのお腹が鳴ったらしい。

「可愛いなあ…。」と思った矢先、彼方さんが歌澄ちゃんに抱き付いて頬ずりをしました。

「ああっもう！お嬢様は可愛いなあちくしょーっ！」

「…お腹空いた」

彼方さんは歌澄ちゃんが大好きなんだなあ。まあ確かに腹も減ったしなあ…。

「そうだね。そろそろ義兄さん達を止めさせないとね」

「そうだよ奏君っ、私もカリスマ主夫・座留楓の料理をたかりにきたんだからさっ、あはは」

今僕は陽子ちゃんと水波音ちゃんがダブって見えたよ。

「そ、そうなんだ…じゃあ義兄さんを正気に…」

僕が二人を止めようとした時、

「ただいま…って何これ？」

我が家の女帝が帰って来た。

義兄さん達は…

「離せ〜っ！俺は屋敷に帰るう〜っ！」

「窓をこのままにしてか？屑野郎だな、要」

「まだやってるよ…。何にしても要義兄さんにとって事態は完全に破滅に向かっているな…。」

「奏、この子達は？」

「えーと、この娘は期間限定で僕のアシスタントをしてくれる日永歌澄ちゃん。こちらが歌澄ちゃん家のメイドの唐本彼方さん。こっちが歌澄ちゃんの友達の…。」

「ああ、陽子じゃない」

「なんだ知ってたのか…。」

「はいっ 楓先輩の料理を食べに来ましたっ」

「そう、ゆっくりしてってちょうだい。…それで奏この窓は一体何？」

リビングに散らばる硝子片を指差して僕に聞いて来た。なんだか怒気が含まれている気がする。

「それは…」

「答えようとしたところに要義兄さんを引き摺る楓義兄さんがやってきた。」

「おかえり、日由ちゃん」

「ただいま楓さん」

微笑み合って挨拶を交わす二人。状況が違っていたら微笑ましい家庭の一コマだったろうに…。

「ひっ！ひっ日由さん」

姉さんを見て滅茶苦茶怯える要義兄さん。ちょっと可哀相になってきたよ。

「あら、要じゃない」

「日由ちゃん、聞いてよ。要が家の窓突き破って突入してきたさ、リビングがメチャメチャだよ。僕はまだ夕食の準備の途中だから、要をよろしく」

「わかったわ、任せて」

「そんなっ！いつ！いやめろっ！やめてくれっ！俺はまだ死にたくないやめろっやめてえーっ！！」

優しい笑みを浮かべて要義兄さんを受け取る姉さんといそいそと夕飯の準備を再開する楓義兄さん。

「……………」

「……………」

「」

「…お腹空いた…」

「くーくー」

上から順に遠い目でその光景を見守る僕、呆れている彼方さん、楽しそうにしている陽子ちゃん、お腹を空かせた歌澄ちゃん、まだ寝てる水波音ちゃん。

その後、要義兄さんは姉さんにポコポコにされた挙句一人で泣きながらリビングの掃除をさせられた。水波音ちゃんはこの時になってやっと起きた。

「いただきます」

「…いただきます」

「いつただきますっ」

「いただきます」

「いただきます」

「…いただかせていただきますうっ」

「おうっ！ジャンジャン食えっ！」

「まだまだ一杯あるからみんな遠慮せず食べてね！但し、要お前はだめだ」

上から僕、目の前の料理に目を輝かせている歌澄ちゃんと陽子ちゃん、いつもと変わらず酒を片手に持っている姉さんと水波音ちゃん

ん、泣いている要義兄さん、そして料理を作ってくれてる彼方さんと楓義兄さん。

今日はいつもと違い大人数の食卓　まあ要義兄さんは一人段ボールだけど　を囲みまるでパーティーの様だった。料理も和洋中仏伊と滅茶苦茶なラインナップだった。

量も半端ないし　まあそれはきつと歌澄ちゃんの大食いスキル故のこの量なんだろうけど。

こっちに戻って来てからこんなの始めてかも…こんなのも悪くないな。

楽しい夕食の時間は過ぎて行く…。

楓義兄さんと彼方さんが席に着いて少したった頃。

「それにしても食べて喋ってだけじゃ退屈ねえ…」

いきなり何嫌な提案してんだよ姉さん。要義兄さんは恐怖のあまり有り得ないくらいの白い顔をしていた。

「そっだね〜どうしよっかね」

楓義兄さんと姉さんが何か言う度にガタガタと震える要義兄さん。その姿はもはや可哀相を通り越して笑えてくる。

「そっだっ！楓先輩っちょっと…」

陽子ちゃんが何か思い付いたらしい。楓義兄さんにゴニョゴニョと耳打ちしている。

「…うん…うん…それはいいねえ、ふふふふふっ」

「お手伝いしまっすっ！」

とても楽しそうにしている二人。

「ちよっと待っててね、日由ちゃん。今準備するから。行くよ、陽子ちゃん」

「はいっす〜」

〜回想終了〜

その後楓義兄さんと陽子ちゃんが桶と大量のすり下ろし玉葱を持ってきて決死の抵抗を見せる要義兄さんを難なく捕まえ冒頭のように余興という名の拷問をし始めた。といった感じで冒頭の状況が出来た訳です。

こうして我が家の楽しい時間は過ぎて行った。

騒がしい夕食が終わり、すっかり頓挫していたなぜ彼方さんと要義兄さんが我が家に窓割って突入してきたのかを彼方さんに聞いてみた。

「どうして彼方さんと要義兄さんは我が家の窓を突き破って入って来たんです？」

「…私も気になります」

僕と歌澄ちゃんが聞いてみると彼方さんは深刻そうな顔をして話始めた。

「実は夕方頃屋敷に『日永歌澄はいただいた』って内容の手紙が届いたんだ。それで、こいつは大事だったことで岸和田陽子の家に行ってみたら…ん？そういえばどうしてお嬢様は座留の家にいるんだ？」

「……え、えーと、」

「どうしてもこうしても歌澄ちゃんは始めから僕の家に来ましたよ？」

「はあ？何言ってるんだ、陽子の家に泊まるってお嬢様から連絡が来たって若魚が…」

「…ご、ごめんなさい…」

「お嬢様？」

「歌澄ちゃん？」

突然謝り出した歌澄ちゃん。謝る事は何も無い筈なのに…。

「どうしたんだよ、お嬢様」

「彼方ちゃん…実は嘘ついちゃったの」

「なっなんだって!!」

物凄くビツクリしてる彼方さん。そんなに驚く事なんだろうか。

「…そんな…お嬢様が…俺達に嘘を…」

「…あう彼方ちゃん」

シヨツクのあまりブツブツ独り言を言い始めた彼方さんを見て辟易している歌澄ちゃん。

「えーと、彼方さん。落ち着いて下さい。これじゃあ話が進みませ  
ん」

「…ブツブツ…っは!あ、ああそうだな」

なんとかといった感じで立ち直る彼方さん。

「よし、それじゃあ歌澄ちゃん。理由をどうぞ」

「…はい、えーとあれです。男の子の家に止まるのは初めてで、彼  
方ちゃん達に心配掛けたくなくて…」

「なんだか

「えーとあれです」

つてのがすごい引っ掛かるんだけど…。

「…お嬢様…俺達を思っ…」

歌澄ちゃんの言葉で感涙に震える彼方さん。

「…ごめんね?」

「っあっ!お嬢様っ、もう謝らなく大丈夫だからさ!」

彼方さんって想像以上に単純だなあ。

「っじゃあ、歌澄ちゃんが嘘付いた理由がわかったところで話を戻  
しましょうよ」

「お?ああそうだったなっ。まあそういう訳で陽子の家に行ったん  
だ。そこで座留、お前の家にいるって言うじゃないかっ!んで、陽  
子からこの家の場所を聞いてよ、急ぐあまり窓突き破って突入しち

やった訳だよ」

なんかしつくり来ないな。

「私を誘拐したって内容の手紙は何なんでしょうね？」

「なんだよな。お嬢様はずっとこの家にいた訳だし」

……犯人は多分あの人だろうな、理由もきつとアレなんだろうな。

歌澄ちゃんと彼方さんはうんうん唸って頭を捻っている。

「…ねえ、奏さん。手紙、誰がやったのかな？」

「座留、お前なんかないか？」

行き詰まったらしい二人が僕に意見を聞いてきた。

「多分犯人は楓義兄さんかと…」

「…えっ？」

僕の答えはかなり予想外だったらしい、二人して口をポカンと開けている。

「そんなに驚かなくても…」

「…っあ、ごめん」

「おおっ、悪い悪い。で、なんでわかったんだ？」

「考えてもみて下さいよ。彼方さん達はまるで、案内されたかのようにこの家迄辿り着いたじゃないですか」

「…ん、確かにそうだな」

やっぱり彼方さんに思うところがあったらしい。

「まあ、どうやって歌澄ちゃんの陽子ちゃんの家泊まるという嘘

を知ったのかはわからない…というか知りたくもないですけどね」

「そう言い終わると歌澄ちゃんが少しばかり思案してから質問して

きた。

「…」

「…こんな事した理由は何なんでしょうね？」

「だよなあ」

「えーとそれは多分アレだよ」

「…アレって？」

訝しそうにする歌澄ちゃん。

「自覚はあるんだろうか？」

「彼方さんなら何となく分かるんじゃないですか？いつも料理を作るのは貴女だそうですね…」

「はあなんで俺が……あぁっ！なるほどな！確かに経費も労力も半端無いからなあ…」

少し遠い目をしている。

「…え？何なんですか？」

頭を捻る歌澄ちゃん。

「歌澄ちゃん、気を悪くしないで聞いてね」

「…はい」

真剣な顔をする僕につられて歌澄ちゃんも真剣な面持ちになる。

「歌澄ちゃん、君の食べる異常なまで食事を考えると、食費も労力も尋常じゃなくなるからだよ。多分ね」

「…あう、すいません」

あー…物凄く申し訳なさそうな顔してるし、またいわれの無い罪悪感が…。

「ああ、そんな謝らないでいいからさ」

「そうだぞ、お嬢様。気にしても仕方ないだろ？」

慌てて取り繕う僕と歌澄ちゃんのフォローをする彼方さんに歌澄ちゃんは嬉しそうにした。

「…ありがとう」

そんな歌澄ちゃん表情を見てなんだか和やかな雰囲気になる僕達三人。それはまるで蝶々が舞い飛ぶ花畑で戯れる純真無垢な子…

「なあ〜にして〜んのっ！」

「うわっ！」

「ひゃあっ！」

「うわいっ！」

傍からみたらきつとドン引きだったろう空気をぶち壊してくれたのは陽子ちゃんだった。

「びっくりしたよ、ほんと」

「ああまったくだ」

「…びつくり…どうしたの陽子ちゃん」

「いやぁーね〜三人して惚けてるからさっ、何してんのかなぁ〜つて」

そういえば陽子ちゃんも何か知ってるっぽいんだよな。

「いやね、なんで彼方さん達が我が家に突入してきたのか三人で考えてたんだ」

「それでそれで？」

「きつと楓義兄さんが裏で何かしたんだらうなっ」

「へえ〜」

陽子ちゃんは何やら値踏みするような目で僕を見た後楽しげな顔をする。

「な、なに？」

「…やっぱり面白い人だなあと思ってたね〜」

「なにそれ？」

歌澄ちゃんも彼方さんも首を捻っている。大体面白いつてなんだよ。

「奏君が考えた通り暗躍してたのは楓さんだよっ」

「やっぱりか…」

「…それにしたって事がうまく運び過ぎじゃないか？」

彼方さんの問いに陽子ちゃんはなぜか自慢げに答えた。

「ふふ〜ん 何たって、楓先輩ですからねっ！」

「なんで陽子ちゃんが義兄さんの自慢すんのさ」

「当然だよ！楓先輩は我が文化部の偉大なる歴代の部長なんだからねっ！ちなみに先輩の情報網は尋常じゃ無いから私が歌澄の友達っていうのも把握済みだよっ」

…楓義兄さん、あんた何者だよ。

時刻は9時。なんだかんだで真相(?)も分かり、楓義兄さんの謎が深まった頃。僕は風呂に入っていた。

「ふう〜、和む〜」

それにしても今日は色々楽しかったな。歌澄ちゃんも可愛いかったし…。

「……歌澄ちゃん、か。やっぱり一目惚れ…なのかなあ…?」

呟いた瞬間浴室の戸が勢い良く開いた。

「なんだとお前!」

「うわあっ!…つと脅かさないでよ、要義兄さん」

そこにいたのは全裸の要義兄さんだった。

「お前、まさかお嬢様に惚れたのか?」

物凄い形相で睨まれる僕。相変わらず目付き悪いなあ。しかも

あ…

「…臭い、義兄さん酷く臭い。取りあえず、玉葱塗れの身体とか顔とか頭とかと、サンリオ大好き脳味噌をきれいに洗い流したら?」

「む、確かにそうだな…って誰がサンリオ大好き脳味噌だっ!」

見事なノリツッコミをしてから僕に言われた通り身体を洗い始めた要義兄さん。

「災難だったね」

「うるさい、黙れ。それよりお前、お嬢様に惚れたのか?」

うう、相変わらず嫌われてんな、僕。

「…さあ、どうなんだろ?」

「ふんっ。そんなことはどうでもいい。お前、」

「要義兄さん、いい加減僕の事名前で読んでくれないんじゃない?」

「お嬢様に近付くな」

僕の願いを無視した挙句それですか…。

「嫌ですよ」

「なんだと?」

「当たり前だよ。まず、今日から少なくとも三日は歌澄ちゃんにアシスタントとして泊まり掛けでやって貰う事になってるし、歌澄ちゃん自身とても楽しくやっっている様に見える。例え楽しくやっついていないとしても、少なくとも嫌がってはいないよ。大体、歌澄ちゃんに何をするわけじゃないんだし、何をしたわけじゃない」

「減らず口をつ！」

「要は僕が嫌いだからでしょ？」

「……ふん、言ってる」

要義兄さんはそれだけ言っていると洗い終わったのか立ち上がって浴室の戸に手を掛けた。

「あれ？入らないの？」

「なんで野郎とわざわざ入らないといけないんだよ糞が、一緒に入るならお嬢様とだろうが」

「………ぷっ、変態ロリ乙女男」

「………あっ、だっ黙れ！糞っ！」

自爆男・明刀要は顔を真っ赤にして悪態をつきながら荒々しく浴室を出て行った。

浴室に流れる沈黙。

「………はあく、まったく厄介だよなあ、仲の良い義兄弟になりた  
いよ、いい加減に」

風呂から上がると歌澄ちゃんと陽子ちゃんが入浴の準備をしていた。

「歌澄ちゃん、風呂いいよ。ところでなんでまた陽子ちゃんも風呂  
入る準備を？」

「駄目かなっ？」

「いや、駄目じゃないけど」

「サンキユ〜 そんじゃお風呂に「ー」!

「…え? ひゃあっ」

陽子ちゃんは嬉しそうに歌澄ちゃんを小脇に抱えて風呂場に消えて行った。

風呂場から陽子ちゃんの楽しそうな声と歌澄ちゃんの恥ずかしそうな切ない悲鳴が聞こえてくる。

「…何やってんだろなあ…」

「座留、今風呂に行きたいか?」

「いきなりなんですか、彼方さん」

「風呂が楽しそうだなって思わないか?」

「まあ、とても楽しそうには聞こえますね」

「だろ? ちなみに、乙女な執事はそこでお嬢様の切なそうな悲鳴を聞いて悶えてるよ」

見ると要義兄さんは床に突っ伏して拳で叩いて悶えてた。

「…っく、どうするっ! どうするっ、俺っ!」

「邪魔よ」

「あぐうっ!」

「「……………」」

姉さんに蹴られた要義兄さん。僕と彼方さんにはそんな彼に話し掛ける言葉は何もなかった。

「彼方さんは、あの花園と化した風呂に入らないんですか?」

「入らないよ。これから愛しのお嬢様のあられもない姿をこれに収めるのさっ。行って来るぜ!」

ハンディカムを手に颯爽と風呂場へと向かう彼方さん。

きつと誰もが思うだろう。彼方さん、『それは犯罪だよ』と…。

しばらくすると風呂場にいた三人が三者三様の表情で戻って来た。  
「……お風呂ありがとう」

歌澄ちゃんは姉さんのパジャマを借りてるけど物凄くブカブカ。  
でもその姿がまた可愛らしい。

それにしても、なんだか憔悴してるよ……。

「大丈夫？」

「……うん」

「あははっ 歌澄はかわいかったよ」

「……あう……」

陽子ちゃんは元氣過ぎるだろ？相変わらず楽しそつだな。着替え  
てないし。

泊まってくつて言わなくて良かった。

「にゃっはは」

まあこの二人がこうなってるのは分かるんだけど……。

「……はあく、眼福 眼福、いいもん撮れたあく。うふふふ」

彼方さん壊れてるよ……ほっところ。

「取りあえず僕はもう部屋で作業しに行くよ」

「……あ、じゃあもう少ししたら部屋の方に行きます」

「了解」

コンコン

「どつぞ」

歌澄ちゃんがやってきた。

「……すいません、ちよつと遅くなっちゃった」

「大丈夫だよ、別に」

「……よかった。陽子ちゃんと彼方ちゃんと要ちゃんはさっき帰った

「よ」

「そっか、賑やかだったね」

「…そうだね」

「じゃあ始めよっか」

「…うん」

僕と歌澄ちゃんが作業を再開してしばらく。

部屋に響くのはペンを走らせる音と下の階から聞こえてくる酔っ払い達の笑い声。

「ねえ、歌澄ちゃん」

「……………」

返事が無い、ただの屍の様だ…じゃなくて、何考えてるんだ僕は。

「歌澄ちゃん？」

歌澄ちゃんの方を見ると安らかな眠りについていた。この上無く幸せそうな無垢な寝顔には理性が崩壊するんじゃないかと思う程の破壊力があつた。

落ちて着けっ！僕！

僕は気を取り直して歌澄ちゃんに布団をかけた。

「あまり徹夜は馴れて無いんだろうな」

よし、ジャンジャンやるとするか。

ドシンツという何が落ちる音が部屋に響いた。

「……………う…あれ？私寝て…た…？」

私が気が付くと布団がかけられていた。ぼんやりとした頭で多分

奏さんがやってくれたんだろうと思った。そう思うとなんだかとても嬉しかった。

周囲を見渡してみると奏さんが椅子から落ちて寝ていた。

「奏さん起き……」

私は奏さんがとても気持ち良さそうに寝ていたからおこすのを途中で止めた。その寝顔を見ると私の顔に笑みが零れて来るのがわかった。

「すごく可愛い寝顔だなあ……添い寝したらあの笑顔みたいで暖かいのかな？」

寝起きでいい感じの頭になってた私は添い寝なんかしたらどうなるのか何も考えず、毛布を手に取り奏さんに抱き付く様に添い寝した。

鳥達の囀りが聞こえる。

……寝ちゃったのか。

ぼんやりとした頭でヤバいなと思っていると伸ばしていた腕に何やら違和感があった。

…なんか重い。それになんだか服がテーブル側に引っ張られる気が……。

そう思い隣りを見る。あつたのは歌澄ちゃんの顔。

……なんで歌澄ちゃんね顔がこんな近くに？

よく見ると歌澄ちゃんも頭を僕の腕に乗せ、服をギュッと掴み円くなつて添い寝していた。

眠気が一気に覚める。

「っ！」

あまりの出来事に声にならない叫びを上げる僕。

頭が腕に乗ってるから動けない。  
すると歌澄ちゃんが目を覚ました。

「……………んんっ……………あっ……………」

「…あ”…」

目が合う僕と歌澄ちゃん。すると歌澄ちゃんは顔を真っ赤にして俯く。

ちよつと歌澄ちゃん！？可愛いよ？君のその姿はすごく可愛いよ？でもなんで動いてくれないのさ？！

柄にもなく頭の中はパニックを起こしていた。

そんな僕に追い討ちをかける様に天使の顔をした閻魔様がやって来た。

コンコン。

「二人共、起きて。朝食出来たからさ」

なんてタイミングで来るのさっ楓義兄さんっ！

「はいるよ？」

僕の腕から退かない歌澄ちゃんと今まさに入ってこんとする楓義兄さん。

どじりするやつ、僕？

## 5 ・僕と彼女の賑やかな食卓（後書き）

酷い文章を読んでいたいただきありがとうございます。評価や感想などをお待ちします。

6・僕と彼女の朝の情事？と登校風景（前書き）

歌澄のキャラ迷走してる気が…

物語が始まってからまだ三日しかたってない…どうしよう。

では、本編をどうぞっ

## 6・僕と彼女の朝の情事？と登校風景

鳥の囀りが聞こえる。

頭を少し揺らされた気がして目が覚めた。

「……………んんっ……………あっ……………」

「……………」

ふと奏さんと目が合う。

…そういえば添い寝しちゃったんだ…なんて事してるの、私？奏さんはすっかり固まっているし。ああ私のバカっ！…でもすぐく奏さんは暖かくて良い匂い…。

私はなんだかまともに奏さんの顔が見れなくなって俯いてしまう。どうしよう、どうしよう？

コンコン

「二人共、起きて〜。朝食出来たからさ」

あっ、ちよっ、う、どっどっしよう、楓さんがき、来ちゃった。

えと、えーと…

「はいるよ？」

あっ、入って来ちゃ駄目ーっ！

そんなこと思っても気が動転して私は奏さんに抱き付く感じで固まってしまってる。

そして楓さんが入って来た瞬間空気が凍り付く。

私は楓さんを見る。

奏さんも楓さんを見る。

「何を」

楓さんの口角が吊り上がる。

「してるのかな？」

眉が吊り上がり、目が見開かれる。

「奏ええっ！」

ドスの聞いた恐ろしい声で奏さんの名前を叫ぶ。

「…ひっ」

「ひいっ！」

怖い、怖過ぎる。

思わず奏さんにしがみつく。

「……………」

「か、歌澄ちゃん、大丈夫？」

大丈夫な訳が無い。奏さんの問いに首を強く振って答える。

「だ、だよね」

「奏、分かってんだろうなあ…」

段々と私達に近付いて来る楓さんの表情は鬼の様だった。

一步、また一步と近付いて来る。

怖いっ！

「に、義兄さん！歌澄ちゃん泣きそうになってるから今は押さえてっ

！」

「…あつ、それもそうだね。奏、降りて来たら真っ先に台所に来てね」

奏さんの言葉に楓さんの殺気が引いて行く。

そして楓さんは

「早く降りて来てね」

とだけ言うつと下に降りて行った。

「……………」

「……………」

沈黙が降りる。

「…えと…大丈夫？」

「……………すごく…怖かったです」

「…だよね」

本当に怖かった。死んでしまおうかと思った。でもよく考えると添い寝しちゃった私が悪いんだよね…。

「まあ歌澄ちゃん、取りあえず下に降りよう。それでさ…」

「…はい？」

なんだろう？

「あのさ、いい加減離れてくれない？動けないからさ」

「……あっ」

しつかりと奏さんにしがみついていた。

「ご、ごめんなさいっ！」

急いで奏さんから離れる。

ううっ、なんかまともに顔を見れないよ……。

「………そ、それじゃあ、い、行こうか」

「いつてきまゝす」

「……いつてきまゝす」

歌澄ちゃんと一緒に家を出る。

それにしても、今日も朝から大変だった……。寝てたし、なんか歌澄ちゃんと添い寝してるし、義兄さんはキレるし、今日飯抜きになるし、添い寝の事を聞いた二日酔いのアル中二人（姉さんと水波音ちゃん）に絡まれるし……。

「………でさん」

しかしまあ、良い匂いだったなあ歌澄ちゃん。姉さんと同じシャンプー使ってた善なのに姉さんの百倍良い匂いするもんなあ……。

「………なでさん」

しかも歌澄ちゃんのあの寝顔は反則だよ……抱き締めたい気持ちを押さえるのがきつかった。

……にしても今日も朝からよく食ったよな歌澄ちゃん。問答無用で……

「奏さん！」

「うわあっ！決して歌澄ちゃんが朝から食べ過ぎだなんてことは思っ  
つてないよっ！」

……っしまった！もしかしたら歌澄ちゃん気にしてるかもっ！  
「……？どうしたんですか？」

首を傾げて僕を見ている。

……気にしてなかったのかな？

「いや、なんでもないよ」

「……そうですか？それよりもその……」

「どうしたの？」

「ごめんなさいっ！」

頭が膝に着くんじやないかってくらいに頭を下げる歌澄ちゃん。

「……えーとごめんなさいって言うത്？」

……どれの事だろう？朝の事なのか、食事量の事なのか……。

「……その、そっ添い寝、なんかしちゃって」

『添い寝』のところまで赤くなるところがまた何とも可愛らしい。

彼方さんが抱き付くのも良く分かる気がする。

「あー、どうしてまた添い寝なんか？」

「……えと、その……暖かそうだったから……」

俯いて小さな声で何かを言っているけれど良く聞き取る事が出来ない。

「歌澄ちゃん、今なんて言ったの？」

「……だから、その……暖かそう……だったから……」

「だから何をいつてるのか……」

「暖かそうだからだっ」

「ふわあっ！」

「うわっ！」

いきなり話に入って来たのは陽子ちゃんだった。

「……陽子ちゃん……」

「陽子ちゃん？」

「むっふふっ 歌澄ってば奏君と添い寝なんかしちゃったんだっ」

だ・い・たんっ！」

「あうう……よ、陽子ちゃん……」

顔がびっくりするくらいに赤い歌澄ちゃんに陽子ちゃんが抱き付く。

「陽子ちゃん、一体いつの間に…」

「えとね、歌澄が頭下げてるあたりからかな。ねっ、奏君、歌澄と一緒に寝てどうだった？」

「っ！よっ陽子ちゃんっ！」

すると突然周りの空気が変わった。

なんだ？寒気がする…。

「いいから、いいから。で、どうだったっ？…っ、どしたの？」

「奏さん？」

「いや、ちよつとね…」 周囲に良く注意を向けてみると登校中の男子生徒達が僕を殺気の籠った視線を送っていた。しかも

「なんなんだあいつは。歌澄ちゃんや陽子ちゃんと気安くしゃがんで…歌澄ちゃんと寝ただとお…」

とか

「なんだあの糞野郎は…」

とか、終いには

「…歌澄さんと寝ただって…許せない、殺してやる」  
なんて声が聞こえてくる。

怖過ぎだよ、男子諸君。そりゃあ寒気もするってもんだよ…。

うーん、殺気がギンギン。

「…奏さん、一体どうしたんですか？」

「いや、なんでもないよ、なんでも…」

そういえばこの二人、男子に物凄い人気があるんだっただな…。

「そんなことよりさっ、歌澄との寝心地をどうだったのって聞いているのさ。さあさあさっさと白状しなっ」

「えーと…」

「うわああっ！かつ奏さんっやめてっ！」

「んむぐぐっ」

歌澄ちゃんに口を押さえられる。

「にはははは〜 歌澄をからかうのはやっぱ楽し」

「…むう〜」

「むくれちゃってかあ〜わいっ さつさと学校にゴーだよん、にははは〜」

それにしても歌澄ちゃんって最初は表情の乏しい娘かと思ったけど、その変わりになかなかどうして分かりやすく可愛らしい反応するじゃないか。顔じゃなくて態度とか動作で感情表現してる感じだな。表情が変わらない訳じゃないけどさ。

「…奏さん、どうしたんですか？置いて行っちゃいますよ？」

「ほらほらっ、さつさといっくよ〜」

「あ、うん。今行くよ」

三人で学校に向かう。僕だけ男子達の熱烈(?)な視線を浴びながら。

絶対学校でもこの地獄の業火の様な視線に晒されるんだろうなあ

学校に行くの怖いな……

## 6・僕と彼女の朝の情事？と登校風景（後書き）

どうも、雨永です。如何でしたでしょうか？

物語の展開が遅過ぎですね。やっぱり行き当たりばったりは駄目で  
すね、かと言って計画性あるわけじゃないんですよね（笑）

評価・感想・優しい批評待ってます

## 7・僕と彼女のラブレターと嘘・真実（ほんと）（前書き）

更新遅くて面目無いです。

今回はシリアスだったり、戦ったりと新しい事に挑戦！みたいな感じ  
じです。

あと、奏の過去もちろほらと垣間見れます。では、本編をばどござ  
っ！

## 7・僕と彼女のラブレターと嘘・真実(ほんと)

僕は自分の下駄箱の前にいる。男子の殺気を浴びながら…。

「……はあ」

どうしたもんかなあ……。きつと教室に行っても殺気を浴びる…いや、きつと襲われるなあ…。

これから起こりそうな出来事に暗澹たる気分になっていると陽子ちゃんに呼ばれた。

「奏くん！ちよつとちよつと！面白いものがつもじゅっ」

「？」

何があるのかと行ってみると歌澄ちゃんが陽子ちゃんの口を押さえながら抱き付いていた。

「……えーと、何してんの？」

「…かつ奏さんっ。なんでもないよ、なんでもないから」

「もがっ！もがっ！もがもがっ！」

必死に陽子ちゃんの口を押さえる歌澄ちゃん。陽子ちゃんも必死にもがいて歌澄ちゃんの手を口許から避けようと……。ん？何やら陽子ちゃんがしきりに歌澄ちゃんの手元を指差していた。

「…ん？歌澄ちゃん、その手に持つてるのって…手紙？」

「…あっ、これはっ」

慌てて手紙を後ろでに隠す。それと同時に陽子ちゃんの口が自由になる。

「ぶはあっ、奏君、歌澄ったら下駄箱の中にラブもっ！」

「…だからやめてっば〜」

慌てて口を押さえる歌澄ちゃんとまた口押さえられてる陽子ちゃん。何やってんだか…。

にしてもラブもってなんなんだ？

「ぶはあっ！ごめんごめん〜 つい楽しくてね〜」

「…もじゅっ」

ほんと何やってんだか…。というか僕はなぜ呼ばれたんだ？

……ん？歌澄ちゃんの足下に何が…。

拾ってみるとさっきの手紙だった。

「…あつ」

「ありやりや」

その手紙には『日永歌澄ちゃんへ』と書かれている。そして裏には何も書かれてなく、ハートのシールで封がされている。

「……これって、ラブレター？」

二人に聞くと歌澄ちゃんはもじもじと、陽子ちゃんは笑いながら頷く。

「これまたベッタベタなラブレターだね…」

「だよね〜っ、見た時我が目をうたがっちゃったよ〜」

「あう……。まあ正直私もびっくりしました」

あ、そういえばこのラブレター貰ったのって歌澄ちゃんなんだよな…。

一体何処のどいつだ？ラブレターを送ったのはっ！って何熱くなってるんだ、僕は。

「歌澄ちゃん、もう中身は見たの？」

「…ただけど」

「よっし、じゃあ皆で読もうズエ〜」

「いいね、それ」

「…ええっ！良いのかな？」

「さあ？どうなんだろう〜」

「大丈夫だよ、皆で読んじゃおうよ」

歌澄ちゃんは少しばかり逡巡してから、

「…分かりました、じゃあ開けますよ」

三人で頭を突き合わせてそのラブレターの文面を覗く。

『突然この様な手紙を出してしまい申し訳ありません。』

ですが、どうしても貴女に僕の思いの丈を伝えたいのです。

放課後、第一体育館の裏で待ってます

高城 雪

「……………」

「……………」

「……えーと、随分とまじめな感じだね？」 確かにまじめでしっかりした感じのラブレターだけどなんか気に食わない。

「そだね〜。なあ〜んかつまんない」

ちよつとしたうさん臭さを感じるんだよね。あんまり良い予感がしない。

「全くだね。外がベタなら中もベツタベタだったね」

陽子ちゃんも何か思うところがあるのかさつきからちよいちよい考え込むようにしている。

「…陽子ちゃん、奏さん、そろそろ行かないと」

「あ、うん。そだね、行こうか」

「じゃあ教室へゴーだねん」

道すがら陽子ちゃんが歌澄ちゃんに聞こえないように話し掛けて来た。いつになく真剣な顔で。

「奏君、放課後覗きに行くよっ」

「了解っ」

当たり前だっ！

僕は今教室に入りたくない。なぜなら入ったら間違いなく襲われるから。

どうしてそんなことが分かるのか？それは、あのラブレターの事を考えながら教室の戸に手を掛けようとしたら中から『座留の野郎を血祭りにするぞっ！！！！おオオオオオオッ！！！！』という男子達の野太い叫び声が聞こえて来たから。

さて、どうしたもんか…。

……よしっ！こうしてても仕方ないっ！

そして、教室に入るとクラスの皆の視線が集まる。

だ、男子達が禍々しいオーラを出しながらジリジリと詰め寄って来る。

「……えーと、皆どうしたの？」

「どうしたもこうしたもあるかあっ！！！！日永歌澄ちゃんと岸和田陽子ちゃんと朝から仲良く登校とはお前何様だあぁっ！！！！」

なんか目がヤバイよ、多賀太郎君。

「何様だつて言われても困るんだけど…」

「うるさいっ！！黙れえっ！！」

えええええ。

「者共おおっ！！あいつの眼鏡を谷折りにして、ケチヨンケチヨンに伸してやれえええええっ！！！！」

『オオオオオオオッ！！！！』

男子が三人、三方から襲いかかって来るのを後ろに下がって避ける。三人が衝突して倒れたところで太郎が

「怯むなっ！！どんだん行けっ！！」

と号令を掛ける。

すると突然太郎が叫び声を上げた。

見ると太郎が大きめの丸眼鏡を掛けた三つ編みの委員長・城戸夏水きとなにアイアンクローをかけられていた。

「太郎、今日はテストなの。分かってる？」

その声は何処までも冷淡なものだった。周りの男子達が息を飲む。

「夏水、確かにそうかもしれないが、今は、我が、男子のアイドル達があががあっ！！痛いっ、夏水痛いっ！！！！」

太郎の頭からミシミシツという音が聞こえて来る。

「貴方達、座留君に今すぐ謝ってテスト勉強しなさい」

『は、はいいっ！！すいませんでしたーっ！！』

おおっ、これが鶴の一声ってやつか…。

夏水の一声で僕を困んでいた男子達が一斉に謝る。その光景は何とも言えない居心地の悪さがある。

「えーと、別に気にしてないから…」

そう言うとなんか睨まれた。なんでだ？

「委員長、助けてくれてありがとうね」

すると夏水は太郎にアイアンクローを掛けっ放しで

「どういたしまして。まあ、テスト勉強の邪魔だったからね」

「確かにね」

「なっなあ、夏水、頭潰れる…早く離し…て…後…生だか…らあ」

太郎は必死に夏水に懇願する。

「じゃあ、座留君に謝りなさい。そしたら離して上げる」

「…それは…無理…だっ」

夏水の目が座り、手に更なる力を込めている。太郎の頭がミキツと言っ音を立てる。

「あがががっ！いたっ痛いっ！頭がっ！頭があっ！」

…… 本当に痛そうだよ。

「なんで謝れないの？」

「なっ、なぜならっ…さっきのはっ…すべて我が…学年の男子…達のつ総…意だから…だっあがががっ」

更に力を込める夏水。太郎の顔からなんかいろんな汁がでてるよ…。

夏水はちよつと考える素振りを見せ、

「謝らないと向こう一ヶ月デートは無しにする」

「なっ！！奏っ！さっきはすみませんでしたあーっ！！」

「……うん、別にいいよ。気にしてないから…」

太郎の頭から夏水の手が離れる。

「はあ…はあ…た、助かったあ。いいか、奏！あんまり歌澄ぢやんとかと仲良…ふくお！！！」

太郎はズドツツと言う強烈な音と共に股間を押さえながら悶絶する。

「なんで、さつきからあなたは、彼女の前で、他の、女の、話、ばかり、喋ってんのよっ」

夏水は言葉を区切る度に太郎を蹴りつける。

終に我慢ならなくらしい委員長。嫉妬してたのか…。

尚も足蹴にされ続ける太郎。

………もうほつとこう。

「おはよ、奏。朝から災難だったなあ」

「おはよ、謙治。そう思ったんなら助けてくれよ」

それを聞いた謙治は本当に嫌な顔をした。

「嫌だよ。あいつらの尋常じゃ無かったしさ、それにあれ位お前なら余裕だろ？」

「………そんな訳ないだろ？」

「そう、もう僕は………」

「………そう、だな。無理だよな、あんなの」

「すまないといった感じの謙治。」

「………あっ」

「………奏、謝ったらぶん殴るぞ？」

謙治に世話掛けっ放しだな、僕は。

「謝らないよ。それより謙治、陽子ちゃん滅茶苦茶良い娘だったぞ？」

「ふん、岸和田陽子がどんなに良い娘だろうが和心に敵うはずないだろっ！」

……だめだこいつ。和心ちゃんも苦勞してんだろうなあ。

「…あれ？ところで矩子はまだ来てないの？」

矩子の席をみると空席だった。いつもはもう来てる筈の時間帯なのに…。

「みたいだな」

「珍しいね、何してんだろ？」

「さあ？千央と朝から乳繰り合ってたんじゃない？」

何こいつ…。

「な、なんだよ。まあ、その内来るだろ。そんなことより生物教えてくれよ」

「そうだね、それじゃ教科書持って来て。取りあえず要点だけ教えるから」

ちよつとすると呉羽先生が入って来た。

「お前ら、席にさつさと…って城戸、多賀お前ら何やってんだ？」

「五月蠅かったので制裁を加えてました」

まだやってたんだあの二人…。

「あつそ、痴話喧嘩もいいけどさつさと席に着け」

夏水は少し俯いて

「分かりました」

と呟くと太郎を引き摺りながら席に戻っていった。

「全員席に着いたな。朝のSHLを始める。今日でテストは終わるだ、カンニングはしないように。終わったらハメ外していいけどサツに掴まらない様に、以上」

それだけ言つてさつさと出て行った。

入れ違う様に矩子が入つて来た。

「矩子、おはよ。遅刻なんかして、どうしたんだよ？」

「ああ、不覚にも寝坊してしまつてな」

駆けて来たのか息が少し上がつてる。「へえ、珍しいね」

「ふつ、昨夜ちよつと燃え上がり過ぎてしまつてな」

呆れて物も言えないよ…。

「それより奏」

「なに？」

急に真顔になると訳がわからない事を言い出した。

「岸和田陽子とあまり関わらない方が良い」

「は？」

矩子はそれだけ言つと自分の席に向かつていった。

訳がわからないよ、矩子…。

テストが無事に終わり、放課後。僕は今陽子ちゃんと一緒に第一体育館裏の茂みに隠れている。

歌澄ちゃんの断わりを見届ける為に。

「歌澄ちゃんが此所に来てから五分くらい経つけど、なかなか来ないね」

「そだね、歌澄を待たせるなんて許せないねっ」

それにしても、なんで陽子ちゃんに関わっちゃいけないんだろうな…。理由くらい言えつての。

「あつ、ほら奏君つ、来たよっ」

「あ、ほんとだね」

やって来たのはなかなかのイケメンだった。

あいつが高城雪たかしろゆきか…。なんかいけ好かないな。

「ごめんね、待たせちゃったね」

謙治に負けず劣らずの爽やかさで謝る高城。

「いえ、私も今此所に来たばかりですから」

あまり表情を変えずにデートの待ち合わせの時の会話の様な返答をする歌澄ちゃん。

ただ、高城は歌澄ちゃんのその表情のなさど無感動な返答に少したじろいでいた。

「え、えーと早速だけど本題に入るよ、いいかな？」

「いいですよ、私に伝えたい事つて何でしょうか？」

高城は決心した様に歌澄ちゃんに告白した。

「日永歌澄ちゃん、君が好きだ。僕と付き合ってくれないか？」

見事に潔い告白。

そういえば歌澄ちゃんはこの告白を受けるんだろうか？

「ごめんなさい、高城さん。私は貴方の思いに応えることは出来ません」

「なっ！！」

間髪を入れずと言ってても良いくらいの間で告白に答える歌澄ちゃんに僕は心の底から安堵していた。

「んふっ 奏君すんごく嬉しそうな顔してるよっ」

「えっ? いや、その…」

陽子ちゃんの冷やかしに言葉を濁してから歌澄ちゃんの方を向くと何やら高城の様子がおかしかった。

「ど、どどどうして、ぼ、僕、の思いにこた、応えられないんだ?」  
何やら声が震えている。

「…え、えーとそれは…他に好きな人がいるから…です」

少し頬を染めて言い辛そうに応える歌澄ちゃんに高城も顔を赤くして悶えていた。

「くっ…駄目だっ! 日永歌澄! 君は僕と付き合う宿命にあるんだっ  
!」

高城は気を取り直した様に詰め寄ると訳の分からない事を言い出した。

「…?何を言ってるんですか?あの私この後用事があるのでもう行ってもいいですか?」

「駄目だっ! どんな事をしてでも僕と付き合っつて貰っぞ!」

なんか雲行きが怪しくなっつて来たよっ。

「奏君、いざとなっつたら歌澄を助けに行くよっ」

「うん、もちろん」

歌澄ちゃんは高城の様子に後退りをしたけど高城に腕を掴まれる。

「…なっ何をするんですかっ!」

「既成事実を作るんだよ」

「きゃっ!」

最早さっきまでの爽やかさのかけらも無い高城に歌澄ちゃんが押

し倒される。

その瞬間僕の頭は真っ白になった。

「なっ、何をするんですかつ！」

「既成事実を作るんだよ」

「きやつ！」

高城さんに私は押し倒され馬乗りされる。

高城さんの目はさっきまでの優しい目じゃなかった。その目は狂気に満ちていた。その手がスカートを捲り上げ、パンツに手を掛けようとする。

恐怖で声を上げる事が出来ない。

怖い、怖いっ、怖いよっ！誰か、誰か助けてっ！！奏さんっ！！！！

その瞬間、

「あがあっ！！！」

高城さんが吹き飛ぶ。

な、何が？……かな……で、さん？

奏さんが立っていた。その顔には何の表情も感じられない。奏さんは深く昏い深淵の様な漆黒の瞳で高城さんを見ていた。

「なっ何だ！お前はっ！」

高城さんが叫んだ瞬間に奏さんは私の目の前から掻き消え高城さんの後ろにいた。

「なっ！？がっ！！！」

高城さんが振り向いた瞬間に奏さんはアイアンクローを掛けた。

「あがつぐうつ！な、なんだっ！お前っはあがああっ！」

「貴様がなんなんだ？」

その声はあの奏さんのものとは思えない程の冷たい声。

「歌澄っ！」

「……陽子……ちゃん」

陽子ちゃんが駆けて来た。

「歌澄っ、大丈夫？」

「……うん、怖かったけど大丈夫」

「そっか、よかった〜奏君は？」

「……あそこ」

奏さんの方に指を差すのとほぼ同時に高城さんが叫んだ。

「お前等あつ！日永歌澄を囲めえっ！」

「なっ！」

「えっ！？」

「あやっ？嘘っ！」

高城さんの叫びと共に黒服にサングラスの屈強そうな大男達が私達を囲んだ。

「……なんでこんな事に。」

「僕を離さないとうなるか分かってんだろっなあ？」

奏さんが高城さんから手を離すと逃げる様に大男達の後ろに隠れると

「お前らっ！あいつを伸してやれええええっ！」

そう叫ぶと大男達が奏さんに襲いかかった。

「奏さんっ！」

「奏君っ！」

「………糞がっ」

男達の一人が殴りかかって来たのを片手で受け止めると他の男達にその男を投げ付ける。

「……ぐおおあああっ！！！」

そして、タンツと言つ音と共にその場から消えたと思つた瞬間に残っていた男達は次々に倒れ、奏さんは私達の目の前が現れた。

「なっ……ななななっ！」

「……何が？」  
「す」

目の前で繰り広げられた光景にただ啞然とするしかなかった。15人くらいは居たであろう大男達が10秒かそこらでなす術無く倒されていた。

「ひっひいっ！」

「あっ、このっ！」

高城さんがたまらずに逃げようとした。でもそれはあつと言う間に奏さんに阻止された。

「何処に行くつもりかな？高城雪さん」

奏さんの表情はさつきまでの無表情と違って微笑んでいた。その微笑みは暖かいものじゃなく、ゾツとする程の冷たい微笑み。

「ひっひあああっ！がっ！」

蹴り飛ばされる高城さん。奏さんは蹴り飛ばした高城さんに近付くと頭を掴み体育館の壁に押さえつけた。

「あぐうっ！」

「あれだけの事をしたんだ、何されたって構わないよね？」  
手に込める力を強くしようとする。

「ひっ！」

「くたばれ」

奏さんを止めなきゃっ！

「奏さんっ！もう止めてっ！」

その声を聞くと同時に高城さんから手を離す。

「…えっ、あ？」

「ひっひやあああっ！」

高城さんは情けない叫びを上げて逃げていった。

気がつくとも全部終わっていた。高城雪は情けなく逃げて行き、高城のSPらしき大男は全員倒れている。陽子ちゃんは感嘆したように、そして歌澄ちゃんは少し泣きそうになって僕を見ていた。

久しぶりにやっちゃったな、もうキレまいと思ってたんだけどなあ……。まあ前キレた時よりは被害が少なかったのは僥倖だったな。

「歌澄ちゃん」

「……は、はい」

少しおっかなびつくりといった感じで返事をする。

……当然と言えば当然か。

「大丈夫だった？あと、怖がらせてごめんね？」

「……あつ、はい、大丈夫。えーと助けてくれてありがとう」

「……」

「……」

気まずい沈黙が降りる。

「……あのっ！」

「……あのっ！」

「……あつ」

……っ！被ったあああつ！なんてベタなっ！

思わず俯く。歌澄ちゃんの方を見ると顔を赤くして俯いてた。

「なァーにやっつてんのさっ二人して」

陽子ちゃんは呆れた様な楽しい様な顔をしていた。

「二人共いろいろと話したい事はあると思うけどっ！私はお腹が空いたのさっ だから、話は帰り道でしろっ」

「……それもそうだね」

「……うん」

陽子ちゃんが上手い事まとめてくれて助かったよ。

「…それで二人で見てたんだ」

うっ、白い目で見られた。

「う、うん」

「そだよっ、こんな楽しい事無いからね」

帰り道。陽子ちゃんの提案通りにさっきの事について話している。

「…むっ。でも、今回はお陰で助かったから怒らないよ」

ふいっ、よかった。

「それにしても、奏君すごかったよね？歌澄が襲われたのを確認したと思ったら私の横からいなくなっで、歌澄のいたところにいるんだもん。あれっでやっぱ瞬歩？」

「い、いや瞬歩ではないよ」

「…じゃっじゃあ瞬動術？」

目を輝かせている二人。物凄い食いついてるよ、どうしたもんかなあ…。

「えっ、えーと…縮地…かな？」

「…すごいっ！！」

し、失言だったかな…、さっきより目が輝いてるよ。

「ど、どうして使えるの？奏さんはネ○まに出て来る細目忍者少女みたいに忍者なの？」

「…僕は忍者じゃないよ。あと、どうして出来るのかはちょっと教える事は出来ないよ」

これ以上踏み込まれるのはちょっとまずいな…。

「…そうですか、残念です」

「えっ！なんでさっ」

「陽子ちゃんっ！」

僕が急に大きな声を上げたものだからびっくりしたように「はいっ！」

と返事をしていた。

「ほんと勘弁して下さい」

陽子ちゃんに頭を下げると呆れた陽子ちゃんは呆れた様に

「仕方ないな」

と言つと

「じゃあそんな奏君の為に話題を変えてあげちゃおう。奏君っ！君滅茶苦茶強いねっ！そう思わないっ、歌澄？」

「……うん、怖いくらいだった」

……それも当然、か。それでもこのまま僕が怖い人になるのだけは勘弁だなあ……。

「えーとき、僕キレると前後不覚になるみたいで……、正直な話あの時歌澄ちゃんが襲われたのを見た瞬間に頭が真っ白になって気が付いたらあんな事に……」

歌澄ちゃんは神妙な顔して頷いた。

「……そうだったんだ」

「え〜っやっぱこう言う時は『愛の力だ』って言わなきゃな駄目だよっ、奏君っ！」

いきなり突拍子もない事を言い出す陽子ちゃん。

「なっ何それ……」

「……訳分からないよ、陽子ちゃん」

「訳が分からない筈があるかあっ……!!」

ビシッと僕達に指差す陽子ちゃんを見て、僕と歌澄ちゃんは顔を合わせる。

「一緒に寝たんでしょ？だったらもう恋人・夫婦という事よっ……!!」

………は？この娘一体何を……？僕と歌澄ちゃんが恋人・夫婦？

僕と歌澄ちゃんは慌てて陽子ちゃんに反論する。

「つてえ！何突拍子もない事言つてんの、陽子ちゃん……!!」

「そうだよっ！私と奏さんはまだそんな関係じゃないよっ……!!」

その反論を聞いた途端に陽子ちゃんは玩具を見つけた子供の様な満面の笑みを浮かべた。

「んふっふっ 歌澄」

「…なっ何？」

陽子ちゃんは歌澄ちゃんの耳元でゴニョゴニョと囁いた。すると歌澄ちゃんは『はっ！』とした表情をしてから、顔を一気に真っ赤にして頭からプスプスと湯気を出し始めた。

「歌澄ちゃん、どうしたの？」

「な、ななな何でも無いのですよっ！」

信じられないくらいに動揺している歌澄ちゃん。しかも、

「語尾がおかしくなってるよ？」

「そ、そそそんな事は無いでございます事よ？」

語尾が余計に酷くなってるよ…。

「そ、そう」

一体陽子ちゃんに何を言われたんだろ？

歌澄ちゃんはニヤニヤしている陽子ちゃんを睨み付ける 睨み

付けるけど全然怖くない。むしろ、なんだか微笑ましい。

「陽子ちゃ…っ！」

「おおっと！我が家がすぐそこにっ！じゃねっ、歌澄、奏君！」

陽子ちゃんは歌澄ちゃんが怒鳴るのを遮る様に叫んで風のように去っていった。

「もうっ、陽子ちゃんったらっ！！」

プンスカプンと怒っている。

それにしても歌澄ちゃんは一体何を言われたんだろ？

陽子ちゃんと別れた後、気を取り直した歌澄ちゃんが

「え、えーと、今日は本当にありがとうがとうございました」

と丁寧に謝ってから僕達は再び歩き出した。

二人っきりの帰り道。

僕は今日歌澄ちゃんと陽子ちゃんに対してやった嘘に思いを馳せていた。

随分と久しぶりにキレたと思う。

『えーとさ、僕キレると前後不覚になるみたいで……、正直な話あの時歌澄ちゃんが襲われたのを見た瞬間に頭が真っ白になって気が付いたらあんな事に……』

頭が真っ白になったのは真実、キレた事も真実。でも、前後不覚になるのもその間に何をしていたのか分からなかったというのは真つ赤な嘘。

僕はキレた時冷静になる。

あの時、頭が真っ白になった後、真つ先に思い浮かんだのは君を襲ったあの男を殺す事。

男達を前にした時考えた事は君や陽子ちゃんがいるからあまり派手に出来ないなんて事を考えてた。

……こうやって考えて見ると僕は確かに前後不覚かもしれないな。

……なぜか分からないけど いや、本当は分かってるけど

僕は君に嘘をつきたくない。でも、君が本当の事を知ったら僕は嫌われるんじゃないか、そんなことばかり考えてしまう。

僕は怖い、君に嫌われるという事がすごく怖い。君は本当の事を知っても僕を嫌いにならないだろうか？

歌澄ちゃん、こんな『人殺し』の僕だけど嫌いにならないでいてくれるだろうか？

7・僕と彼女のラブレターと嘘・真実（ほんと）（後書き）

なんかもうあれです、展開がおかしかったり無理矢理だったり……  
まだまだ精進が足りないですね。

ぶっちゃけ題名の『真実』<sup>ほんと</sup>は必要なのか？って話ですね（笑）  
評価・批評・感想待ってますっ！！

## 8 ・僕と彼女の年上キラーと事件（前書き）

どうも雨永です。読者数が1000人越えました！

ありがとうございますっ！

本当に感謝してもしきれませんっ！もう嬉しくて堪りませんっ！

それでは本編をお楽しみ下さいっ。

## 8・僕と彼女の年上キラーと事件

「ただいま」

「…ただいま」

「おかえり」。歌澄ちゃん、昼食出来てるよ。奏は無しだよ」  
家に入ると義兄さんの声が聞こえて来た。

「…そういえば今日は飯抜きだったんだっけか。」

「歌澄ちゃん、僕は先に仕事してるからご飯食べたら来てね」

「…えーといいんですか？」

「いいよ、じゃあ僕は部屋に行ってるから」

「…じゃあすぐ食べて行きますね」

歌澄ちゃんはそう言ってダイニングに向かって行った。

まあ絶対にすぐには来れないだろうな…。

「ふう」

「…腹減ったなあ。」

歌澄ちゃんと出会ってから随分と厄介事が増えたよな。かと言ってそれが嫌な訳じゃないんだよな…。まさかキレる様な事があるとは思わなかったし…駄目だ、思い出したらまた嫌な事考えてしまう。「とにかく着替えてさっさと仕事に…あっ」

着替えようとした時に薄汚れた布に包まれた棒の様な物が目に入った。

「…そういえばしまつの忘れてたな…」

いつ見てもあの頃の事を思い出す。

僕のもう一つの家族。

…鏡さん、ミライどうしてるかな。

「取りあえずしまいにいくか」

座留家の地下倉庫。此所には僕の血と汗と涙の結晶である保存用の漫画、貴重な資料、あの頃の思い出の品が保管されている。

「これでよしっ」

あの頃の品を入れてある黒い柩の様な箱に棒の様な物を収める。

「……それにしてもそろそろ今月も終わるしな、原稿上がったら漫画と資料の整理しないとな」

……歌澄ちゃんに此所の整理も手伝ってもらおうかなあ。

僕はそんなことを考えながら地下倉庫（室温、湿度共に調整可能）を後にした。

部屋に戻って着替えた後僕はすぐに原稿に取り掛かった。

「昨日は寝ちゃったからな、こんな時クロックアップが使えたら楽そうだよなあ……」

そんな阿呆な事をばやいたりしていると歌澄ちゃんが多少慌ててやって来た。すぐに行きますと言ってから二時間は経っていた。

「ご、ごめんなさいっ、遅くなっちゃいました」

「気にしなくてもいいよ、それじゃそこに置いてるからよろしくね」  
「……はい」

ガリガリ、ガリガリ……。  
部屋に響くペンの音。僕も歌澄ちゃんも何も喋らずに作業している。

「よしっ、ペン入れは終わりっ。今からトーンを張るけど、ベタと消しゴムかけるのが終わったら手伝ってね」

「…分かりました」

僕はすぐにトーン張りに取り掛かった。

午後三時半。今日は気を使ってくれたのか義兄さんは部屋にお茶と芋羊羹 まだまだあるのか… を持って来てくれた。

「ありがとう、義兄さん」

「いやいや、二人共頑張ってるね」

「…ありがとうございます」

義兄さんは歌澄ちゃんにお礼を言われた後

「あっ、そうだ、奏。頑張ってるみたいだから夕食は食べていいよ」  
「」

そう言って出て行った。

「…やったっ！ありがとうっ、義兄さん！」

「…よかったですね、奏さん」

「いや、ほんとね。よかった…。じゃあどどんトーン張って行くかー！」

「…はいー！」

夕日に照らされた部屋で僕達はひたすらトーンを張っていく。

「歌澄ちゃん、それ取ってくれない？」

「…これですか？」

「ううん、その点でS・302って書いてる…そう、それぞれ。ありがとね」

明日の午前中には終わりそうなペース。

「…奏さん、此所はどうするんですか？」

「そこは…これをお願い」

「…分かりました」

作業は快調に進んで行く。

少しすると義兄さんが僕達を呼んだ。

「奏、歌澄ちゃん。ご飯だよっ！」

「わかったっ！じゃあ夕食にしよっか、歌澄ちゃん」

「…そうです、お腹が空きました」

ほんと歌澄ちゃんは燃費が悪過ぎだよな。

「いただきます」

「…いただきます」

「いただきます」

夕食の時間。今日は姉さんと水波音ちゃんがいなかった。

「義兄さん、姉さんと水波音ちゃんがいないけどどうしたの？」

「日由ちゃんは今日は忙しくて帰れないってさ。水波音ちゃんは知らないよ」

姉さんも大変なんだなあ……まああの会社が何なのか僕には良く分からなただけだよ。

「姉さんも大変だね」

「そうだね。でも日由ちゃんは好きであの会社やってるから大変というよりは楽しんでるだろうね」

義兄さんはなんだか眩しい物を見る様な目でそう語っていた。

「……歌澄ちゃん、なんか義兄さんが眩しいよ……って聞いてないね」「むぐっ？」

「いや、何でもないよ」

歌澄ちゃんはやっぱりひたすら食べていた。

「ご馳走さま。それじゃあ僕は先に作業してるよ。食べ終わったら来てね」

「むぐっ」

僕は食器を片付けた後部屋に向かった。

一時間後、やっと歌澄ちゃんが夕飯を終えて来た。

「……ごめんなさいっ、また遅くなっちゃって」

「ああ、大丈夫大丈夫。早速だけどこれお願い」

「あ、はい」

今日は寝ないで頑張らないとな。

草木も眠る丑三つ時。ひたすら作業を続ける僕と歌澄ちゃん。

「歌澄ちゃん、それ取ってくれない？」

「……………はい、こ、これですねっ、どござ」

「どござ」

……………歌澄ちゃん、瞼がいつもより下がってるよ。

「歌澄ちゃん、大丈夫？」

「……………はい、…大…丈…く…っは！す、すみませんっ！」

歌澄ちゃん力尽きそうだ…。

「歌澄ちゃん、トーン張りは後少しだから頑張って！」

「…はいっ！」

「よし、これでこっちのトーン張りは終わり。そっちはどござ？」

「お、終わ…り…まし…くー」

歌澄ちゃんはトーンを張り終わった原稿を僕に渡すと同時にテーブルに突っ伏して寝てしまった。

「…ご苦労様、歌澄ちゃん」

歌澄ちゃんに布団を掛けた後、机に向かう。

後は修正なりなんなりすれば原稿があげられる。

「よし、一丁気合い入れてやりますか」

煌めく朝日。辺りに鳴り響く鳥達の囀り。

「…やっと、やっと終わったあ〜」

思わず机に突っ伏す。時計を見ると時間は午前四時半。

「寝るかなあ…ん？なんか窓の方から視線を感じる様な…」

窓の外を見てみると鳥や新聞配達の人しかいない。それでも尚、誰かがこの部屋を観察している気がする。

「嫌な感じだな…」

僕は窓とカーテンを閉め、目覚ましをセットした後布団に入った。

「……でさん」

だ、誰だ…。僕の眠りを妨げるのは。

誰かが寝ている僕を揺すっている。

「…奏さんっ」

誰かは僕を揺すり続ける。

「…ううつ、も、もう少し……だけ…」

「…奏さんっ！起きて下さいっ！」

「ん、ん〜。んあ、歌澄ちゃん…どしたの？」

歌澄ちゃんは何やら慌てている様に見える。

「…どうしたもこうしたも無いですよっ！原稿描かないといけないのにどうして寝てるんですかっ、締切り今日じゃないんですか？私も寝ちゃいましたけどだからって奏さんまで寝る事ないじゃないですかっ！」

面白い程の慌てっぷり。部屋の中をあっちへ行ったりこっちへ来

り。

「歌澄ちゃん、まず落ち着いて」

「こ、これが落ち着いてられすかつ!」

「られすか?!歌澄ちゃん、絶賛パニック中だね。」

「大丈夫だよ、歌澄ちゃん。もう原稿は出来上がってるからさ」

「…そ、そう…なんですか?よ、よかつたあ」

—安心したのかペタリの床に座り込む。

「…気付いたら寝てて、起きたら奏さんが寝てるし、時間も午後二時だったしどうしようかと思っただんですよ?」

「そつかあ、迷惑掛けちゃったね……歌澄ちゃん、起きたの何時って言った?」

嫌な予感が……。

「…二時ですけど」

時計を見ると時刻は二時十分。

………や・ば・い。

急いで興談社に電話する。

「…どうしたんですか?」

「今日の三時迄に入稿しないといけないんだ!」

「…えっ!?!」

歌澄ちゃんが驚きで目を見開いているのを見た後電話に女性の声が流れる。

「もしもしっ!」

『こちら興談社アフタースクール編集部です』

「座留奏ですけど、水波音さん、居ますか?!?」

『あっ、奏君?お久々』

「凧さん…いいから水波音さんに変わって下さい」

『わかつたわよっ!連れないわね。…水波音っ、奏君から電話よっ。………つたくなんで水波音が奏君の担当なのよっ………』

凧さん、聞こえてるよ。

『………はい、水波音』

『どうもん、やつほーい、奏君つどつたのかなあ〜ん?』

「原稿出来ただけ、此所から興談社迄って結構あるから車出して欲しいなって」

『…………ごつめ〜ん、今忙しくて無理なんだよねっ』

今の間は何なんだ?

「そつか…じゃあ今から行きますんで」

『あっ、奏君』

「なんです?」

『髪の毛は落として来てね』

「…………なぜ?」

『落として来ないと原稿受け取って上げないから』

「…………はい」

電話を切る時に受話器の向こうから編集部の皆さんの歓声らしい叫びが聞こえて来た様な気がした。

「……………何があつたんだ?」

「奏さん、大丈夫なんですか?」

歌澄ちゃんが心配そうな顔で僕の顔を覗く。

「うーん、頑張れば間に合うよ。取りあえず僕はちよつと洗面所に行つて来るよ」

洗面所で髪の毛の染料を落とした後歯磨きをし、顔を洗つ。そして部屋に戻ると歌澄ちゃんは僕を見て驚いていた。

「……奏……さん？その髪どうしたんですか？」

「これは地毛だよ」

黒と白の髪。それが僕の本当の髪の色。黒髪に白い髪の房が幾つも混じっている。

「これちよつと変でしょ？だから皆気持ち悪がったりするかもしれない。だから普段は黒く染めてるんだ」

「……そんなことはないですっ！全然気持ち悪く無いですっ、とても似合っつて格好良いですよ！」

歌澄ちゃんは激しく首を振って答えた。

僕は感謝の気持ちを目一杯詰め込んで歌澄ちゃんに笑い掛ける。

「……そっか、ありがとうね。それじゃあ僕は原稿届けて来るから留守番頼める？」

「……………」

歌澄ちゃんは僕を見て何やら惚けていた。

「歌澄ちゃん？どうしたの？」

「……………へっ？あっな、なななんでしょう？」

「僕の顔に何か付いてる？」

歌澄ちゃんは激しく首を振って僕の言った事を否定した。

「……いえっ！何にもないですっ！」

「……何だっただんだろ？まあ、いいか。」

「歌澄ちゃん」

「はい、なんでしょう？」

「僕はこれから原稿を届けに行くから留守番頼める？」

「……はい、任せて下さいっ！」

歌澄ちゃんが玄関迄見送りに来てくれた。

うーん、ちょっと気恥ずかしいな……。まあ取りあえず、

「義兄さんとか買い物行って居ないみたいだけどよろしくね」

「…はい、もちろんです」

その後幾つか会話を交わしてから僕は外へ出る。

「それじゃ行って来ます」

「…いつてらっしゃい」

歌澄ちゃんは笑顔で僕を送り出す。

なんかこういうのもいいなあ…。

僕は自転車に跨がり家を出る。少し進んだところで自転車を止めて、近くに居るだろう二人に声をかける。

「彼方さん、要義兄さん。歌澄ちゃんに家で留守番してくれるよう頼んでますんで。あと、二人の他に誰かが僕の部屋を監視してました。だから気をつけて下さいね」

僕はそれだけ言うと全速力で自転車を漕ぎ出した。

「……………ばれてるし。要っ、お前なんかへマしただろっ!!」

「はああっ?なんで俺なんだよっ、へマしたのはそっちだろっ!」

「なんだとお?」

「やんのか?」

『何してるんですかあなた達は。あの少年が言っていたでしょ?私達以外の奴等がお嬢様を監視してるって』

「あいつの言葉なんぞ信用ならないな」

「なんでだよ?俺達に気付いてたんだぞ座留は。それに、座留のさ

つきの話が真実だろうが嘘だろうが警戒はすべきだよ。お嬢様はそういう立場に居るんだから」

「……ちっ。わかってるよ」

『それじゃ二人共しっかりとやってちょうだいね』

「了解」

午後二時五十分。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……あ、あと少しっ！」  
景色はどんだん後ろに流れて行っている。

午後二時五十五分。

「見えたっ！」

僕はドリフトで止まったあと、そのまま自転車を乗り捨てて興談社のビルに駆け込む。アフタースクール編集部は四階。渾身の力で階段を駆け登ると編集部の入口のところで水波音ちゃんが待っていた。

「はあ……はあ……はあ……はあ、お待たせ……しまし……た……はあ」

「ご苦労〜ご苦労〜 どれどれ〜」

水波音ちゃんは封筒から原稿を出して確認していく。

ボツになりませんように。ボツになりませんように。ボツになりませんように。

ボツにされたらたまったもんじゃない。

水波音ちゃんは原稿を封筒に戻して難しい顔をする。

「み、水波音ちゃん、ボツじゃない……よね？」

「……………」

黙り込む水波音ちゃんに思わず息を飲む。

なんで黙るの？

「ど、どうなの水波音ちゃんっ？」

「……………OKだよん」

「よ、よかったあ〜っ」

安堵で思わずその場にへたりこむ。

「取りあえず編集部で休んでねん あ、後やっぱりその髪の方が似合ってるよ〜」

… やっぱなんだかんだでいい人だよな、水波音ちゃんって。

「……………むう〜、改めて考えて見ると私今男の子の部屋に一人っきりなんだよね…」

よく考えると男の子の家に泊まったんだよね…………。

「はっはっはっはっはっ！」

恥ずかしさで床を転げ回る。

改めて奏さんの部屋を見回してみる。

作業机、ガラスボードのテーブル、部屋の大きさに対して多過ぎじゃないかというくらいの本棚と本棚を埋めている様々な本、床に積み上げられている資料用のファクション誌、そしてベット。

ベット、奏さんが寝てるベットかあ…………。

ベットにポフツと寝てみる。

「……………いい匂い」

奏さんが使っているベットはなんだか落ち着ける匂いがした。

男の子のだからって汗臭いって訳じゃないんだなあ…………。

「ふぁ…ふかふかでいい気持ち…」  
暖かい……。

そういえばさっきの笑顔も反則なくらいに暖かくて優しかったな。そんなことを思いながら奏さんのベットに寝そべっている内に私の意識は深い闇に落ちていった。

「……お嬢様は一体何をしてるんだ？」

「……わからん…」

お嬢様は座留の部屋の床を転げ回っている。今のところ周囲にこれといった動きもない。

一昨日から気になっていた事を聞いてみる。

「なぁ要」

「なんだ？」

「お前座留の義理の兄に当たるんだろ？」

「ああ、不本意ながらな」

なんだか不機嫌になる要。

「……要は座留の事嫌いなんだな」

「あんな奴がお嬢様に近付くつてのが心底気に食わない」

「…ははっ、マジなんだな。ずっと気になってた事があんだよ」

「なんだ、彼方？」

「あいつ、座留の奴さ、なんか血腥い気がすんだよな。ただ気がするっただけだから何とも言えないんだけどよ。それに話してみると悪い奴じゃないって感じはすんだ」

「……あいつを血腥いと思うのは正しいと思う」

要は逡巡してから曖昧な言葉で俺の問いに答える。

「そっか、お前にもはつきりは分からないのか……あっお嬢様座留

のベッドで寝てるよ」

「むっ……気に食わねえ……あいつ絶対いつか伸してやる……彼方」  
急に真面目な声で俺の名前を呼ぶ。

「どうした？」

「あいつは五歳から十二歳の頃まで行方不明だったらしい」

「……は？」

行方不明……か……。なんつーけつたいな過去を持ってんだよ座留の奴は。

「……おい、彼方。見ろ」

「なんだ、何か動きでも？」

「見ろ、玄関の前に怪しすぎる奴がいる」

「確かにな」

見ると玄関のところらに覆面をした大男が二人。一人は手に奇妙な形のナイフを持ち、もう一人は火炎放射器らしき物を持っていた。

ちよつとまずいな。

「若魚っ！今からお嬢様狙いと思われる不審人物をぶちのめすっ！」

『了解。しっかりとお嬢様を守るのよ、二人共っ！』

無線から若魚の激励が聞こえてくる。

「はっ！わからいでかっ！行くぞっ要っ！」

「つたりめえだっ！」

木の上から飛び下りて俺はナイフ男、要は火炎放射器男を蹴り飛ばす。

「そんな物騒なもん持って何してんだ、お前ら」

男達はゆっくりと起き上がるとナイフの男が野太いが落ち着いた声で答える。

「日永歌澄の護衛か……」

「はんっ！護衛じゃねえよ。俺はメイドさ。覚悟しろ」

「お嬢様には手出しさせねえ」

俺は手にごつい鉄の装甲の付いた手甲を着けて、その拳を男達に

向ける。その手甲には腰からコードが伸びている。

要は某魔法少女アニメにでてくるらしい銀と赤のグラブ・アイゼンとか言っらしいハンマーを男に向けている。

……要、なんか締まらねえよ。

心の中で要にツッコミを入れた後、俺達と男達は同時に動き出した。

ズズズッ

「はあ、やっぱり玉露だよなあ……」

僕は今興談社の四階休憩室で休憩中。三十分も全力で自転車を漕いだもんだから全然動く気にならない。

歌澄ちゃん待ってんだろうなあ……。

あの視線も気になるしなあ。でも此所から抜け出すのは骨が折れるだろうな。

「……………それで、凧さん、奈津<sup>なつ</sup>さん、茉美<sup>まみ</sup>さん。離れて下さい」

僕はソファの真ん中に座っている。

その僕を囲む様に右に凧さん、左に奈津さん、後ろに茉美さんが密着している。

「むっふふ やっぱ若い子は良いわね」

「奏君、奏君！これお姉さんが食べさせて上げるっ！」

「……………私と良い事しない？」

(上から順に)凧さん、奈津さん、茉美さんはそれぞれ好き勝手な事を言っている。

「凧さん、シヨタ発言は止めて下さい。奈津さんも口にくず餅を押しつけないで、茉美さん！頭に胸寄せないでっ！」

「どうしてこの人達はこんなに僕に絡むんだ？」

しきりに密着してくる三人に辟易していると水波音ちゃんがやって来た。

「いやっほーい 来たよーん奏くーん！……………ってあんた達何やってんの……」

いつものハイテンションで入って来た水波音ちゃんは僕に密着した三人を見た途端三人を睨み付ける。

「何よ、水波音。文句ある？」

「駄目ですよ、先輩ばかり奏君と会ってるじゃないですか」

「……………奏君は渡さない」

「またか……………どうやって逃げ出そうかなあ。」

「何ですってえ……………」

「ああ、このままじゃますます帰れない事になりそう……………そうだ！

「あのっ！」

「……………なあゝに〜？」「……………」

さつき迄唾み合っていたとは思えない程のタイミングと同じ調子で四人同時に返事をした。

「……………なんだこの人達は。」

「えーとですね、今、此所に柳泉市の幻の地酒『龍華燐』りゅうかりんを持って来たら一緒に飲んで上げますよ」

それを聞いた途端に四人はその場からいなくなっていた。

「流石だね、奏君」

いなくなった途端に編集長が入って来た。

「編集長、見てたんですか？だったら助けて下さいよ」

「そしたらきつと俺は今頃死んでるから」

遠い目をして答えた編集長の言葉には妙な説得力がある。

「……………分かる気がします」

すると少し遠くから消防車のサイレンが聞こえた。

その時ザワザワと何か嫌な物が僕の身体を駆け抜けた。

僕は急いで窓に駆け寄り、家の方角から煙が上がっていた。

「歌澄ちゃん!!」

「どうしたんだい?」

僕は急いで部屋を出ようとする。編集長に止められた。

「なんですかつ!?家が火事なんですよっ!!早く行かないと歌澄ちゃんが、歌澄ちゃんがっ!!」

全然冷静でいる事が出来ない。編集長が何かを言う前に駆け出そうとする。編集長がまたも僕を止めた。

「待ってくれっ!」

「なんだっ!邪魔するなっ!!」

編集長は焦るばかりの僕を諭す様に言ってくれた。

「落ち着くん。僕が車で送るから」

「……………っ。ありがとうございます」

落ち着け、落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着けっ!大丈夫、歌澄ちゃんは大丈夫っ!大丈夫だからっ!落ち着くんだ!

車の中。ただひたすら自分に言い聞かせる。歌澄ちゃんは大丈夫だ。

燃え盛る炎は僕の家を焼尽くして行く。

「歌澄ちゃんっ!!」

僕は車から飛び出すと野次馬をすり抜ける。そのまま家に入ろうとすると消防士に止められた。

「君！危ないから下がってなさいっ！」

「邪魔だっ！どけるおっ！」

僕が叫ぶと消防士は怯んだけど僕を通す事は無かった。

「駄目だっ！君を通す訳にはいかない！」

「…っ！離せよっ！歌澄ちゃんがつ！歌澄ちゃんがつ！」

消防士が安心してくれとでも言う様な顔をする。

「大丈夫だぞ少年。あの家にいた人達はちゃんと脱出した」

その言葉に僕はへたりこみ、炎で紅く彩られた空を見上げる。

ああ、そういえば彼方さんと要さんが居たんだっとな。

「よかったあ…。そっかあちゃんと脱出したのかあ…」

安心した時消防士は更に続けた。

「メイド服と執事服を着た変な二人組だったよ」

彼方さんと要義兄さんが運ばれたらしい病院に向かっている。

糞っ！何だっつんだっ。どうして彼方さんと要義兄さんだけなん

だ？あの消防士によると他に人は居なかったって話だし…

「糞っ！」

思わず拳をドアに叩きつける。

「奏君、落ち着いて。今こうして歌澄ちゃんって娘の手掛かりを持

っているだろうう人のところに向かっているんだからさ」

「…っ！分かってますよっ」

一体何があつたんだよ。

次第に病院が見えてくる。

到着すると僕は編集長を残して救急の受付に駆け込み二人の事を尋ねる。

「はい、来ましたよ。男性の方の怪我が少しばかり酷いのでその御一方は入院病棟の方に居ますよ」

受付の女性が笑顔で答える。病室の場所を尋ねた後急いでそこに向かった。

「彼方さんっ、要義兄さんっ！」

「奏君、落ち着いて。今こうして歌澄ちゃんって娘の手掛かりを持っているだろう人のところに向かっているんだからさ」

「…っ！分かってますよっ」

「一体何があつたんだよ。」

次第に病院が見えてくる。

到着すると僕は編集長を残して救急の受付に駆け込み二人の事を尋ねる。

「はい、来ましたよ。男性の方の怪我が少しばかり酷いのでその御一方は入院病棟の方に居ますよ」

受付の女性が笑顔で答える。病室の場所を尋ねた後急いでそこに向かった。

「彼方さんっ、要義兄さんっ！」

勢い良く入ると包帯だらけの彼方さんと胸にギプスを着けた要義兄さん。そして見た事のないショートヘアのメイドさんがいた。そのメイドが誰かは知りたいけど今はそんなことに構ってられない。「どうして歌澄ちゃん居ないっ？それにその怪我は何っ！？」

三人はそれを聞くと苦い顔をするとショートヘアのメイドさんが息を荒げている僕に話掛けてきた。

「私は日永家のメイド長をしている那波若魚と言います。貴方が座留奏さんですね？そっちの二人から話は聞いています」

「…は、はあ。那波さん…ですか」

落ち着いている丁寧な口調になんだかさっきまで調子を崩される。でもそのお陰で少し落ち着く事が出来た。

「若魚と呼んで下さい」

「じゃあ若魚さん。どうして歌澄ちゃんが居ないんですかっ？」

若魚さんは僕の問いに顔を曇らせとんでもない答えを返して来た。

「お嬢様は、誘拐されてしまいました」

## 8 ・僕と彼女の年上キラーと事件（後書き）

如何でしたでしょうか？

相も変わらず次話に続きます。

間違いなどの指摘、評価・感想待ってます。

9・僕と彼女のこの物語に於けるシリアスの所在と在り方（前書き）

今回は長いです。あとなんか変なところとか多いかもしれません。

それでは第九話どうぞっ。

## 9・僕と彼女のこの物語に於けるシリアスの所在と在り方

「お嬢様は、誘拐されてしまいました」

辛そうに喋る若魚さんのその言葉に僕は頭にガツンと強烈な一撃を貰った様な気分になった。

「…なん…だっ…て……」

「情けねえよなほんと、お前に気をつけてって言われたのによ」

彼方さんは自嘲の笑みを浮かべる。要義兄さんは歯を食いしばって叫ぶ。

「なんなんだよっ！あいつらはっ！今までの奴等とは段違いじゃねえーかつ！！糞があっ！！」

「要、憤るのは分かりますけど落ち着きなさい。奏君、私も君が来る少し前に来たところなんです。だからまずは二人の話を聞きましよう」

「……はい」

彼方さんは何があったのか話始めた。

〳〳回想開始〳〳

「日永歌澄の護衛か…」

「はんっ！護衛じゃねえよ。俺はメイドさ。覚悟しろ」

「お嬢様には手出しさせねえ」

俺と要はそれぞれの武器をナイフ男と火炎放射器男に向ける。

そして俺達四人は同時に動き出す。

「でりゃあっ!!」

俺はナイフ男に突っ込み腹に拳を打ち込む。ナイフ男は半身になつて避けるが伸び切った腕を回してそのまま裏拳を叩き込む。

ガギイインッ!

鉄と鉄とかぶつかる音が辺りに響く。

「つく!やるじゃねえか!だがなっ!」

一瞬で受け止めているナイフを巻き込む様に男の背後に周り込む。

「雷神拳っ!!」

男の背骨を打つ瞬間に拳が雷を帯びる。そしてその拳を回転の力を利用して打ち込む。

これで終わりだっ!

ドゴオツと激しい音を立てナイフ男が吹っ飛ぶ。

「ふんっ!こんなもんかよっ。要えっ!何処だ……ってえっ!」

家の中から窓を突き破つて何かが吹っ飛んで来た。

「だああっ!つぶねえなあっ!要っ!」

「悪い悪い。しっかしななんだあいつら?」

家の中から要が出て来る。

「分からねえよ、あんまりにも弱過ぎ……」

「どうした?かな……た……」

倒れていたナイフ男と火炎放射器男が何事も無かった様に立ち上がる。

「おい彼方、マジであつらなんなんだ?」

「わっかんねえよ……」

雷神拳は当たれば一撃で意識を刈り取れる技だぞ?なんで平然としてんだ?

「全く、お前迄何をやっているケビン」

火炎放射器男は壊れた火炎放射器をナイフ男に見せながら喋り出した。

「だって兄さんあいつ酷いんだ！僕の玩具壊したんだよ！」

火炎放射器男はその声と容姿にそぐわない幼い喋り方をしている。それがこの男達の得体のしれなさを際立たせていた。

「そうか、後でまた買ってやる。だからお前も少しは本気を出して遊べ。俺も少しは本気を出す事にするからな」

「うん、分かったよ兄さん」

本気を出してなかっただど…？

ナイフ男は奇妙な形のナイフを更に二本取り出して鉤爪の様に三本を片手に持つ。

ケビンと呼ばれた火炎放射器男は火炎放射器の残骸を捨て去ると腕が突然炎を上げた。

「……………なっ？」

あまりの出来事に絶句する。

そして、ナイフ男は俺を、腕が燃えているケビンは要を襲った。

「つく！だりゃああっ！」

ナイフ男の攻撃をなんとか受け止めて殴り返すがかすりもしない。糞っ、マジで強いっ！

「ぐふあっ！！」

腹を蹴り飛ばされ、リビングのソファに叩き付けられる。

こいつ本当にヤバイ…要は？

「はあああああっ！！」

要は思いつ切りケビンを横に雑払い、ボックスステップで避けたところをそのまま流れる様にグラーフ○イゼン？を一步踏み込んで振り降ろす。

標的が掻き消え、大きな音を立てて床を砕く。

「ちいつ！何処につ…グアアアアアアアアツ！！」

ケビンは要の左腕を殴る。殴られたところが焼けている。その時足音が聞こえて来た。

そして、

「っ！彼方ちゃんに要ちゃん！」

泣きそうなお嬢様がそこにいた。

男達はお嬢様に向かって動き出す。

「要えっ！お嬢様を守れえええっ！！」

「うおおおおおっ！！邪魔だ馬鹿野郎っ！！」

俺はナイフ男の前に立ち塞がり、要はケビンを吹き飛ばしてお嬢様の元に駆け付ける。

「要さん！彼方さん！」

「お嬢様、此所は逃げゴガアツ！！」

「なにすんだよっ」

要がケビンに投げ飛ばされる。

「…ひっ！」

声にならない悲鳴を上げるお嬢様。

「お嬢様あつ！グガアツ！」

お嬢様に気を取られた隙に殴り飛ばされ壁にぶつかる。

お嬢様がケビンに気絶させられ担がれていた。

「かはっ、おじよ…っさま」

吹き飛ばされた時に頭をぶつけたらしく意識が混濁している。

「ふん、『黒白の響鬼』<sup>「くくびやくのこびやく」</sup>がお前らを残したから一体どれ程の手練か

と思っただがこの程度か…ケビンこの家は燃やしてしまえ」

「やった〜」

ナイフ男は嘲る様に見やって俺に背を向けて歩きだした。

…く…そがあ…、このまま…黙って行かすかよお…。

去って行くナイフ男に手甲を向けて超小型の発信機を撃つ。

…よ…し、うまい…事…着いた…みたい…だな…お嬢様…。

〜〜回想終了〜〜

彼方さんの話が終わり若魚さんも要義兄さんも黙ってしまったている。

あいつらだったのか僕や歌澄ちゃんを見ていたのは。

「僕はその男達を知ってるよ」

皆が驚いた様に見る。

「奴等は『炎刃』エッジバーン兄弟。兄は無〇六爪流のウォルター・エッジバーン。弟はケビン・エッジバーン、二つ名は『狂喜の炎』マッドフレイムの炎使い。性格や特徴はウォルターは冷静沈着、顔には斜めに大きく傷跡がある。ケビンはごつい見た目とは裏腹に精神年齢がかなり低いから拳動も子供みたいなやつだ。その筋じゃあ結構有名な二人だよ」

「…座留、なんでお前そんなこと知ってるんだ？」

彼方さんは訝る様に僕に尋ねる。

「それは……僕があいつらと知り合い……だからです」

「なんだと！それ本気で言ってるのか、座留えええっ！」

胸倉を掴まれ壁にぶつかる。

そりゃそうか、ついさつき迄信用 していたかは分からないけど

「彼方さん、僕とあいつらは知り合いだって言われたら嫌だよな。」

「彼方さん、僕とあいつらは知り合いってだけです。僕達は散々あ

いつらを虚仮にしてみましたから」

「やめなさい、彼方」

「糞っ！」

彼方さんは若魚に諫められて乱暴に僕から手を離す。

「とにかく、今は唯み合っている時じゃないでしょう？彼方のお陰で場所の特定が出来るとはいえ相手の情報がまだ充分じゃありません。特にそのケビンという男。突然腕から炎が出るというのはおかしすぎます。奏君何か知ってますか？」

「おかしい事はないですよ。あれには種も仕掛けもありません。それこそ超能力や魔法の様に炎を使えます」

彼方さんは不機嫌そうに僕に怒鳴る。

「こんな時に冗談言ってるじゃねえよっ！」

若魚さんもあまり信じれないのか彼方さんを注意しない。

「冗談？冗談だと？裏の世界の奴等が絡んでるのに冗談なんて言うわけないだろっ！」

冗談なんて言う筈が無い。人の、歌澄ちゃんの命が懸かっているんだ！

彼方さんも要義兄さんも驚いている。

「とにかく今は歌澄ちゃんを助ける事が先だ。若魚さん、歌澄ちゃんの位置は分かるんですね？」

「ええ。発信機を取り付ける事が出来ましたから」

若魚さんが少し戸惑った様に答えると彼方さんは僕に答えるまでも無い事を聞いて来た。

「おい、そんなの聞いてどうすんだよ、お前が助けるつもりか？」

「そつだ、僕が助ける」

三人共僕の顔見る。

「歌澄ちゃん僕が助ける。あの兄弟がいるにも拘らず気付く事が出来なかったのは僕だ。それで歌澄ちゃん、彼方さん、要義兄さんまでこんな事になったんだから……」

彼方さんは僕に殴りかかろうとするのを若魚さんは手で制する。

「何すんだ、若魚！このガキを一発ぶん殴らせろ」

「駄目よ彼方。どれだけ舐めた口聞いたガキだろうがお嬢様を助けるってところは正論なの」

「若魚……っ！」

舐めた口を聞いたガキか……。結構きつい事を言う人だな。これじゃ埒が空かない……。よしっ！

「どんな事を言われても僕が歌澄ちゃんを助けに行きますからっ！」

「ひゃあっ!?!？」

僕は若魚さんを無理矢理小脇に抱えて窓から飛び下りる。  
駐車場に着地して若魚さんを降ろすと若魚さんはこめかみに血管を浮かべて怒り始めた。

「あつ貴方、いきなり何するんですかつ！！四階から飛び下りるってなんですかつ！危ないじゃないですか！」

「すみません。でもあのままじゃ歌澄ちゃんを助けに行けそうにありませんでしたから。ガキはすっこん出る！って感じで」

「それはそうですね…」

若魚さんがそう言ったところで上から声が聞こえて来た。

「くうらあとうおめええっ！！」

「かつ彼方さん！？」

「彼方っ！」

彼方さんが窓から飛び下りて来る。僕目掛けて…。

「うわっ！」

慌てて避けるとさっきまで僕がいたところにズダンと着地する。そしてすぐ僕の胸倉を掴む。

「テメエッ！」

「彼方さん、未来少年みたいですよ…ぶっ！」

「はあ、はあ、はあ」

彼方さんに思いつ切り殴られて倒れる。

無茶苦茶痛いよ、彼方さん……。

鼻息の荒い彼方さんを若魚さんが諫めている。僕は鼻を押さえながら起き上がる。

「え、えーとでは気を取り直して…。とにかく、今から歌澄ちゃんを助けに行きます。だから手伝って下さい」

若魚さんと彼方さんは呆れた様子を僕を見る。

「やっぱりこんな素人のガキには任せられないですか…」

二人は当たり前だとばかりに頷く。

「奏君。確かに貴方は誘拐犯について知っていたり、私達の目に気付いていたりと不自然な点があります。ですが私が幾ら調べても貴方は素人のガキなんですよ」

調査：か。もついい加減昔の自分に戻らないとやってらんないな。まったく今日は厄日だよ。

僕は…僕は『黒白の響鬼』座留奏だ。

「若魚さん、あなたがどんな調査をしたのかは知らないけど、表の人間が僕の事を調べられる訳ないだろ！」

二人は驚きに目を見開く。

「おい、座留…」

「黙ってる、どちらか運転は？」

「わ、私が…」

若魚さんは呆気に取られた様に答えている。

「それじゃあ僕の家まで頼みます」

僕は無理矢理話を進めて車に乗り込む。

家に向かっている最中まだ呆気に取られている感じの彼方さんが予想していた質問をしてきた。

「なあ座留、お前行方不明だった事があるんだってな」

「…要義兄さんから聞いたんですね？まったくまったくあの腐れ乙女義兄は…」

彼方さんは何やら申し訳なさそうな顔する。

「…なんか悪い事しまっつたかな？」

「別に気にしないでもいいよ。そういえば彼方さん達良くまああの二人と渡りあったよね」

あいつらも落ちたか？

「はっ、まぐれだよ」

彼方さんが自分を嘲ったところで家に着いたらしく車が止まった。  
「奏君、着いたけど何するつもり？この焼けた家で」

その問いに僕は笑って答える。

「悪い子供にお仕置するためのムチを取りに行くんですよ」

「しっかし全焼か……ってああああああああああっ！  
！」

気付いてしまった。僕の宝物の一部が灰と化した事に。

「ぼ、僕の、僕の宝が……歌澄ちゃんを拉致った事といい僕の宝を  
燃やした事といいあいつら相当死にたいらしいなあ……」

にしてもまさか地下室も焼けてたりしてないだろうな……。

地下室のあつた場所に行くと焼けた木材が倒れている。それを退  
かして中に入ると地下室は無事だった。

「ほっ、よかつた」

僕は地下室にある黒い柩の様な箱を開けて中から結構な長さの布  
に包まれた棒とその棒を吊す為のホルスターの着いたこついベルト、  
そして黒いコートを取り出す。

「これ使うのは三年振りかな？」

ベルトを腰に巻き、コートを着て、棒から布を取る。

コートの背と左腕には大きな白い十字架が描いてあり、左腕の部  
分だけ色が黒ではなく白になっている。

棒の長さは僕の身長くらい、先は平らで片刃の長剣の様に見える。  
刃は無く、刃の在るべき部分は少し薄くなっているだけ。だから人

を切る事は出来ないけど殴る事ならできる様にも見えると思う。

僕はそれをホルスターに差して地下室を出る。

この格好で行ったら彼方さんに変な目で見られたけどそれを無視してすぐに車を出して貰った。

「なあ座留、その格好何さ？」

「戦闘服。戦隊物で言うところの変身スーツって奴ですよ？変ですか？」

「変」「

彼方さんと若魚さんが声を揃えて僕にツッコミを入れる。

『言わせて貰いますけど貴女達だって十分変ですよ。まるでブラクラ○ーンのロ○ルタみたい』なんて反論したら僕はボコボコにされそうだから言わないでおこう。

「そんなはつきり切り捨てなくても……とにかくっ、いい加減受信機を見せて下さい」

「大丈夫ですよ。カーナビにも受信出来るようになってますから」

若魚さんの言葉にカーナビを見てみるとカーナビの画面右上に『

お嬢様』と書いていた。

「……………今は工業地帯の倉庫、か」

「これまたベタな場所にいるもんだな」

「奏君、何か作戦でもあるんですか？」

「はい、ありますよ」

僕は言ったらきつと反対するだろう作戦を二人に告げる。

「捻りも糞もあつたもんじゃないですけど僕がああ兄弟をボッコボコのギッタングリタンにしている間に歌澄ちゃんを保護して下さい。別に裏口から侵入したりしなくても大丈夫ですしね」

「ふざけんなよ座留」

案の定真っ先に彼方さんが反対してきた。

「あの野郎は俺が……」

「リベンジですか？一般人に毛が生えた程度の腕で？無茶にも程が

ある。それから、今行ったら僕がいるからウォルターは間違いなく  
ブチ切れて本気も本気で攻撃してくるよ。彼方さん程度の腕でどう  
こう出来る相手じゃない」

「デメエ…ッ」

彼方さんは叫ぼうとするのを踏み止どまった。

「それに今一番大事なのは歌澄ちゃんを保護すること。そうでしょ  
？」

「そうだけだよ」

まだ釈然しない顔をしている彼方さん。しっかしまあ血気盛んだ  
よ。

「分かりました」

「…若魚っ！」

彼方さんを制した若魚さんは楽しそうに笑っていた。

「彼方、奏君に任せて大丈夫よ。奏君は『黒白の響鬼』なのね？や  
つと思いついたわ。どっかで聞いた名前だと思ったのよ。鏡の話に  
よく出て来てるから」

予想だにしなかった人の名前が出て来た。なんで此所で鏡さんの  
名前が出て来るんだ？

「あ、鏡さんを知ってるんですか？」

「友達だからね」

……まああの人の交友関係は異常に広いからなあ。

「話は変わるけど奏君は我等がお嬢様の事を好きなのかな？」

ちなみにLikeじゃなくてLoveかどうかを聞いてるんだから  
ね？」

「へえあつ？」

「はああつ？」

若魚さんのとんでも発言に僕も彼方さんも素頓狂な声も上げてし  
まう。

えーと、えーと、えーとなんて答えればいいんだ？

「えーと…あの…その…あ…う…う…う…う…うあうっ！」

「座留えええっ！そんなのかこの野郎っ！！」

何やら自分の中で結論を出したのか僕の胸倉を掴んで僕の五臓六腑をシャッフルしてやらんとばかりに激しく揺する。

「あうあうあうあうあうあうあうあう、かかか彼方さんやめやめやめてえっっ」

若魚さんは楽しそうに笑っている。

なぜか明るくなっている車内。歌澄ちゃんのところまで後少し…。

「着きましたよ」

くたびれた倉庫は夕陽に赤く染められている。

「じゃあ僕が先に突っ込むんで人が物に激突する様な音になったら入って来て下さい」

「お、おい！」

僕はそれだけ言うと倉庫に向かって走り出した。

「おい若魚、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だと思いますよ？鏡の話だとも何でもマフィアを一人で潰したとかなんとか」

「……………は？」

「…え。ねえ、起きてよ」

「……あつっ」

次第に意識がはつきりしてくる。

「……あう。此所は？」

辺りを見回すけど夕方だからか陰影が濃くて良く把握は出来ない。ただその中に二人の男がいることだけはわかった。

「あー、起きたっつ。この娘起きたよー兄さん」

「む、そうか」

近寄って来たのは幼さの残る端正な顔立ちの綺麗なブロンドの髪の大柄なヨーロッパ系の少年と顔の右側に大きな刀傷のある落ち着いた感じの大柄なヨーロッパ系の男だった。

「…貴方達は誰？」

「これは失礼。俺はウオ……」

「僕はケビン！ケビン・エッジバーンって言うんだっ。16歳だよ。こっちは兄さんのウォルター・エッジバーンって言うんだ。兄さんの年は24歳なんだよっ！」

ウォルターさんの自己紹介を遮って一人で一気に喋るケビンさんは無垢な笑顔だった。

「は、はあ……」

「ん、ん、っ！弟に被られてしまったが…かす…」

「ねえ君名前なんて言うの？」

また被られてる…。

「…私は日永歌澄って言います。もしかして貴方達が彼方ちゃん達

を襲って私を誘拐したの？」

「そうなの？兄さん」

えっ？この人も来たんじゃないの？

ケビンさんの無垢な視線にウォルターさんはまったく合わせようとしていない。

「僕達はカスミンの言う通りあの家を襲ってカスミンを誘拐したの？」

この人達何なんだろう？あとカスミンってなんかNOKの某アニメの主人公みたいなあだ名はどうなんだろう？

「そっそれはだな……ふぐおっ！！」

「…えっ」

「何、何？」

突然ウォルターさんが真横に吹っ飛んだ。

「ウォルターアアアッ！！お前またケビン騙して利用しただろっ！それに飽きたらず僕の家燃やして、あまつさえ歌澄ちゃんを拉致るつてのはどういう見だ！」

「…か…なでさん？」

ウォルターさんを吹っ飛ばしたのは奏さんだった。

…でもなんで吹っ飛ばした後は説教みたいなんだろ？あれ？ケビンさんが震えてる。やっぱりウォルターさんを吹っ飛ばしたから怒ってるのかな？

よく見るとケビンさんは物凄く嬉しそうな顔をしていた。

「…え？」

その瞬間ケビンさんが嬉しそうに奏さんに抱き付こうとした。

「カナちゃん！！！」

「お前はカナちゃんって呼ぶなっ」

奏さんは持っていた剣（？）でケビンさんの頭をズガンツと叩いた。

「痛〜〜いっ！」

ケビンさんは泣いて頭を押さえて蹲る。奏さんはそれを無視して

私に話し掛けて来た。

「歌澄ちゃん、大丈夫だった？彼方さんと若魚さんが今来るよ。僕  
はこれからこの馬鹿二人を更生しないといけないからね」

「お嬢様っ！」

奏さんが言い終わってすぐ彼方ちゃんと若魚さんが来た。

「奏さんっ…あの、ありがとうございますっ！」

「うん」

奏さんは笑って返事をしてケビンさんに向き直った。

「お嬢様っ！」

「お嬢様っ無事かっ！」

「若魚さん、彼方さん。私は無事ですよ」

「そうですか。無事で何よりです」

「そっか、無事かあ…。ところでお嬢様よ」

彼方ちゃんは信じられないと言った感じで奏さんとケビンさんを見  
ていた。

「なんでしよう？」

「座留は何してんだ？」

「……説教だと思えますけど……」

「はああ？なんだそりゃ」

私もサッパリです。彼方ちゃん。

「カナちゃん、痛いよっ！何すんのさあ！」

「カナちゃんって呼ぶんじゃない！それに、あれ程ウォルターの話  
に乗るなって言ったのになんで乗ってんのさっ！」

奏さんに怒られてケビンさんはシユンとする。

「だってカナちゃんの言う通りにしたら兄さん遊んでくれなくなっ  
たんだよ?」

その言葉に奏さんはこめかみを押さえる。  
なんか大変そう……。

「つまり、ウォルターは自分の手伝いをしたら遊んでやるみたい  
な事をケビンに言ったんだな?」

「すごいっ!なんで分かるの?」

「……………取りあえず本題に移ろうか、ケビン君」  
奏さんは口を片方ひくひくと上げている。

「どつどうしたの?カナちゃんなんか怖いよ?」

「あのね、ケビンは今回僕の家押し入って彼方さんと要さんに怪  
我させて、歌澄ちゃんを誘拐したんだ」

ケビンさんは奏さんに言われた事で泣きそうな顔をしていた。

「それに、ケビンが家を燃やしたせいで僕の宝の一部が焼失、更に  
は家族が住む場所まで無くなっちゃったんだ。ケビンにその責任が  
取れるの?」

「マジで説教してんな」

「…そうだね」

「うっうっうっわあ〜んっ!ごめんなさいっ!ごめんなさいっ  
!」

あっ、泣き出しちゃった。

「だって兄さんが燃やせて言ったんだよおう!」

「そっか、ケビンはウォルターが大好きだもんね」

「うん」

「でも、その大好きなウォルターから言われたからって何でもして言い訳じゃ無いんだよ」

「うん」

「だからあそこにいる歌澄ちゃん達に謝っておいで。それで歌澄ちゃん達と一緒に居て。僕はウォルターにそれ相応の罰を与えないといけないからさ。それが終わったらこの町案内してあげる」

「うんっ！」

ケビンさんが嬉しそうな顔でこっちに向かって来た。

彼方さんはケビンさんを睨み付けて拳を構える。

「やんのかテメエッ」

ケビンさんは私達の前に来ると立ち止まって深く頭を下げた。

「ごめんなさい。あんな事して」

「は？」

「えっ？」

「あら？」

どうしていきなり…？

「僕はバカだから兄さんの口車に乗せられちゃって…ごめんなさい。本当にごめんなさい」

誠心誠意謝っている様に見える。彼方さんはあまりに予想外の出来事に脱力していたし、若魚さんは苦笑いだった。

私もなんて言ったらいいか全然分からない。

私達が何も言わないからかケビンさんの目が潤んで来た。

子犬の様に私達を見つめている。

「お願いだから許してよお…」

「……うっ！わかったっ！許すっ、許すからそんな目で俺達を見るな！っ！」

ケビンさんは満面の笑みを浮かべて私の隣りに座り込んだ。

「……謝ったのはいんだけどどうして私の隣りに座ってるの？」

「あのねっカナちゃんか兄さんにお仕置するからカスミンのところ  
に居ろって」

「……そっそうなんだ……」

それにしてもカナちゃんにカスミンかあ……どうにかならないのか  
な？

その頃、若魚さんと彼方さんは二人は遠い目で何かをぼやいてい  
た。何を言ってるんだろ？

「座留は『悪い子供にお仕置』って言ってたけど本当にその通りの  
事してるな」

「そうですね〜シリアスさの欠片も無くなって……」

「だよなあ……シリアスも糞もねえよな」

「要がいたら暴れそうね……」

「だな。なんか馬鹿らしくなってきたよ……」

「私もそう思うわ……」

若魚さん達から目を離してケビンさんと一緒に奏さんの方を見る。

奏さんはウォルターさんと対峙していた。

「座留奏。この傷の恨み晴らさせて貰う」

ウォルターさんは両手に三本ずつ奇妙な形のナイフを持ちそれを  
奏さんに向けてる。

「ウォルター。あんたに一つ言いたい事がある……」

奏さんも持っている剣(?)をウォルターさんに向けている。

「食らえっ!」

ウォルターさんは一瞬で奏さんの背後に周り物凄い速さで背中を

突き刺そうとした。

奏さんはなんでもない様にその攻撃を受け止めた。

「ウォルター……」

それだけ言っただけで受け止めていたナイフを弾いて一歩分素早く下がる。

「よくも歌澄ちゃんを誘拐しやがったな此の野郎おっ!!」

そう叫ぶといつの間にかウォルターさんの右手のナイフが三本、真っ二つに折れる……と言うより真っ二つに切れていた。

「チイツ！」

ウォルターさんは忌々しそうに舌打ちすると新しいナイフを取り出しながら素早くバックステップをして距離をおこうとしたけど奏さんはそれを許さなかった。

「それにつ！僕の家を燃やした責任も取って貰うっ！」

奏さんは距離をおこうとバックステップをしていたウォルターさんに対して神速の薙払いをする。

「ぬうおっ!!」

ウォルターさんが転がっていた廃材に躓いたお陰で奏さんの薙払いには紙一重で当たらず鉄製の階段をスパツと斬っていた。

「燃やしたのはケビンだろうっ！なぜ俺が責任をとらねばならんっ!!」

ウォルターさんはそう叫びながら急いで体勢を直して腰を落とし、両手のバチバチと電気を纏い出した六本のナイフを前に突き出して奏さんに突っ込んで行く。

……あれ？なんとなくあの攻撃の仕方見た事あるような……。

「お前は兄なんだから当たり前だろ！いつも思うけど、刀じゃないくせに無限六〇流なんか使うなっ！あと、あれ程ケビンを利用したり、家を燃やさせたりするなって言っただろっ!!」

……ああ、何処かで見たと思っただら戦〇BASA〇Aの伊達正宗だ！

奏さんはウォルターさんの突進を避けて袈裟斬りする。

「くっ！」

ウォルターさんはそれをギリギリで避ける。奏さんの放ったその袈裟斬りは今度は放置してあった何か大きな機械装置を両断した。

「俺がケビンを利用しただっ？そんなことは断じて無いっ！」

ウォルターさんは一気に懐に入り込んで手数を増やし攻撃のスピードを上げていく。それはもう私の目では追えない速さだった。

それでも奏さんは難なくその攻撃を避け続けている。

「例えそうだとしても第三者が見た時に利用している様にしか見えないっ！大体僕はケビンはこの業界から足を洗うべきだって言っただろっつ！あと、もっとケビンに一般常識とか教えてやれっ！」

奏さんは剣を回転させてナイフを全部叩き斬った。

ウォルターさんはまた新しいナイフを出してまた奏さんに飛び掛かる。

「ケビンは望んでやっている事だっ！それに一般常識はちゃんと教えているっ！」

ウォルターさんは奏さんの周りを動きながらヒット & amp ; ウエイで攻撃している。

奏さんは一瞬で間合いを取り、またすぐ間合いを詰めて剣を振り下ろす。

「嘘つけっ！三年前と精神年齢が変わってないじゃないか！」

「なんだとっ！お前に俺の苦労は分かるまいっ！」

「……………」

「……………」

「……………」

「すげえすげえい」

目の前で繰り広げられている戦いに私も若魚さんも彼方ちゃんも呆気に取られていた。

奏さんとウォルターさんは子供の教育方針を巡って喧嘩している夫婦みたいな会話をしながら、最早人外と言えるだろう戦いを繰り広げている。辺りを盛大に破壊しながら。

「……物凄いな。物凄いなだけどなんか……」

「シリアス感に欠けますね……」

「……だな」

彼方ちゃんはなんだか疲れた様に若魚さんの言葉に応えた。

「……今日一日の緊迫感だとか負った怪我だとか全くの無意味って感じだな。なんとなくシリアスもへったくれも無いこの状況に俺は心が折れそうだ……」

そう言っただけ方ちゃんはへたりこんだ。

「……本当に何がどうなっただけこうなっただけのかしらね……」

若魚さんも疲れた様にぼやいた。

「……ケビンさん」

「なに何っかスミン！」

どうしてこの人はこんなに幼いんだろ、私よりも年上なのに……。

「……どうして貴方達は私を誘拐したの？」

「だって兄さんがカスミンの写真を僕に見せて『この娘と友達になりたい人がいるんだが会いたくても会えないらしい。だから俺達はその人のところに連れて行ってやるっ』って言ったから……」

「……そうなんだ」

ウォルターさんの誘拐の理由は仕事でケビンさんは何も知らないんだ……。

誘拐に関してはやっぱりいつも通りなんだね……。それにしてもケビンは何処まで純粋なんだろ？

奏さん達を見るとまだ子供の教育方針を懸けた夫婦の口喧嘩の様に言い合いながら、人外の戦いを繰り広げていた。

「火炎放射器を買い与えるのはいい加減止めるべきだっ！」

「ふざけるなっ！弟の好きな物を取り上げられるかあっ！」

奏さんの攻撃で地面がえぐれる。

「だったら、せめて本物じゃないを買い与えろっ！」

「なあ…お嬢様、若魚、なんかもう俺帰りてえよ…」

彼方ちゃんはついに泣き言を言い出した。確かに私もちよつともう帰りたいたい。

…なんとしようか。そうだっ！

私は奏さんとウォルターさんの元に駆ける。

「お嬢様？」

「…若魚さん、これ以上不毛そうなんで二人を止めて来ます」

「えっ、ちよつと！」

「…奏さんっ！ウォルターさんっ！皆なんだか疲れてるんでもう止めて下さ〜っ〜いっ！」

私の叫び声に二人共動きを止めた。私の方を見て驚いた様に目を見開き奏さんは悲鳴の様な叫びを上げた。

「歌澄ちゃんっ！！！！」

「…えっ？」

辺りが不意に暗くなる。

上を見る。

階段は無い。

あつたのは黒い何か。

視界が黒に染められる。

ズガガガアアアアッ！！

何も分からない。ただ凄まじい音が鳴った事、自分が倒れた事、そして激しい衝撃が駆け抜けた事が分かった。

……暗い。私どうなっただろう…。

遠くから『お嬢様あつ！座留えつ！』『お嬢様！奏君！』『カナちゃあ〜ん！カスミン〜ン！』と彼方ちゃんと若魚さん、ケビンさんの声が聞こえる。

「ぐううっ……」

自分のすぐ側誰かの呻き声が聞こえた。

誰だろ……。

ガラガラと何かが崩れる音が聞こえて光が差す。

「……うっ」

眩しい。

私の視界がどんどん開けていく。

そして、一番最初に目に入ったのは奏さんの笑顔だった。

「……ひゃわっ！？かつ奏さん……」

私は奏さんに抱き締められていた。

「大丈夫だった？」

「……えっ何……が……」

よく見ると私達は鉄骨の下敷きになっている。

「……そんなっ……」

「お嬢様っ！座留っ！」

「カナちゃんっ！カスミンっ！」

「彼方もケビン君も早く鉄骨をよせてっ！ウォルターさんも何やってんですかっ！」

「あっあああすまない」

そんな若魚さん達の救助の声を聞きながら私は何がなんだか分か

らなくて奏さんの顔を見る。

「ど……して……一体何が」

「階段が崩れたんだよ。歌澄ちゃん、怪我は……無いね、よかった」  
奏さんは安堵の表情を浮かべる。

「……そんな……奏さんこそ怪我をつ」

若魚さん達はどんどん鉄骨を寄せていき奏さんの背中に押し掛かっていた最後の鉄骨を寄せた。

「大丈夫っ？二人共」

皆心配そうだった。

奏さんは何事も無かった様に笑って立ち上がり私に手を差し出した。

「……あ、ありがと……っつ」

手を取って立ち上がった瞬間左足首に激痛が走る。

「……お嬢様っ！」

若魚さんと彼方ちゃんが慌てて駆け寄る。

奏さんは私の足下にしゃがんで確認していた。

「あー捻挫だね、これ。若魚さん、彼方さんただの捻挫だから大丈夫ですよ。一応病院に行くって事で車出してもらえます？」

「ええ、もちろんです」

若魚さんは走って車を取りに行く。

「お嬢様、痛むのか？」

物凄い心配そうな顔で聞いてくる彼方ちゃんはちょっと可愛い。

「彼方さん、大丈夫です」

奏さんは何処からか包帯を取り出して素早く足首を固定する。その手際の良さに私と彼方ちゃんは感心した。

「……すごいです。奏さん」

「なんかスゲエな座留」

「まあ馴れてるからね。よいしょ……と」

「ひゃわあっ!？」

「あぁっ!」

奏さんはいきなり私をお姫様抱っこをして歩き出した。

「…はわわわわっ。か、奏しゃん。お、降りよして…」

あまりの恥ずかしさで呂律が回らない。

「駄目だよ、捻挫は安静にしているのが一番なんだから。彼方さんも今僕に攻撃したら歌澄ちゃんをおっことしちゃうよ」

「…ちっ」

彼方ちゃんは物凄く悔しそうにしていたけど私はそれどころじゃなくて奏さんの顔が見れずに俯いてた。

「…はうううっ……だだかりやっておひ、お姫しゃまだ、抱っこは…」

「いいからいいから。ケビンっ、ウォルター連れて一緒に来て」

「うんっ！兄さん行くよ」

「えっなっけ、ケビン？」

ケビンさんは楽しそうにウォルターを連れて奏さんの後ろをついて行く。

「なんだかなあ…」

彼方ちゃんの眩きを残して私達はこの場所から出て行った。

「け、ケビンっ！たっ助け…ふぬうおっ！」

ウォルターさんの叫びが響く車内。運転してるのはスピード狂の彼方ちゃん。

「わはははハハハっ！！何者も俺を追い抜けないゼエツ！」

私達は一路病院を目指している。

ウォルターさんは奏さんが私を車に入れた後ケビンさんと奏さん

にを車の上に括り着けられていた。

「ウォルター頑張れ」

奏さんはどうでも良さそうに応援をし、ケビンさんは

「兄さん〜ファイトオ」

楽しそうに応援。若魚さんは助手席で苦笑いしていた。

ウォルターさんの悲鳴と彼方さんの高笑いを聞きながら車は病院へ向かって進んで行く。

……疲れた。ほんとあの兄弟は僕を疲れさせる。

彼方さんが高笑いをしながら物凄いドラテクを披露する度にウォルターの絶叫が上がっていた。

……すごいな彼方さん。自業自得だ、ウォルター。

「ウォルター頑張れ」

歌澄ちゃんを見るとちよつと苦笑いしていた。

しかしまあ無事でよかつたよ。誘拐って聞いた時はどうなるかと思っただけどあの兄弟でよかつた。……っつ。身体の内こちが痛い。これちよつとやばいかも……。気を抜いたら倒れそうだ。せめて歌澄ちゃんを診てもらうまでは頑張らないとっ！

……あれ？なんか忘れてる気がする。まあ覚えてないって事はさして大事な事じゃないよね。

彼方さんの高笑いとウォルターの絶叫を聞きながら車は病院へ向かって進んで行く。

「奏くんっ！なんで戻って来ないのっ！？」  
病院駐車場に編集長の叫びが木霊した。

「……奏君っ！龍華燐持って来たよっ！！」「……」  
水波音ちゃん、凧さん、奈津さん、茉美さんが同時に興談社の休憩室になだれ込む。

休憩室には掃除のおばちゃんが一人だけいた。

「あんたらどうしたの、そんなに息切らせて」

「……に、逃げられたああああああああっ！！」「……」

四人の悲しい叫びが興談社を包んだ。

9 ・僕と彼女のこの物語に於けるシリアスの所在と在り方（後書き）

いかがでしたか？楽しんで頂けてたら幸いです。  
評価・感想・批評をお待ちします。

10・僕と彼女の事件のその後と暇潰し(前書き)

学校の方が少々忙しく更新が遅れてしまいました。

それでは第10話です。どうぞっ！

## 10・僕と彼女の事件のその後と暇潰し

「暇だなあ……」

「うるさい」

僕は今、病室に要義兄さんと二人つきり。

僕は要義兄さんを見舞いに来た訳じゃなく、要義兄さんと仲良く三日前から入院していた。なぜ僕が入院したのか、それは歌澄ちゃんを堅気とは思えない医者に見せて安堵して気を抜いた途端にぶっ倒れたからだった。

朝には歌澄ちゃんやケビンがいたけどそれぞれ学校に行ったり、街をぶらついたりして今はいない。

姉さんと楓義兄さんは家が燃えてるのを見てぶち切れていて、ウォルターを差し出すとウォルターを連れて何処かへ行ってしまった。次の日見舞いに来た楓義兄さんにウォルターをどうしたのか聞くと笑顔で

「あの人なら日由ちゃんと丁重に持て成したよ」

と言っていたけど後でケビンに聞いたらウォルターは寝込んだらしい。何をしたのかなんて考えたくもない。二人共今は歌澄ちゃんの家で世話になっているらしい。

それにしても……

「暇だなあ……」

「だから五月蠅い」

要義兄さんは僕と会話してくれないから僕は暇で暇でしょうがない。

「ねえ、要義兄さん」

「なんだ？」

不機嫌そうに伝える要義兄さん。

「将棋でもやるっか」

「は？」

「じゃあ決定ね。準備するから待っててね」

「は？ちよつと待て。おい、無視するなっ、おい…！」

僕は要義兄さんを無視して駒と盤を用意して、ナースセンターに連絡を入れる。

「すみません」

『はいはい、奏君どうしたのかな？寂しくなっちゃったとか？ウツフツグツフツ』

何やら怪しげな笑いが返って来る。

グツフツって…。

「何考えてるか知りませんがお願いがあるんです」

『何かな？君のためならお姉さん張り切っちゃうよ』

「そ、そうですか。それじゃあナース服お願い出来ますか？」

『御安い御用よっ！お姉さんにまっかせなさいっ！』

気合いの籠った返事でナースコールは切れた。

「準備も出来たし、やるっか要義兄さん」

「やらん」

即答された。

人が必死に要義兄さんと仲良くなるうとしてるのに…。

「……そっかあ、要義兄さんは負けるのが怖いんだね」

「なんだと？」

よし、かかった！

「僕に負けるのが怖いんでしょ？びっくりするくらいの腰抜けになっちゃったんだね要義兄さん。残念だよ。仕方ないか、こんな腰抜けの要義兄さん相手に将棋なんかしてもしょうがないから片付け…」

「待てっ！上等だあ…殺ってやる、覚悟しろよ…」

こめかみに血管を浮かばせて将棋をやる事を承諾してくれた。

よーしこの調子でどんどん要義兄さんで…要義兄さんと遊ぶぞっ！

「要義兄さん、ただやるのもつまないから負けたら罰ゲームで良いでしょ？まさか駄目だなんて小さい事言わないよね？」

「何でもこいってんだこの野郎っ！」

うーん良い具合に頭に血が登ってるね」

丁度その時看護師さんがやって来た。

「奏君っ、持って来たわよっ！でもよくよく考えたら報酬も無しにこついう事やるのお姉さん嫌かも…」

頼んでた物を僕に渡して想定内の事を言う看護師さん。

「ありがとうございます。お礼に頭を撫でてあげます」

「やった〜っ！」

僕の近くによって来て頭を撫でられてる看護師さん。なんか僕って嫌な奴だなあ。

「はい、終わり。若い子ばかり追っかけてないで仕事頑張って下さいね」

「はいはい」

看護師さんはルンルンと病室から出て行った。

「さて、罰ゲームの物が届いたところでこの勝負のルールだけど、やるゲームは将棋、時間無制限の一本勝負、お互いにハンデは無し、負けた方は文句を言わずに罰ゲームを受ける事、先攻後攻はジャンケンで決める。以上、質問はある？」

要義兄さんは少し考え込んで

「罰ゲームってなにすんだ？」

「それは勝負が終わってからの楽しみだよ」

「なんだそりゃ…」

少しばかり怪訝な顔をする要義兄さん。

「いいからいいから。ほらっ最初ゲー！」

「ジャンケンホイッ！」

僕はチヨキ。要義兄さんはゲー。

「ふっ、幸先いいぜ…」

なんか勝ち誇っている要義兄さんはちょっと間抜けに見える。

なんかあれだから突っ込みはしない事にした。

僕と要義兄さんは盤上に駒を並べる。

「よし、それじゃ今からお前をコテンパンに伸してやっから覚悟しやがれ！」

そう言つて要義兄さんは駒を一つ動かす。

午前十時三十分。僕と要義兄さんの対局が始まった。

「王手。詰みだよ。要義兄さん」

「……………いやっ！まだだっ、まだ何か手がある筈だあっ！」

なんてか…無様だな。盤上をどっから見ても要義兄さんの負けが明らかなのがある。

「要義兄さん、だいぶ前から詰んでるのに無駄な足掻きしないで。

大体要義兄さんの駒はもう王しかないじゃないか」

「ぐぬぬぬっ」

唸る。唸つたつて負けは負けなのに…。

「はいはい、唸つてないでこれ着てね」

僕は満面の笑みを浮かべてナース服を袋から取り出す。

「なっ…」

ナース服を見て目を見開く。

「まさか罰ゲームをしたくないなんて言わないよね？義兄さんは受けて立つてやるって言つたじゃないか。男に二言はないよね？」

「……………くっ」

要義兄さんは渋々ナース服を受け取つたけど一向に着替える様子が無い。

「義兄さんどうしたの？」

「……………」

僕の問いには答えずナース服と睨めっこ。全くヘタレ義兄さんめ。

僕はナースコールを持つ。

「義兄さん、早く着ないと看護師さん達にひんむかせるよ?」

「ぐっ…わかったよっ!着るさっ、ああ着てやるさっ!だからお前はこつちを見るなっ!」

「はいはい」

仕方が無いので向こうを向く。全く男同士だつてのに何を恥ずかしがるんだか…。

「いいぞ」

言われて振り向くとそこにいたのはナース服を着て恥ずかしそうにもじもじしながらベットに座っている要義兄さん。なんていうか変態にしか見えない。だった。思わず一步後ろに下がる。

「…おい、なんで一步後ろに下がるんだ?」

なんとなく視線も合わせ辛い。

「おい、なんで俺を見ようとしないうっ!」

…予想外の駄目さだったなあ、こんなにも似合わないとはね。しかしどうしたもんかなあ罰ゲームってこれだけじゃないんだよな。

まあ仕方ないか…。

「義兄さん、罰ゲームはそれだけじゃないんだ。この罰ゲームをちゃんと説明するとね、今日一日ナース服を着て、喋りも女っぽくつてのなんだ。だから今から自分の事は『俺』じゃなくて可愛らしく『私』って言うてね」

それを聞いた義兄さんは俯いてブルブルと震えている。

「に、義兄さん?どうしたの?」

「……………ふ」

「ふ?」

「ぶっざけんなあああああああっ!!!」

半泣きで叫んだ。そんなに嫌だったんだ…。

「あ…」

「奏、見舞いに来たよ。ところでさっき叫び声は……………くっ」

「よお座留に乙女執事見舞いに……………ぷふっ！」

叫んだところで楓義兄さんと彼方さんが見舞いに来た。楓義兄さんは要義兄さんを見た瞬間に目を逸らして笑いを堪え、彼方さんは見た瞬間思いつ切り嘖き出した。

要義兄さんは大口を開けたまま固まってしまっている。

「い、いらっしやい。義兄さん、彼方さん」

「……………くっ。あ、ああげ、元気、そうだな座留え……………ぷふっくっ」

笑いを堪え切れない程に震えている彼方さんに対して義兄さんは口許を引く付かせて笑いを堪えている。ただ絶対に要義兄さんを見ようとしなない。

「…奏、要は一体何してるの？」

「いやね、将棋で負けたから一日中ナーズ服着て女言葉で過ごすって罰ゲームなんだけど…まさかここまで酷いとは思わなくてさ」

「それはなかなかきつい罰ゲームだね」

「お前それはきついだろう…」

二人にちよっぴり駄目だしされる。

「そ、そうかなあ…」

要義兄さんは何も言わずに沈んでいた。それはもう目も当てられないくらいに沈んでいた。

「え、えーと要義兄さん。そんな落ち込まないで、ね？僕は一ヶ月間女でしか猫耳メイドでいるなんていう異常な罰ゲームを受けた事があるんだからそれくらいの罰ゲームなんて何でも無いって」

「なんだか不憫に思えた要義兄さんを慰める。要義兄さんはガバツと勢い良く顔上げて僕を睨む。

「リベンジだあっ！こんちくしょうっ！うがっ」

「ウツセエ、負け犬執事」

彼方さんのチョップがクリーンヒットして無様に呻く。

「何しやがる彼方！」

「うるせえ此所は病院だ馬鹿野郎」

「ぐぬぬぬっ」

まったくの正論にぐうの音も出ない様に見えた。

「皆でトランプでもやるうか」

突然の提案。僕達はほとんど同時に楓義兄さんを見た。

「義兄さんなんでいきなりトランプをば？」

「思い付きだから理由なんてないよ。敢えて言うなら八つ当たりだね」

ドス暗い何かが覗かせていなければどんな女性でも一発で墜ちるんじゃないかと思わせる笑顔で答えた。彼方さんも要義兄さんも恐れおののいている。

「や、八つ当たり？」

「そう八つ当たり。あの家はお義父さんから任された家だったんだよ。それを燃やされたとあっちゃあねえ…ふふふふっ」

まだ怒ってるのか。

「そ、そうなんだ…」

「そうさ。そういう訳だからトランプしよう」

「あ、あのよ楓さん、八つ当たりは分かったけどなんでトランプなんだ？」

そういえばそうだよ。なんでだろ？

「彼方ちゃんそれはね生まれてからこの方ある友人を除いてトランプで負けた事がないからだよ。負ける戦はしない主義だからね」

「そ、そうなのか…」

「そうなんだ…」

結局楓義兄さんの提案を誰も断る事が出来ず僕達はトランプをするという名目の八つ当たりをされる事になった。

「…奏さん、要ちゃん。見舞いに来まし…た」  
扉を開けるとそこにはなんだか良く分からない世界がありました。

「離せえっ！死なせてくれえっ！！」

「要義兄さんっ！やめて！早まらないでーっ！看護師さん達も私の服を脱がそうとするのはやめてーっ！」

「うふふっ、かあ〜わい〜」

「…嫌あ〜、やめて〜…ひっ！い、嫌あああああああ  
ああっ！」

可愛らしいフリルがふんだんに使われた可愛らしいピンクの服

頭には可愛らしいフリルの付いたカチューシャも着けている

に身を包んだ要ちゃんが窓から身を投げ出そうとしているのを完膚無きまでにネコ耳メイド（尻尾付き、一人称は私になっている）の奏さんが、襲いかかる看護師さん達を退けながら止めている。彼方ちゃんはイヌの耳と尻尾を着けて顔を真っ青にして頭を抱えて震えたり、小さい悲鳴や『嫌ああああああああああっ！』という叫びを上げたりしている。

「あっははは。愉快だ、愉快だあ〜やっぱこうでもしないとやってられないなよ〜」

そんな中楓さん一人だけが楽しそうに笑っていた。

「こういつのをカオスとでも言うんでしょか…。

「あれ、日永さんどうしたの？」

「そんな所にいたら邪魔になるぞ」

守戸さんと長谷川さんが手を繋いで仲良くやって来た。病室の入口に呆然と立ち尽くす私を避けて二人は病室の中を覗いた。

「すごいね、これ」

「そうだな、随分と愉快的な状況だ」

この状況を『愉快』済ませた二人。

「…な、なんで二人共そんなに落ち着いてるんですかっ！」

「そんなことよりアレ止めなくていいの？」

「…え。あつ、そ、そうだった！」

慌てて今にも投身自殺しそうなロリータ要ちゃんに駆け寄った。

「…要ちゃんっ！自殺はダメッ！」

「か、歌澄ちゃん！」

「……お、お、お、お嬢様っ！」

奏さんは安堵の表情を見せてた。なんとなく声がいつもより高い様な…。けど要ちゃんは私を見て顔を真っ赤にした後真っ青になりそれから土気色になった。

「う、うわあああああああああああ！離せえっ、死なせろーっ！」

「うわあっ、だからダメだつてば義兄さんっ！」

「だから自殺しようとしなくてくださいっ！」

私は慌てて要ちゃんにしがみつき、奏さんは更に力を込めて掴み直す。「ひいつ…嫌あ…稲○淳二は嫌ああ…ううっ、ふえく〜ん」

稲○淳二っ？なんで？ていうか彼方ちゃん泣いちゃった？！ど、どうしよう？でも今彼方ちゃんの所に行ったら要ちゃんが…。

私達がてんでこ舞いになっている時楓さん、守戸さん、長谷川さんは楽しそうに談笑していた。

「楓さん、やっぱ奏すごいね。アレじゃあ女の子にしか見えないよ。

まあ要さんは……」

「千央程じゃないが似合い過ぎだな。声もなんとなく高くなってるしな。まあ要さんは……」

二人共奏さんを見て感嘆して、要ちゃんを見て顔を逸らす。

……要ちゃん。

「いやあー僕もびつくりしたね。奏に女装はいけると思ってたけどまさかここまでとはね。しかも女装させたら物腰とか口調まで女の子っぽくなってるね。要は酷いけどね」

「……あははははは」

三人共楽しそうに笑い出した。

三人共笑ってないで助けてっ！

「離せえっ！こんな格好をお嬢様に見られちゃったからもう俺はお終いだああっ！！」

「……大丈夫だからっ、要ちゃん可愛いって。ねっ、奏さん！」

慌てて言うつと要ちゃんはぴたりと動きを止めて私と奏さんを見る。

「えーっつと……あ、あーうーん……そ……そう……そうだね？」

「……………」

黙り込む要ちゃん。

「……要ちゃん？」

突然勢い良く窓の棧に足をかけた。

「義兄さんだから駄目っ！！」

「要ちゃんっ！！」

必死に食い止める。

「離せえっつ、死なせでくれえっ」

「嫌あああ、もう嫌あっつ」

「……あははははは」

泣きながら飛び下りようとする要ちゃん、なぜか泣きじゃくる彼方ちゃん、楽しげに笑う楓さんと守戸さんと長谷川さん。

なんか収拾がつかなくなってるよ……。

ブチッ

ブチッ？何の音？

「歌澄ちゃん、義兄さんをしっかり掴まえててね」

「えっ？」

次の瞬間奏さんにたかっていた看護師さん達が気絶した。奏さんは要ちゃんのすぐ横で右手を振り上げ

「南無三ッ」

と言つて要ちゃんの首筋に手刀を食らわせた。

「離せえ〜っ！…うっ」

力無く崩れ落ちる要ちゃんを奏さんが受け止めて私に預ける。

「…奏さん？」

「ちよつとお願ひね」

奏さんはそれだけ言つて泣きじゃくる彼方ちゃんの背後に行つて

「ていつ！」

と首筋に手刀。

「ふええ〜っ、…うっ」

ドサッ

彼方ちゃんが気絶する。

今度は楽しげに笑う三人の背後に回り込み

「てりやっ！」

と三人の首筋に次々と手刀。

「…あははははは〜…うっ」「…」

バタバタバタッ。

楓さん、守戸さん、長谷川さんも気絶する。

「ふう、これでなんとか事態の收拾がついたかな？」

満足気に手を腰に当ててるネコ耳メイド・奏さん。辺りに屍（？）が転がってなきや仕事をやり切ったメイドさんに見えただろうなあ。なんて思ってしまった。

……これって本当に事態を收拾出来たって言えるのかな？

……大変だった。取りあえず看護師さん達は婦長が叩き起こして連れて行かれたけど義兄さん達と千央とノリはベットに寝かした。

「はぁ〜疲れちゃった」

「奏さん、どうしてあんな事になっちゃったんですか？」

「それはね、楓義兄さんにトランプで負けたからだよ」

どうしてそれだけでこんな事になるのか分からないという顔をして歌澄ちゃんは僕を見る。

「……どうトランプをしたらあんな事に？」

「負けたら罰ゲームだったから……楓義兄さんはそれはもう尋常じゃ無い程強くてね〜」

「……そんなに強かったんですか……」

感嘆の声を上げて寝ている楓義兄さんを見る。

「そうなんだ。それで最初は大富豪をしたんだ……」

〜〜回想開始〜〜

大富豪十番勝負 一回戦

一巡目は何事も無く、二巡目は楓義兄さんからだった。

「はい、革命」

「うわあ〜やばいなあ…とか思ってる则要義兄さんがしたり顔して  
いた。」

「ふっ、させるかっ！食らえ兄貴っ、必殺っ革命返しっ！」

「やるじゃねえか乙女執事！」

彼方さんが褒めるのも束の間。

「甘いな要。奥義革命返し返しっ！」

か、楓義兄さんスゲエツ！まさかの革命返し返しだ…。

「……なっ」

その後二回戦〜十回戦まで革命すれば楓義兄さんに革命返しをさせ、ババ二枚は必ず楓義兄さんに回って来るといふ展開だった。驚く事に楓義兄さんは一切のイカサマをしていなかった。

大富豪十番勝負

勝者・座留楓

敗者・唐本彼方

罰ゲーム・イヌ耳と尻尾を着けて語尾に「わん」と付ける。

「っ、次の勝負に行くんだ…わん」

顔を真っ赤に罰ゲームを受ける彼方さんは大爆笑した要義兄さんを殴ってトランプをきる。

「で、次は何をやるんだ…わん？」

「うーん、神経衰弱をやるっか」

神経衰弱一番勝負

一巡目終了時点の結果

僕・0組

彼方さん・一組

要義兄さん・3組

楓義兄さん・4組

その後義兄さん二人の一騎討ちの様な展開が続いた。

神経衰弱一番勝負

勝者・座留楓

敗者・僕

罰ゲーム・ネコ耳メイド（尻尾付き）

「お待たせしました。御主人様」

「」「」

皆僕を見て何も言わなくなった。

「ど、どうしたの？」

「あ、ああごめんごめん。似合うとは思ってたけどここまで似合うとは思わなくてさ」

楓義兄さんは誤魔化す様に言って、要義兄さんと彼方さんには「似合い過ぎだ」

と突っ込まれた。

「そんなこと言われても困るよ！」

そこで彼方さんが気付いて欲しくない事に気付いた。

「あれ？お前声が高くなって……」

「気のせいだよ」

間髪入れずに否定。

「それに口調もなんか変わって……」

「だから気のせいだってば。それで楓義兄さん、まだやるの？」  
誤魔化して楓義兄さんに質問をした。

「まだやるさ、次はダウトしよう！」

まだやるのか…と僕、彼方さん、要義兄さんは溜め息をついた。

ダウト三番勝負

一回戦

「ダウトだわん！」

「残念、これはQだよ」

「ま、またか……」

ダウトに失敗してうなだれる彼方さん。

二回戦

「ダウト」

楓義兄さんが要義兄さんの出したカードにダウトを宣言。見事  
的中。

「なんでそんなにバンバン当たるんだよ、兄貴！」

「だから言ったでしょ、トランプではある人を除いて負けた事が無  
いって」

余裕の笑みを浮かべて言い切った。

ダウト三番勝負

勝者・座留楓

敗者・唐本彼方

罰ゲーム・稲○淳二の怖い話を楓義兄さんが『もついい』と許可  
が出るまで聴き続ける。

「……………」

「彼方さん？」

彼方さんが顔を真っ青にして固まっていた。

「……………」

「？彼方一体どう……」

「……………」

真っ青な顔が引きつってきていた。

「彼方ちゃん？」

「嫌あああああああああああっ！」

彼方さん、まさかの悲鳴！

彼方さん逃げたした！

が、しかし楓義兄さんに捕まり逃げる事が出来ない！

「逃げちゃ駄目だよ」

「ひっ…嫌ああああああああああっ！」

そんなに嫌なんだ稲○淳…」。

「…彼方とはかくホラーとか駄目なんだよ」

要義兄さんはなんだか遠い目をしていた。

「…そうなんだ」

…唐本彼方リタイヤ

「さあ、次はポーカーをしようかあ」

まだまだやるのか…。

「……はあ」

要義兄さんと同時に溜め息をするとはたと目が合いまた二人同時に溜め息をついた。

ポーカー五番勝負一回目

彼方さんの泣き声混じりの悲鳴をBGMにポーカーが行われている。

「フラッシュ」

「俺はストレートフラッシュだ」

「ふっ」

楓義兄さんが僕達の役を見て鼻で笑い、そして

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「…」

僕も要義兄さんも何も言えなくなる。

楓義兄さん一枚も手札取り替えてなかったよ…。

その後もやっぱり楓義兄さんの一方的な展開だった。  
なんていうか普通じゃないよ…。

ポーカー五番勝負

勝者・座留楓

敗者・明刀要

「さあ罰ゲームだけど…」

そう言っ指を鳴らすと十数人の看護師さん達が何処からともなく現れた。

「さあ罰ゲーム執行だよ。君達、要にこれを着せてくれるかい？」

…いつの間に懐柔したんだろ。何か服を受け取った看護師さん達は

「うふふふ…」

という笑いと共に要義兄さんに詰め寄って行く。

「な、なんだお前等…や、やめろ、やめつやめろーっ！」

要義兄さんは看護師さん達に吞まれていった。

御臨終様です、要義兄さん。

着替えが終わったらしく看護師さん達が要義兄さんから退いていく。そしてそこにいたのは

「ぶはあっ！」

「あっはははははははっ！」

「ひっ…嫌あゝ…ひゃあああっ！」

僕は思わず嘔き出して、楓義兄さんは遠慮無く大爆笑、彼方さんはいまだ恐怖に泣き叫んでいる。

「なっ、笑うんじゃねえっ！」

「…ごめっ…くっ」

「あははははは、か、鏡見てみろって…要っ」

何処からともなく姿見を出してきて要義兄さんの前に立てた。

「はあ、っ……………」

なんて気持ち悪い顔してるのさ。

要義兄さんはあまりの自分の状態に愕然としていた。

「な、なんだこの格好……………」

頭には可愛らしいフリルの付いたカチューシャ、ヒラヒラフワフワのフリルだらけの可愛いジャケットにこれまたヒラヒラフワフワのフリルだらけの可愛らしいドレス、何処からどう見ても完璧な口リータファッション。

しかし、可愛らしい筈のそのファッションは要義兄さんの悪過ぎる人相と高過ぎる身長のせいですべてが台無しになっていた。

なんていうか酷過ぎる……………」

「…ん？」

気付いたら僕のすぐ後ろを看護師さん達があつちりと固めていた。まるで逃げ道を塞ぐかの様に。

「み、皆さんど、どうしたんですか？」

『うふふふふふつ』

こ、こわあああつ！

にじり寄って来る看護師達。すると不意に後ろから抱きつかれた。

「ひゃわっ！」

「つうゝかまゝえたゝ」

「な、なにす……………っ！」

前方にいた看護師さん達が僕に群がって来た。

ヤバイ！と思ったら要義兄さんが窓の棧に足を掛けていた。

「っ！退いて下さい！……………って聞いてないし！糞っ！要義兄さん早まっちゃダメっ！」

なんか我を忘れて群がる看護師さん達をなんとか押し退けながら要義兄さんにしがみつく。

「義兄さん！早まっちゃダメだつて！ああっ、スカート引っ張らな



「ブデータ壊すわ、あそこのマフィアを潰してこいと、あつちの秘密結社を壊滅させるとか、殺人事件を快決ズバツトの如く解決しろとか、最凶に最狂な殺し屋一族相手に一カ月逃げ延びるとかふざけるんじゃないってのっ！」

「か、奏さん？」

「あつ…ご、ごめん。つい熱くなっちゃって…」

「…い、いえ。なんか変な地雷のスイッチ押しちゃったみたいで…」  
歌澄ちゃんは苦笑いで僕を見る。

「と、とにかくそんな理由で女装した時は必ず声が高くなって一人称も私になる訳」

「…そうなんです。苦労してるんですね」

「そうなんだよ」

二人でしみじみしていると誰かが入って来た。

「お嬢様、今日も此所に居たんですね。ところでそちらの女性はどちら様ですか？なにやら奏君に似ているみたいですけど…」

若魚さんに悪気は無いんだろうけどちょっとへこむかも…。僕ってそんなに女みたいに見えるのかな、いやこんな格好だしそういう風に仕込まれちゃってるし見えるのか。やっぱなんかへこむよ…。

「この方は一体どうしたんでしょうか、まさか私何か失礼な発言で…」

「…えーとこちらは奏さんです、若魚さん」

「はい、知ってます。全然男の子には見えないですね、奏君。鏡の言った通りですね」

ニヤリと笑って言い放つ。

「こ、この人確信犯だよ…」。

「まあ奏君はどうでもいんですけど…」

そう言っへこんでる僕を無視して彼方さんの側に行き濡れた和紙を取り出した。

「なんで貴女はいつもいつも遅くまで帰って来ないのよ！」

叫び、あろう事かその和紙を眠っている彼方さんの顔に被せた。

「……ぐっ！むぐぐっ？」

不意に息が出来なくなつて手足をばたつかせてもがく彼方さん。えげつないってか何やってんの若魚さん…。

「歌澄ちゃん、アレ助けなくていいの？」

「…いつもの事だから大丈夫」

「いつも……」

なんでもないとばかりあっさり答えた歌澄ちゃんの顔は嬉しそうだった。

「どうしたの？」

「…仲が良いのが嬉しくて」

「……」

ほ、本気で言ってるのかな……。

「ぶわはっ！はあ、はあ、はあ、はあ…し、死ぬかと思った…」

「いつも私を屋敷に放つたらかしにしてる報いです！」

「若魚っ！お前いつも報復の仕方がえげつないんだよ、いい加減にしゃがれ！」

若魚さんは心外だとばかりに溜め息をついた。

「はあ…、とにかくもう帰って晩ご飯の準備しないといけないですよ」

そう言つて彼方さんの耳を引つ張つてベットから引きずり落とす。

「いだけだだだっ！」

「…ふわあゝあ。あれ、那波さん来てたんだ…ああ、そろそろ夕飯の支度の時間か」

彼方さんの声で起きたらしい楓義兄さんは起き上がるなり帰る準備を شدした。

「ええ、いつまで経つても帰つて来ないので迎えに来たんです」

「ごめんねゝ久しぶりにトランプしたもんだから夢中になつちゃつて」

軽い感じに謝る楓義兄さんにはあまり誠意は感じられない。

「何やってるんですか、もう。ところでお嬢様はどうなされるんで

す？」

若魚さんは楓義兄さんに対して呆れた様な顔をした後楽しそうに歌澄ちゃんを見た。

「…どうするとうとうと？」

歌澄ちゃんが質問すると側に寄って耳打ちした。

ゴニョゴニョゴニョ

「……………はわっ？え、えとそ、そそそそんなこ、事は、にやにやいので、です！」

顔真っ赤にして動揺しまくってる歌澄ちゃん。それを見て若魚さんはうつとりとした表情を浮かべる。

「クスクス、わかってますよ、朝方に迎えにきますので。ではもう帰りますね。さっ、行くわよ彼方」

「いでででででっ！だから耳引つ張るなよっ！そ、それじゃあまた来るぞ！」

若魚さんは彼方さんの耳を引つ張りながら出て行った。

「それじゃあ帰るね、奏。歌澄ちゃん、奏よろしくね」

「…はい」

歌澄ちゃんが快い返事を返すとニコニコと問題発言を言って出て行った。

「そうやって二人で居ると仲睦まじい夫婦に見えるよ。まあ奏がコスプレしてなかったらの話だけだね」

「なっ義兄さん！…ったくもう。ごめんね、歌澄ちゃん…歌澄ちゃん？」

歌澄ちゃんは俯いて顔を真っ赤にしてブツブツと呟いていた。

「…どうしたの？歌澄ちゃん」

「…はわっ！なんでも無いですっ。…ところで守戸さん達は起こさなくていいんですか？」

「うん、問題無いよ。この二人どんな状況でも一緒に居られるなら平気な奴等だから」

歌澄ちゃんは羨望のまなざしで手を繋いで寝ている千央とノリを

見ていた。

「…すごいですね。…私もこんな風になりたいです」  
しみじみとそんなことを言う歌澄ちゃんはなんだかとても綺麗に見えた。

「……そうだね。それじゃあそろそろ晩ご飯来る時間だし準備しようか」

「…はい」

退院したら目一杯お礼と御返ししないとな。

そんなことを思いながら僕の入院生活は過ぎていった。

## 10・僕と彼女の事件のその後と暇潰し（後書き）

はいつ、如何でしたでしょうか？楽しんでいただけただけなら幸いですがつまらなかつたらすいません。

次の話は学校が舞台です。鏡さんもチラッと出すつもりです。

評価・批評、感想待ってますっ！

## 11・僕と彼女の屋敷と趣味と田舎の風景（前書き）

「どうも皆さん御久し振りです！ 白羽謙治です！ 今日是我が妹である和心の素晴らしさを皆さんにはあつー！」

「天誅です。自業自得です。殺られて当然です。この恥さらし」

ベキツ、バキツ、ボキヤツ！

「失礼しました。皆様、初めまして白羽和心（しやうは）です。私は本編にまだ出ていませんが、この度、皆様にお礼と御詫びの為に参りました。まず、この小説『僕と彼女のなんとかかんとか』の読者が2000人を突破致しました！ 作者の雨永も小躍りして奇声を上げて喜んでいます。もう感謝してもきれません」

「そして、御詫びです。更新がしばらく滞ってしまつてすいませんでしたっ！理由はテストだなんだとあつたのは事実ですが、ただ単に、作者がヘタレのヘッポコチキン野郎なだけです。本当に申し訳ありません。それと、結局学校での話ではなくなつてしまいました。予告を反故にするなんて酷過ぎます。作者は『有言実行つてむつかしいね（笑）』とかほざいてましたがそんな理由になりません。天罰ものです」

「……木刀でそんなに激しくしなくても兄さんはお前を愛せばあつー！」

ドゴンッー！

「そろそろ時間ですので『11・僕と彼女の屋敷と趣味と田舎の風景』をお楽しみ下さい。私は兄と作者に天罰を下さないとイケない

ので。それでは「それで」

## 11・僕と彼女の屋敷と趣味と田舎の風景

病院の玄関で僕は伸びをする。

「ふういゝ…一週間振りの外だあゝ」

楓義兄さんの罰ゲームから三日後、僕は無事退院する事になった。

「…退院出来て良かったです」

「歌澄ちゃんには入院中、世話になってばかりだね。しかもそれだけじゃなくて歌澄ちゃんの屋敷の部屋まで借りちゃってさ」

「…気にしないで下さい、私も色々と迷惑かけちゃいましたからお互いに見合つとぶつと噴き出す。

「…なんかお互い同じこと言ってますね」

「あはは、そうだね」

すると突然、

「コホンッ！」

「うわっ！」

「…ひゃっ！」

若魚さんが後ろで呆れていた。

「お嬢様、奏君。何を病院前でイチャついてるんですか、邪魔になりますよ」

「…はわっ、い、イチャつくなんてそんなん」

「若魚さん、そんなイチャつくなんて事は……」

若魚さんは僕らの抗議をさらりと無視してさっさと車に向かった。

「奏君に屋敷の案内しないといけないんだから早く帰りますよ」

「…あ、若魚さん待つて」

「置いてかないで下さいよ」

「ここは日永家の屋敷。」

「見事だなあ」

見事に左右対象の大きな屋敷。大きな屋敷は何度も見た事があるけどこんなにここまで見事なものはありませんかと思う。ただ「なんで屋敷の前が畑になってるの？」

屋敷の前庭が在るべき場所には畑が広がっている。

「…要ちゃんはこの畑を『自給自足のできる庭』って言ってたよ」  
僕の隣りを歩く歌澄ちゃんは苦笑いして言った。確かに自給自足出来そうだ。畑だけかと思ったら川と池と田もあった。

「庭ってか世間一般の田舎のイメージのミニチュアみたいだね…」  
そうですね、と僕達の前を歩く若魚さん。

「それには私も同意します。でも、要が作った野菜は全部無農薬でそこらの野菜より格段に美味しいんですよ。ただ」

若魚さんはそこで話を区切ると顔に影が落ちた。

「常々矯正の必要があるかなあ…と……うふふっ退院してきたらどうしてやるうかしら…」

ちよっと怖いですが、若魚さん。

「…え、えーと、とにかくまず奏さんの部屋に案内しますね」

歌澄ちゃんは慌てて僕の腕を掴み若魚さんの前を歩く。

若魚さんは顔を元に戻し、

「分かりました。それではお嬢様、私は要の庭の手入れと屋敷の掃除をしていますので」

と一礼して庭の向こうに歩いていった。

歌澄ちゃんはそこで思い出した様に振り返り僕を見た。

「…そうだ、言い忘れてました」

そして微笑む。

「奏さん。ようこそ、私の家へ」

「…此所が奏さんの部屋です」

そうして案内された部屋はなんていうか……

「すごい……」

広さは丁度良く天井は普通より少し高い。天井まである壁一面の本棚は圧巻でGペン、丸ペン、インクにカッター、高級なトレース台などの画材道具が載ってる作業机がある。その右手には多種多様なトーンが入った棚。左手にはパソコンにペンタブ、スキャナとプリンタの複合機。ふかふかのベットに少し大きめの窓。

「…気に入ってくれました？」

「うん、気に入ったよ。ありがとう」

「…それは良かったです。それでクローゼットとかですけど……」  
歌澄ちゃんはベットの側の本棚に歩いて行く。何故かその本棚の縁には把手が。

「…此所に……うんっ……アレ？ こ、ここに……こ……ここに……」

歌澄ちゃんが把手を掴んで引っ張ってもビクともしてない。多分あの把手を引っ張ったら本棚が開いたらクローゼットになるんだろ  
うな。必死に把手を引っ張る歌澄ちゃんの姿は、かなり可愛くて和むけどそろそろ助けてあげないと転びそうだ……。

「歌澄ちゃん、変わりに開けるよ」

「あつ……すみません……」

歌澄ちゃんは恥ずかしそうにおずおずと下がって、僕は

「よっ」

と把手を引っ張る。すると案の定クローゼット　というより物置

の様な部屋 だっただけど……

「何、これ……」

「…クローゼットというか物置何ですけど……ダメ…でしたか？」  
「ダメじゃないよ。ダメじゃない。むしろ至れり尽くせりで感謝してもしたりない程だよ」

「じゃあ何が……」

「幾ら僕に女装が似合うからってこれは無いんじゃない……」

僕は横に少し移動して歌澄ちゃんに中を見せると僕と同じくらい驚いてた。

「…えっ？ あれ？ なんでこんな服が？」

そこにあつたのは家の地下倉庫に置いていた僕の私物。そして女物の服。しかもその服はヒラヒラフリフリのロリーな物に始まりナース服、メイド服、チャイナ服、etc、etc……。

しかも歌澄ちゃんにも身に覚えが無いらしい。

「…なんでこんな服があるんだろ……あ、そういえば水波音さんが昨日大荷物を抱えて家に来てた気がします」

「……水波音ちゃん……」

思わず頭を抱えてしまう。何してくれてんだよ……。

「…良く分からないですけど奏さんの事すごく怒ってました」

「え？」

僕なんか水波音ちゃんに怒られるようなこと……

「あ、」

しまったあゝっ、そういえば一週間前にテキトウな事言って逃げたんだっけか……。

「……とにかくここに服は取りあえず全部隅に寄せよう」

「…そうですね……ちよっぴり着てもらいたかったかも……」  
「ん？ 何か言った？」

歌澄ちゃんが何かを呟いた気がしたけど、なんでもないと首を振っていたから僕はさっさと服を隅に寄せた。

「……ここがトイレで、そこがお風呂です」

あのコスプレの為としか思えない服を寄せてから他の部屋の案内をしてもらってる訳だけど……まあ何とかやっぱり広い。廊下の至る所には高級そうな壺やら絵画やらがあるし。壊したりしたら破産しそう……。

そんなこんなで客室、姉さんと楓義兄さんの部屋、彼方さんの部屋、若魚さんの部屋と書斎、トイレ、お風呂、各階段と出入り口の位置等々を案内してもらった。

「……ここが私の第一研究室です」

なんだか今までの部屋より敞つい扉。歌澄ちゃんに案内されて中に入るとそこには

「……………何これ」

大量のプラモデル。ガ○プラ、トラン○フォーマーシリーズ、○ 트레이バー、勇者シリーズ、エ○ドラシリーズ、ファ○ナー、○ クエリオン、e t c、e t c…………。新しい作品から古い作品、しかも明らかに市販されて無い物も。

「……私の趣味なんです」

「趣味っていうかこれすごいなあ……」

「……へ、変？」

歌澄ちゃんは恐る恐る尋ねてくる。

「別に变じゃないよ。こんなに作れるなんてすごいよ。それに僕、プラモデルが好きな女の子よりもBLが好きな女の子の方がおかしいって思ってるから。そう絶対におかしい、というか狂ってる！」

これ以上言ったらあの光景が浮かびそうだ…………。

歌澄ちゃんはぼかんとした表情で僕を見ていた。

「あ…………ごめんね。昔色々あつてね」

「……そ、そうなんだ」

ちよっと変な空気が漂う。これは話を変えないと。

「あゝ……ところで今は何か作ってるの？」

歌澄ちゃんも気を取り直して答える。

「…はい、今はヴァル○ルドをフルスクラッチで作ってるんです」

…サ○ンナイトですか……。まさかのチョイスだね歌澄ちゃん。

「しかし、すごいなあ……」

「…ありがとう」

歌澄ちゃんは嬉しそうにしてる。そんな顔をされるとなんか僕まで嬉しくなってくるなあ……。

なんとなくだけ和やかな空気が辺りに流れる。そんな空気の中で僕はしばらくプラモデルや勇○シリーズの話で盛り上がった。

まあ男女間の会話としてこんな話題はどうなのか、と思わないでもないけど盛り上がってしまったものはしょうがない。

「…ここで最後。私の部屋です。第二研究室もあるんですけど、あそこは認識コードを持って無い人が入ろうとすると周囲の壁から大量の音速のパチンコ玉が打ち出されるんです」

絶対にそんな目には遭いたくないね……。

「…少し散らかってますけど気にしないで下さいね？」

広い。僕にあてがってくれた部屋の二倍はある。

キングサイズのベットにいかにも高級そうな机。本棚にはドイツ語と英語のハードカバーの本と漫画、雑誌、同人誌が収められていた。

歌澄ちゃんはパタパタと本棚に駆け寄り、同人誌を数冊取り出す。その姿はなんだかウキウキしてるというかなんというか。

「…サインして下さい」

差し出されたのは僕達のサークル『橘小社』の本と黒ペン。

そういえば歌澄ちゃんも僕達のファンなんだよね。

「うん、ちよっと待っててね」

サインを書いて歌澄ちゃんに渡すと大事そうに抱えて

「ありがとう」

と微笑んだ。

やっぱり嬉しいな、漫画家・時雨和雪の初めてのサインは歌澄ちゃん。なんていうか漫画家やってて本当に良かったよ。

歌澄ちゃんの部屋でたわいない話　お互いの趣味の事とか学校の先生の文句とか　をしていると玄関にあつた大きな振り子時計のゴーンという音が屋敷に響いた。

「…もう六時……」

「あ、ほんとだ。もうそんな時間なんだ」

「…そろそろ食堂に行きませんか？」

「そうだね。それにしても楓義兄さんと彼方さんの合作なんでしょう？　楽しみだなあ」

想像しただけで涎が……

「そうですね。今では前以上にご飯が楽しみなんです。お陰でいつもより食べる時間が長くなっちゃって」

「…それってゆっくり堪能して食べてるからかな、それとも食べる量が増えて？　出来たら前者だといいなあ……」。

で、僕の密かな願いも虚しく、歌澄ちゃんの食事時間が長くなった理由は食べる量が増えたからでした……。

まあそうなるのも分からなくは無いです。それほどに彩り豊かで豪華



にじり寄つて来る水波音ちゃん。その手にあるのはセーラー服。逃げようと下がるのを笑顔の姉夫婦に阻まれる。

「はっ？ ちよっ、な……っ！」

「自業自得よ。諦めなさい」

肩をがっちり掴まれる。

「かくなで君っ。きつがえましょ」

そして、無理矢理着替えさせられた。

「んんんカアワイツ」

「ちよっ、水波音ちゃんスカートと捲ろつとしないで！」

「いいじゃないのよ」

「良くないですよっ！」

「いいの……っ！ だから飲む飲む」

「んぐうっ!？」

歌澄ちゃんは僕の口に無理矢理一升瓶の口を突っ込んで酒を流し込む。

「んっんっん……」

そんな光景を彼方さんと若魚さんは感心した様に姉さんと楓義兄さんは

「一気っ！ 一気っ！」

と離立てる。歌澄ちゃんは相変わらず。

「~~~~っ！ ふはあっ！」

「にはははははははははっ！ すごいすごいっ ナイス飲みっ

ぶりいっ！ よし奏君っ、飲み比べよっ」

……何故？ そんな疑問を問うより先に目の前に一升瓶が二瓶どんと置かれる。

「…これは？」

まさか先に一升飲み切った方の勝ちってやつなんじゃ…。

「もちろん先に一升飲み切った方の勝ち　負けたら明日から一週間、学校又は職場にセーラー服で登校で〜す！」

……………本気でやらせて貰います！

僕は水波音ちゃんの隣りに立つ。

「良いですよ。臨むところです」

「にやつはつは〜　負けないよ〜」

歌澄ちゃん以外の人達は食事をやめて楽しそうに僕と水波音ちゃんを見物している。

レフェリーは姉さん。

「二人共、準備は良い？」

「オ〜ケイだよ〜」

「うん。いいよ」

構える。

「レディ……………ゴーツ！」

間。

「ぶはあっ！」

どんっ、と一升瓶を置いて水波音ちゃんを見ると

「ぐう〜…ムニヤムニヤ…秀秋君のヴァーカ…」

寝てるし…。

「……………どうしよう？」

「それなら客室にベットがありますのでそっちの方に運びますね。

お嬢様も食べ終わりましたし、彼方と楓さん、奏君、お嬢様は後片付けして貰えます？」

若魚さんがテキパキと指示をしていき、水波音ちゃんをおぶって客室の方へ行き、未だに飲んでいる姉さんを残して僕達は夕食の後片付けをした。

早く片付けて着替えないと…。

一段落して、皆でテレビを見たり話をしたりそんな和やかな一時を過ごした。

そして、風呂に入り後は寝るだけ、と部屋を出た時、歌澄ちゃんに引き止められた。

「…奏さん」

風呂上がりのせいか頬が少し朱に染まりなんとなく色っぽかった。内心ドギマギしながら、

「どうしたの？」

と平然を装う。

「…あ、あの…明日、一緒に服を買いに行きませんか？」

「…え」

思わぬ誘いに驚きを隠せなかった。

「………だめ…？」

「ダメじゃないよ！ うん、いいよ。大丈夫」

歌澄ちゃんは嬉しそう笑って

「…ありがとう、それじゃおやすみっ」

そのままトテトと自分の部屋の方に掛けて行った。

…明日は良い日になりそうだなあ

同日、イタリア。 ローマのとあるカフェテリア。

「やっぱ仕事の後の一杯は格別だね」

彼女はのんびりと紅茶を味わっていた。

「私の馬鹿弟子は今頃何してんのかね」

一人ごちてると男が声を掛けてきた。

「相席してもよろしいですか？」 『不滅の終焉』インマールテルヘンさん

「女連れのエセ紳士が座る椅子は無いよ」

『不滅の終焉』と呼ばれた彼女は心底嫌そうに言い、さっさと失せると手を振った。

「連れないなあ、折角お仕事の依頼をしようと思ったのになあ…」

こんな酷い扱いは初めてだよ。皆に言い触らさなくっちゃね」

男は嫌味つたらしく彼女に返した。

「ちっ！ はいはいどうぞ！」

「ありがとうね」

「すいません、旦那が」

そう言っつて男と連れの女性が席に着いた。

「…で『不可視の影』とその連れが私に何の用？」

「実はね、僕達の代わりに子供達の面倒を見て貰いたいんだ。なんか家が焼けちゃって、今は人様の家の部屋を借りて生活してるらしいんだよ」

「……自分の子供なんだから自分で行けよ」

「それがそうもいかないんですよ。私も旦那も仕事が忙しくて…」

「……はあ。なんで私なんだよ」

「そんな訝しげな顔をしないでくれ。子供達のところに行けば最近君が鼻屑にしている漫画の作者に間違いなく会えるから」

「何っ、時雨和雪かつ!？」

「ああ、もちろん。それに奏とも会いたいだろ？」

『不滅の終焉』は考え込み、

「よし、良いだろう」

「ありがとう。期間は奏が高校を卒業するまで。報酬は一ヶ月に付き75万円を……冗談だよ、75万円を支払う。他の依頼を請けた時には奏を手伝わせても構わない。これで問題はないかな？」

「ああ、まったく問題ないな」

「それは良かった」

『不滅の終焉』も『不可視の影』も満足そうに頷いた。

「それでは俺と家内は仕事があるからもう行くよ」

彼はさっさと立ち上がり歩き去り、

「それでは子供達をよろしくお願ひします」

と彼の妻は丁寧な頭を下げ、旦那である『不可視の影』が消えていった方へ歩き去っていった。

「よっしやっ、時雨和雪先生と会う時の服でも買いに行くかなっ」



## 11・僕と彼女の屋敷と趣味と田舎の風景（後書き）

雨永です。はい、如何でしたでしょうか？

前書きに和心ちゃん初登場です。謙治も久々に登場です。

作者のダメっぷりに関しては見て見ぬ振りをして頂けたらな、と……いや、マジですいませんでした。

しかしまさか2000人突破するとは思いませんでした。皆さんにはもういくら感謝しても足りません。

ところで本編ですが多少無茶な展開はありますが悪しからず。まだまだ精進の足りないだけです。暖かい目で見て欲しいです。ケビンとウォルターですけど後でまたでてきます。多分……。今度こそ有言実行して見せます！！

〜次回予告〜

奴が：奴がやってくる！ 気配無く忍び寄る恐怖、獲物を無惨に切り裂く爪牙、そして：闇夜に光る戦慄の双眸。奏は、生き延びる事が出来るのかっ！？

次回っ！ 僕と彼女のなにかかんとか『12・僕と彼女の猫まつしぐらっ？』

お楽しみにっ！

12・僕と彼女の猫まつしぐら? <教室の隅っこで猫と叫ぶのじや> (前書)

どうも、なんとか和心さんの天罰から逃れてきた雨永です。

今回は短いです。

読み安くなっていたらいいなあ〜と思います。

それではお楽しみ下さい。

12・僕と彼女の猫まっしぐら？ 〈教室の隅っこで猫と叫ぶのじや〉

獲物を狙う数多の双眸。切り裂く爪牙。強靱でしなやかな四肢。  
そして、逃げ惑う僕。

ミィミィ、ニャンニャン、ニャーニャー、ガオオオオオツ、グ  
ルルルッ…

誰かつ、助けて…

「……………っ！ はあ、はあ…はあ…はあ…ゆ、夢かあ」  
窓の向こうでは空が白み始めていた。

僕にはある心的外傷<sup>トラウマ</sup>がある。そのトラウマの対象が対象なだけに、  
出掛ける時は何気に苦労したりしてる。それでもなんとか誰にもそ  
のトラウマを悟られずに今日まで過<sup>こ</sup>ごしてきた。

歌澄ちゃんと服を買いに行く約束をした今日一日、きっと良い日  
になる、と僕は思っていた。

「行って来ます」

「…行って来ます」

一週間振りの学校にウキウキと楽しくなってくる。歌澄ちゃんと一緒に登校というのもより一層、僕をウキウキさせる。

「…それにしてもお酒強いですね。あんなに飲んだのに」

感心して良いのやらダメなのやら良く分からないといった顔で歌澄ちゃんが聞いてきた。

「ん、あー飲み比べなら誰にも負けた事無いよ。『ザル』って良く言われる」

「すごいですけど、まだ未成年何ですからね」

「……返す言葉ありません」

…注意されてしまった。

未成年の皆さん、お酒は二十歳になってからですよ！ …何を今更とは言わない約束でお願いします……。…。

二人で楽しく話をしていたらいつの間にか商店街まで来ていた。

「おっはよ〜、歌澄。それからそれから御久し振りだね、奏君」

「おはよう、陽子ちゃん」

「御久し振り」

ここで陽子ちゃんと出会い、一緒に歩き始める。

「……………でね、その客がまた臭くつてさあ、もうほんと勘弁」  
「…大変だったね、それはまた」  
「そんな絵に描いた様な人がいるんだね……………ん？」  
三人で談笑しているとすぐ側の電柱の下に段ボールが。そしてその中には……………！  
「…！ ごめんっ、用事思い出したから先に行くねっ！」  
脱兎の如く駆け出す僕。とにかく『アレ』から逃げなきゃっ！

「…奏さん？」  
「一体どうしたんだろう？ もう見えなくなっちゃった…。」  
「どしたんだろね……………ん？」  
「どうしたの？」  
陽子ちゃんは何かの前にしゃがんでいた。  
「見て見てっ！ かつわいいよ〜」  
「見てみると段ボールの中に小さな動物が。」  
「…ほんとだね〜、ちっちゃくて可愛い」  
私達はその可愛いさにひとしきり和んだ後、名残惜しくも学校に向かった。

「はあ…はあ…はあ…なんだってこの世にあんなのが生命活動なんてしてるんだ」

あの段ボールのあった場所から学校の生徒玄関まで脇目も振らずに全力疾走。

ちよつと…歌澄ちゃん達に悪い事しちゃったかな？

そんなことを思いながら内履きに履き替えて教室へ。

教室に入ると皆集まってなにやら盛り上がっていた。

「どうしたの？」

「あら、座留君。御久し振りね、もう大丈夫なの？」  
集団から顔を覗かせたのは委員長だった。

「うん、お陰様で。それでどうしたの？」

「うん、この子の事なんだけど…」

委員長が少し避けると太郎が何かを抱いていた。

「よお、久し振りだな、奏。どうだ？ 可愛いだろ、子猫」

「……………」

子猫、あはは…子猫、猫、ですか…は、はははははははは…

「私の家の猫の子なんだけど流石に一匹飼うのいっぱいいっぱいだね」

「それで一匹は俺の家で貰ったんだけど、残りの子をどうするかってんで学校の誰かに貰って貰おうって事で連れてきたって訳よ」

「まったく、だからって子猫そのものを持つてくるのは非常識よ」

「何言ってるんだよ。実物見せた方が良いに決まってるだろ？」

「まったくもう…」

委員長と太郎の説明が耳に入らない。

僕はジリッ、ジリッと慎重に下がる。

なんとかしたいけど皆が居る手前思いつ切り逃げ出すのはまずい。そんなことをしたら今までの努力が灰燼に帰してしまうっ！……………そ

うだつ、トイレに行つて、そこでチャイムギリギリまで過ぎそうつ！  
「なあ、奏。お前も抱いてみるか？」

とんでもない提案をしてくれやがる太郎を後で打ちのめす決心をしながら計画を実行に移す。

「え、遠慮しておくよ。僕、ちよつとトイ……」

「ナア」

今まで静かだった猫が鳴いた。

「うわああああっ！！」

ドンツ！ ガタガタツ！ ガタンツ！

尻餅ついて後ずさる。後ろの机を幾つか倒してしながら。

「く、座留君っ！？」

委員長や皆が驚く。

「はあああああ……あ……ご、ごめん。大じよ……?!」  
なんとか誤魔化して立とうとするけど立てない。

……つて、立てないっ！？ やばいつ、腰が抜けてる！？ どうするっ、どうすればいいっ！？

「座留君、ほんとに大丈夫？」

心配そうな顔をする委員長。

委員長に腰が抜けたと言うべきか、言わざるべきか。動揺しながらもなんとかそれを考えてると突然、

「ほれ」

眼前に子猫。その距離僅かに数センチ。

……ね……」……

「うひやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああっ！！」

ズガガガガガッ！！ ドンッ！

女性の様な悲鳴を上げて机を蹴散らしながら全力で教室の壁際まで下がる。

太郎はニヤニヤと笑い、その他の人達は啞然としていた。僕は皆のそんな反応を見る余裕は皆無でパニックを起こした。

猫が、猫があっ、猫があああああああっ！ 嫌ああああああああああっ、猫が、猫が猫猫猫猫猫猫ネコネコネコネコネコネコねこねこねこねこ………来ないで〜来ないで〜くるなあああああああああっ！

すると太郎が子猫を抱えて僕に近付いて来る。その顔はとても嬉しそう。

「ひへへへへ…ほれ、奏。子猫がお前と遊びたがってるぜ………」

「ナアー、ナアー」

「…ひっ！」

…ネコが…ねこがくるっ！…

迫り来る太郎と子猫。

怯える僕。

逃げたくても腰が抜けて動けない。

後ろは壁。

これ以上下がる事は叶わない。

太郎と子猫がすぐ側に来る。

「かゝな〜で君っ、あっそびましょっ」

太郎の恐怖の囁きと共に子猫が膝の上に



いいし、僕が保健室に居る理由は思い出しちゃいけないような気がしてならない。

「ねえ、歌澄ちゃん、委員長、なんで僕は保健室にいるんだっけ？」

「えっ……く、座留君覚えてないの？ 何にも？」

委員長は驚き尋ねた。その表情には何か焦りの色が。

「うん……ただ、どうも何か忘れてる様な……」 委員長はソワソワして、落ち着かない。

……どうしたんだろ？

「……本当に大丈夫なんですか？ 奏さん」

「うん、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。ところでどうして歌澄ちゃんがここに？」

「あ……いえ、その学校についてすぐに奏さんに会いに行ったら、城戸さん達に担がれて保健室に向かっているとところだったんです。それで……」

歌澄ちゃんは少し恥ずかしそうに言い、

「……何はともあれ無事で良かったです」  
笑ってくれた。

嬉しいな、まあ今こうして歌澄ちゃんと気安く話してるところを太郎とかに見られたら殺されちゃうかもね。

「ありがとう」

「……はい。ところで今日、お昼一緒に食べませんか？」

「うん、いいよ」

歌澄ちゃんからのこの上無く嬉しい御誘いに僕は即答した。

こうして、歌澄ちゃんと途中で別れて僕は気分良く教室に戻った。この時、委員長が深刻そうな顔をしているのが気になったけど、大方、太郎がまた何か面倒事を起こしたんだろうと当たりを付けて気にしない事にした。

僕は迂闊だった。まさかあの時、保健室に僕でも、歌澄ちゃんでも、委員長でも無い、『四人目』が居たなんて。そして、委員長の深刻そうな顔の意味を僕は思い知らされる事になるとは…。

その頃イタリアでは…

「うーん…これ…いや、ダメダメこんなのダメッ！ それとも…こっち？ …ダメだ……」

『不滅の終焉』は『時雨和雪』と会う時の服の為に、店で気に入った服を片っ端から買い、家でそれらを選びすぐっていた。

「うーん…やつぱはこっちなあ……これも違うっ」

すべての『もの』を圧倒し、終わらせる『不滅の終焉』もなんだかんだで一人の女性。着て行く服が決まらない。

「何着てくべきかなあ………そうだ！」

彼女は何かを思い付き、家の物置を漁り始めた。

目指す獲物は服の生地。

「コスプレ〜コスプレ〜」

……  
続くんだニヤン

12・僕と彼女の猫まっしぐら? <教室の隅っこで猫と叫ぶのにゃく

(後書

いやぁーどうでしたか? ニヤン というのは余計だったかなあ…  
なんて思わなくも無いです。

もうすぐ長期休暇が始まります。ガンガン更新していくぞっ!!  
……はい、嘘にならないよう頑張ります。

評価・批評・感想待ってますっ!

〜次回予告〜

学校に響き渡る奏の悲鳴。襲いかかるのは多賀太郎が率いる『柳  
泉学園の女の子を御守りし隊(一年部隊)』と『猫の軍団』。果た  
して、奏は生きて歌澄の元に辿り着くことが出来るのかっ!?

次回っ! 13・僕と彼女の猫まっしぐら? <僕と太郎と猫科の  
動物の生きる道>

お楽しみにっ!

13 僕と彼女の猫まつしぐら? 僕と太郎と猫科の動物の生きる道 (前書)

今回は猫が全然出てきません。というか前のあとがきの予告とちよつと(所じゃない)違うし……面目無いです。

…おもったより奏のトラウマ編(或いはニヤンニヤン編)が長くなりそうです。

それでは13 僕と彼女の猫まつしぐら? 《僕と太郎と猫科の動物の生きる道》どうぞっ!

13 僕と彼女の猫まつしぐら？

〈僕と太郎と猫科の動物の生きる道〉

「よう、久し振りだな、奏」

「あー…久し振り？」

教室に戻ると謙治が話し掛けて来た。

「なんで疑問形なんだよ…」

「まあ気にしな…」

「やあ、奏。さっきの時間は保健室で日永歌澄とニヤンニヤンして居たのかな？」

突然現れて変な事を言い出すノリ。なんだその邪悪な笑みはっ。

「なにっ！ そうなのかつ？」

「謙治、ノリの戯言を鵜呑みにするんじゃないっ、ノリも勝手な事言うなっ！ 後、ニヤンニヤンってなんか古いし」

「うおう、すまん」

「ならば乳繰りあってたとしても言えばいいのかな？」

「そういう問題じゃないからっ！」

あっはっはっほとんどに女子かと思わせるノリの笑い。小さい頃はこんなんじゃ無かったような気が…。

「まあ冗談は切置き」

「本題に入ろうか」

ノリと謙治がニヤリと笑う。

「…なんだこの不吉な予感…」

「奏、君は私達に隠し事をしているね」  
断定するノリ。

隠し事？ なんだ？ 心当たりが有り過ぎる…。

「えーと、何のこ…」

「とぼけるなよ、奏。ネタは上がってんだ」

僕の誤魔化しを遮り謙治が言う。

「な、なんだよ、謙治」

そして、

「お前、猫が悲鳴を上げる程ダメなんだろ」

「!？」

なんでっ!？ どうしてバレたっ!？ ボ口を出した事なんて一度も……一、度も……ああああああああああっ!!  
そうだった! そうだった! 学校に来たら委員長と太郎が子猫を持って来てて、子猫が鳴いたら僕は情け無い事に腰を抜かして、太郎と子猫に襲われて気絶したんだっ!

ノリと謙治が詰め寄って来る。

「さあ、どうなんだ?!」

「う……あ……ああ?!」

気が付くとクラスのほとんどの人が 何故か男子がやたらと少ない 興味深々といった顔で僕を見ていた。

「なっ……何、これ……どうして皆そんな顔で僕を見るのさっ!」  
クラスの何人かが『だって…ねえ?』とか『うん、やっぱりね』とか言わせた。

ああ…不吉な予感が僕の頭で縦横無尽、所狭しとよぎっていく…。

「なんて顔してるんだよ、奏。お前、自分がなんて言われてるか知ってるか?」

そんなの知るかつ! このままじゃ僕の今までの努力が……。

「お前はやたらめつたら年上の女にモテる上に、成績は優秀で運動神経が良く、性格も良い。しかも、成績や運動神経の良さをまったく鼻に掛けて無いということから『女顔の年上キラー・完璧超人座留奏』と呼ばれているんだぞ」

「……なんだよ謙治、そのけつたいなのは」

『女顔の年上キラー・完璧超人座留奏』なんてのを聞いたら流石に思考も止まってしまっ。

……つていうかそんな通称なんて嫌だよっ！！

「まあ落ち着け。その完璧超人も完璧じゃないかもしれないという事態に皆、興味を持って当然だろう？」

「それに、だ」

そう言ったノリはとても、とても寂しそうな顔をしていた。

「私達は幼馴染みで、腐れ縁で、親友だろう？ 隠し事なんてされたら寂しいじゃないか……」

「ノリ………っ！」

馬鹿だ、僕はなんて馬鹿野郎なんだっ！ ノリ、千央、謙治に隠し事なんてしてっ！ 一体僕達は何年一緒にいるんだよっ！ 今の僕があるのはノリ達のお陰じゃないかっ！

「くっ……ごめんっ！ ノリ、謙治……実は僕っ……！？」

僕が改めてノリを見るとその顔はさつき見せた寂しそうな顔じゃなくて、新しい玩具を買って貰った子供の様な顔だった。その表情からは『早く言えっ、言うんだっ！』と聞こえるようだ……。

周りの皆も期待に顔を輝かせている。

「なっ！」

「どうした、ん？ 実は、なんなんだ？」

憎たらしい笑いを浮かべて僕に続きを促すノリ。

ぐぬぬぬぬぬっ！ こ、この女あっ！ 腹立つっ！ もうすん

ごい腹立つっ！！ しかも微妙に見下ろされてるってというのが許せないっ！！！！

「どうした、ほら、早く言わないとチャイムが鳴ってしまっじゃないか」

「さっさと吐いて楽になっちゃえよ」

ノリと謙治が急かしながら一歩詰め寄って来る。相変わらず僕に刺さるクラスメイト達の視線。

どうする、下手に動くと墓穴を掘りそうだ……。

再び周囲を見回すと不意に皆の輪から外れ、思案顔していた委員長と目があつた。

やった、これでなんとかできるかも！

と思つたのも束の間、委員長は気まずそうな顔して視線逸らした。  
……ア、アウエーだ。

ノリと謙治はさつさと白状しろと僕を急かし、委員長は僕と目を合わせようとしない。そして、ノリと謙治に便乗してるクラスメイ卜達。

ああ、四面楚歌ってこういう事を言うんだつたね……改めて思い知らされたよ。泣きそうだ……。なんかもう耐えられません。さよ  
うなら、僕の努力達。

僕は挫けた。

「はあ……ああ、そうですよ、そうですともっ！　僕は猫が死ぬ程嫌  
いですよっ！」

挫けた僕はやけくそ気味に白状した。丁度それと同じタイミング  
でチャイムが鳴り、教師が入って来た。

皆、満足気な顔で各々の席に戻っていく。ノリと謙治は晴れ晴れ  
とした顔で。

人の弱味を握ってそんなに嬉しいかつ！　……まあ、なんだかん  
だ言つてノリの言葉は堪えたな。隠し事をされたら寂しい、か……。  
僕は、もっと過去の事を皆に話せば良いのかな？

……分からない、分からないけどさ、やっぱりこれからも今まで  
通り僕はノリ達に　もちろん歌澄ちゃんも　隠し事をし続ける  
よ。

ごめんね、皆。

でも僕は皆に嫌われたく無いから……皆に嫌われる事だけは絶対  
に嫌だから。

だから僕は隠し事をし続けるよ。

……それにしても太郎の奴何処に行ったんだろ？　折角取っ捕ま

えて、精神が崩壊するまでいたぶってやるつもりだったのに……授業が終わったなら、委員長に聞いてみるか。

柳泉学園美術部部室。薄暗い部屋で太郎は机に腕を組んで座っていた。

「喬、戻ったか」

太郎が言うつと喬と呼ばれた男が何処からともなく現れた。

「はっ、隊長。只今戻りました」

「どうだった？」

「はい、やはり座留奏は猫が駄目の様です」

その報告に太郎はほくそ笑む。

「ふっ、やはりな……ん？ 喬、どうした？」

喬は拳を握り締め怒りに顔を歪めていた。

「隊長っ！ 座留の野郎は今日の昼休みを歌澄ちゃんと過ごそうとしているのですっ！」

太郎のこめかみに青筋が浮き出る。

「なんだと……許さん、許さんぞっ、座留奏えっ！！ 喬、皆に急いで連絡を回せ、速やかにノルマを達成し本部に集合せよ、と」

「御意っ！」

喬はあっという間にその場から居なくなつた。部室には太郎が一人取り残される。

「座留奏、日永歌澄ちゃんは我々柳泉学園男子のアイドルなのだ、

お前の様な輩には渡しはせん、渡しはせんよっ！」

凜々しい顔で微妙に格好悪い事を言った太郎は、窓の向こうにいる体操着姿の女子達をじっと見ていた。

続くんだにやっ！

13・僕と彼女の猫まつしぐら? 〈僕と太郎と猫科の動物の生きる道〉(後書)

どうも、最近テンションの上げ具合が狂い気味の雨永です。如何でしたでしょうか?楽しんでいただけたら幸いです。

なんとか次回でニヤンニヤン編を終わらせて次に行きたいです。では評価・批評・感想お待ちしております。

〜次回予告〜

襲いかかる猫と男達。逃げ惑う奏。そして、ついに明かされる太郎の正体。果たして奏は歌澄の元にたどりつけるのか??

次回!!14・僕と彼女の猫まつしぐら? 《嫌いなものは嫌いなものだから仕方無いのじゃあ》

14・僕と彼女の猫まっしぐらへバカップル！って罵倒していいですか？（前

冬休み中一度も更新できなかつたへタレの雨永です  
待たせてしまつて本当に申し訳ありませんでした。

それでは、本編をどうぞ！

14 僕と彼女の猫まつしぐらへバカカップル！って罵倒していいですか？

「委員長」

「な……く、座留君……」

授業も終わり、僕が話しかけると委員長は僕を確認した途端に狼狽し始めた。

「あのさ、太郎探してるんだけど何処にいるか知らない？」

「あ、あのね座留君。そのね……えーと……怒らない……でね？」

「何が？ どうしたのさ委員長」

「太郎が君を気絶させた後高笑いしながらクラスの殆どの男子を引き連れて、どっか行っちゃったのよ」

「なんだろう、この悪い予感は。」

「『者共、今すぐ猫を集めるぞ』って叫びながら……」

……や・ば・い。やばい、これはやばいぞ。大体なん  
で太郎は僕を目の敵にするんだろう？ いやいや、今はそれどころ  
じゃないぞ、下手したらあの悪夢の再来……。

「ダメだダメだっ！ そんなこと断固阻止しないと！ それで心当  
たりはっ？」

「ご、ごめんね。学校にはもういないみたいなの……」

プチッ

「いやああああああああああああつー！！」

「く、座留君？」

僕の突然の叫びに教室にいた誰もが驚き、そして凍りついた。

「フ、フフフフフ……良い度胸だ……太郎……滅してやる……」

余談だけど、この時の僕は悪魔も裸足で逃げ出すんじゃない  
かと思わせる程の恐ろしい笑みを浮かべていたとかいないとか

話を戻す。委員長は恐怖でガタガタと震えていたけど僕はそれに  
気付かずに

「太郎ーーーーーっ!!」

と叫びながら勢い良く教室から出て行った。

勢い良く出ていった僕を待ち構えていたのは

ニヤー

……………何故だっ、何故猫畜生がここにっ!

慌てて教室に戻る。皆がぽかんとした顔をしてるのを尻目に箒でドアを開かない様にする。

「ど、どうしたの?」

僕は委員長を無視して窓から外を確認。よし、いない。

「なあ、奏。いくら嫌いとはいえ過剰過ぎないか?」

呆れ顔の謙治が阿呆な事を聞いてくる。過剰だと? 条件反射に

近いものだよ馬鹿野郎う!

「過剰じゃない! いいか、よく聞け、謙治。三千は下らない猫やトラやライオン達がどこまでも、いつまでも、追いかけてくるんだぞ! お前にこの恐怖が分かるか?! あつら肉食なんだぞ?!  
どんなに、どんなに走っても追いかけてくるんだぞ……………」

「にゃあ〜」

僕は素早く窓を開け、足をかける。

いざっ!

「だあっ! 早まるな奏! 猫じゃない、ノリだ!」

「え?」

僕が見たのは腹を押さえ、口許を手で隠し、肩を震わせながら全力で堪えている長谷川矩子。

「……………プツ……………ククツ……………クツ……………」

……………む、ムカツク。謙治もその哀れなものを見る目付きはなんな

んだよっ！

「まったく。どうフオローしていいか分からんから流すけど猫とかライオンとかを三千匹もいる場所なんてあるもんか？」

「流すなっ！ まあいいけど。猫畜生がいる場所はあるよ。南米のチリの猫狂の金持ちの屋敷」

「はあ？」

「いや、そんな顔されても……」

「すごい訝しげな顔してるなあ……」。

「謙治、それは実在するぞ。まあ普通知ってる方がおかしいんだがな」

「なんでノリが知ってる？ とうかもしかして今俺迂闊なこと言ったんじゃ……」。

「はあ、長谷川まで何言っ……」

「と、とにかくっ！ 謙治、もし自分が異常な数の猫畜生共に襲われたらどうする？ っていうかどうなると思うっ！」

「うっ、それは嫌だな……というか絶対トラウマになるな……」

「謙治の言葉に『だろ？』と相槌をうちながらノリの方を見ると含み笑いをしている。

まさか……ね。

廊下にはずっと猫が張り付いてるから出られないし、幸い教室移動のある授業はなかったけど一歩も出られなかった。

そんなこんなでもう昼休み。

いざ、歌澄ちゃんの元へっ！ 勢い良く立ち上がり弁当を引っ掴み窓に足を掛けた。

「何やってんだよ奏」

「見て分らない？」

なんで心配そつな顔してんだろ？

「こんな堂々と自殺なんてやめろよ」

「はい？ 自殺なんてするわけないだろ？」

謙治が口を開き掛けた時、教室の戸が大きな音を立てて開いた。

「座留えっ！ 積年の怨みいつ今日こそ晴らしてくれべらあっ！」

入って来たのは太郎。太郎を見た瞬間、身体が反射的に動いていて、気が付けばドロップキックを見事にかましていた。

「よし、行こう！」

ボロボロの太郎は立ち上がり不敵な笑みをうかべてる。

「お前はもう俺には勝てない」

太郎が手を上げると猫を抱いた男子が……

「っ！」

迷う事なく窓から外へダイブ。着地の衝撃をうまく吸収して素

早く駆け出す。

ひとまず茂みに隠れる。

さて、どうやって歌澄ちゃんのとこに行こうかな……。あれだと

恐らく歌澄ちゃんの回りも張ってるんだろつなあ〜……。そうだ！

携帯で連絡すれば……

「いたぞ！」

「まずいつ！」

やっぱり猫がいるしっ！

パシッ！

「うわっ！？ な、何が当たっ………！」

やばいやばいやばいやばいやばいやばい！

猫がわらわらと集まって来てる……さっきのはまさかマタタビ？

全力で逃げた。校舎を逃げ、校庭を逃げ、図書館を逃げ……

「そ、そう、だ……上着を脱げば……」

上着を脱いであらぬ方に投げるとうまい事猫はそっちに行ってくれた。

辺りを警戒しながらブラブラしていると気が付くと図書館裏にいた。「ふいふ、なんとか撒けたかな？」

時刻を確認するともうすぐ昼休みが終わる時間だった。

「はあ……結局いけなかった。太郎め、冥府に送ってやる」「誰を冥府に送るって？」

その声に後ろを振り向くと猫を抱えた太郎とその他。いつの間にか反対からも猫を抱えた男子が。

……絶対絶命だ……。

太郎は勝ち誇った顔して僕に要求を突き付ける。

「座留奏。もし猫に襲われたく無かったら俺達『柳泉学園美少女保護委員会』にもう二度と日永歌澄ちゃんに近寄らないと誓え」

……うわあつ、引くわあ……。

「どうした？ 『はい』と言えば助かるんだぞ？」

『……なんか、見えてイタイよ』

……なんて言ったら怒るだろうなあ。かと言ってあんな無茶苦茶な要求を飲むのは絶対無理だしなあ……なんとか誤魔化すしか無いよね。

「あのさ、」

「なんだ？」

「怒らないで聞いてね？」

「言ってみろ」

「歌澄ちゃんとは家族ぐるみの付き合いでね、ほら、僕の家焼けちやっただでしょ？ それで歌澄ちゃんの親が『家ができるまで我が家の部屋を貸してあげましょう』って言うてくれて。だから近寄るなっって言うのちよつと無……」

ん？ あれ？ やっぱ無茶……だったかな？

この場にいる男子一人残らず殺気だつてる？

ジリジリと歩みよつて来る男子（猫装備）。

後ろは……だ、ダメだ、後ろにもいる……。あちゃー墓穴掘つちやつた……。

諦めかけたその時、男子（猫装備）の動きが止まり、一点を見つめてる。

なんだろ？

思ったのも束の間目の前を男子達が抱えていたであろう猫達が駆け抜けた。

「ひゃあっ！」

猫、猫怖い……っ！

猫の恐怖に体を丸めて一分くらいたつたらうか、恐る恐る顔を上げると

「……へ？」

あんなにいた男子も猫も一匹たりともいなかった。

いるのは朝の子猫を抱いた委員長と太郎だけだった。

「な、夏水……」

「太郎……あんた……ふざけるのも大概にしなさいよ……。いつも他人に迷惑かけて、いつもいつも他の女の子の尻ばかり追っかけて……っ、ひつく、うつく、もっと私の事見てくれたっていいじゃないっ！ ふえーんっ！」

「な、夏水！ 泣くなっ！」

「あんた、ひつく、泣かせたん、ぐすっ、じゃないのよお……」

泣きじゃくる委員長と狼狽する太郎。

……まあ、身から出た錆だよな。

「馬鹿ばかバカバカあゝ。後始末をする私の身になってよお……」

「う……悪かった。これからはもっとお前の事、大事にしてやるからさ、な？ もう泣きやめよ」

うわあ……すっごいここに居づらい。どうしよう？

太郎はちらりとこっちを向いて苦い顔をした。

『頼むから向こうに行ってくれ』

『僕だつてこの場から去りたいのはやまやまだけど、猫が前を通った時に腰抜かして動けないんだよ……』

お互いに目で言い合っていると委員長がとんでもない事を言い出した。

「ほんと？」

「ああっ、もちろん！」

「じゃあ、ここで……キス、してくれる？」

「はい？」

い、委員長？

太郎の目が点になっている。恐らく僕が目も点になってるだろう。キスしてくれなきゃ、信じてあげない」

上目遣いで甘えるように太郎にくっつく委員長。

「わ、わかった」

太郎っ！？

よく見ると太郎は顔真っ赤にし、もはや委員長しか見てなかった。

こ、このバカップルーーーーッ!!

「ちよっ……………」

止めようとしたのも虚しく太郎と委員長は熱いキスを交わした。

……………遅かったか。

太郎と委員長は顔離して潤んだ瞳で見つめ合う。

まだ腰抜けて動けないし、どうしよっかなあ……………あ。

太郎と委員長とばったり目があってしまう。

「……………あ」

「うげっ」

「……………あ、あははは」

委員長の顔色は赤から青へ。太郎はその場で硬直。僕はただ笑うしか無い。

「な、なな、な、なななんでもまだ座留君がいるのよっ!! うわあーんっ!!」

委員長は泣きながら走り去ってしまった。

「太郎、太郎ったら」

「はっ! あ、あれ? 夏水は?」

硬直が解けた太郎は委員長を探す。

「太郎、委員長は恥かしさのあまり泣きながら走って行っちゃったよ」

「あ、ああああああああああああっ! 俺はっ、俺はなんて事を!」

頭を抱えて身悶える太郎。

自業自得、因果応報だよ、太郎。

「夏水いーーーーっ!」

「あっ!」

太郎は委員長を後を追いかけていった。

……あれ？ 誰もいない。腰は……まだ抜けてる……猫攻めの後は放置プレイ？ 歌澄ちゃんも昼食食べられなかったな……後で謝らないとな。動けなし、弁当でも食べてよ。

僕は腰を抜かしたまま図書館裏で弁当を食べる事にした。一人寂しく。

ああ、今日の弁当はなんだかしょっぱいなあ……

14・僕と彼女の猫まっしぐらへバカップル！って罵倒していいですか？（後

如何でしたでしょうか？次回はやっとな鏡さんがやってくるはずですよ。  
あと和心もついに本編に登場するかもしれませぬ。

評価・批評・感想よろしくお願いします。

15・僕と彼女の後輩と師匠 《天才剣道少女と青い美女》（前書き）

「どうも~~~~っ！ 和心です！ 私、白羽和心ですっ！ ついに、ついに本編に出れましたっ！

皆さんっ！ 私の勇姿をどうぞ御覧下さいっ！」

という訳で新キャラ登場の15・僕と彼女の後輩と師匠《天才剣道少女と青い美女》をお楽しみ下さい。

15・僕と彼女の後輩と師匠 〈天才剣道少女と青い美女〉

某空港。そこに一人の女性が下り立った。

切れ長の目。艶やかな紺碧の髪。この世すべての女性が羨むようなボディ。その身体を際立たせる青いスーツ。その女性を一言で言い表すなら『絶世の美女』。

「何年か振りに帰って来たな…… 『あの』 バカは元気にしてるかな？」

女性、『不滅の終焉』 もりかわあき 森川鏡は空を見上げてそう呟いた。

「……秦さん、」

「あ、ちよっと待っていてくれる」

帰る支度をしているといつものように歌澄ちゃんが教室に迎えに来た。当然のように男子達から殺意の籠ったまなざしを向けられる。先日のアレ以来直接的な事をしなくなったのは助かるんだけど、あの視線はどうもなあ……。

「……奏さん、私今メイドロボット造ろうかと思ってるんですけど、容姿をデザインして貰えませんか？」  
「いいけど……なんでまたメイドロボット？」

歌澄ちゃんはすごく眩しい笑顔で楽しそうに言う。

「……ただのメイドじゃないんですよ、空は飛ぶし、膝からはロケットランチャー、ゴルフオンハンマー、ブローケン○アントム、高周波ブレード、etc、etc……素敵だと思いませんか？」  
本当に好きなんだな……すごく生き生きしてるなあ。

「……奏さん、聞いてますか？」  
「あ、うん。うーん、素敵かもしれないけど武装は要らないんじゃない？」  
「そんなことはありません！」

珍しく語気を荒げる歌澄ちゃん。

「いいですか？ 武装はロマン！ ロマンなんですよ！ ロボット在っての武装。武装在ってのロボットなんです！」

「そ、そうなんだ」  
「そうなんです！」

凄い必死に熱弁する歌澄ちゃんはとっても可愛い。うん、とてもじゃないけど、『でも、メイドロボットに武装は要らないんじゃないかな?』とは言えなかった。

校門に向かいながらスパロボ談義に華を咲かせてると

「っ！ 歌澄ちゃんっ！」  
「きゃっ！」

歌澄ちゃんを抱きかかえてその場から飛び退く。

「…………ど、どうしたの？」  
「流石は奏先輩です。あの攻撃を女性を抱えながらよけるなんて……」

さっきまで僕達がいた所にいたのは刀を片手に柳泉学園中等部の制服を着た黒髪のツインテール少女。

「和心ちゃん、危ないからやめてよ。歌澄ちゃんに何かあったらどうすんのさ」

「問題ありませんよ。私は奏先輩の实力は知ってますし、奏先輩しか狙っていませんし」

「……あの奏さん」

「どうしたの？ 歌澄ちゃん」

「……は、恥かしい……です」

僕はしっかりと歌澄ちゃんを抱き締めてる。歌澄ちゃんの顔は林檎のように真っ赤になってた。

「うわあっ！ ごめん！ 歌澄ちゃん！」

慌てて歌澄ちゃんから離れる。

顔が熱い、多分僕の顔も赤くなってるな……。

「……あ！ いえ、そんな……危ないところを助けてくれて、それでその抱き締められた事はその……う、嬉しくて……」

その恥かしそうな顔の破壊力はゴ○ディオクラッシャー並。

「えと、その……」

僕と歌澄ちゃんの嬉し恥かしいやり取りを和心ちゃんに止められた。

「何をイチャイチャしちゃってるんですか」

どこまでも冷ややかなまなざしで僕達を見る和心ちゃんはなんか不機嫌な気もしないではない。

「い、イチャイチャなんてしてないっばー！」

歌澄ちゃんもコクコク頷く。それでも和心ちゃんの冷ややかなま

なごしは変わらない。

「ま、いいですけどね。あなたが日永歌澄先輩ですか？」

「……………うん」

歌澄ちゃんが返事をするのと和心ちゃんは礼儀正しくお辞儀した。

「先程はすみません。私は白羽和心（しんねい）と言います。和む心（むこころ）と書いて和心です。以後お見知りおきをよろしくお願いします」

「…よ、よろしく……………」

歌澄ちゃんがおずおずと返すと和心ちゃんが僕の腕を掴んで引く張る。

「さ、先輩、道場に行きましょう」

「いや、今日は用事があるから無理だよ」

「それは……………あの方とデートでもするんですか？」

そう言った和心ちゃんには得体のしれない凄みがあった。

こ、怖いよ……………。

「デートではないけど一緒に『給食屋』に行くんだよ」

「……………それがデートじゃないなら何なんですか……………」

和心ちゃんの手が刀にかかる。

なんで怒っているかは分からないけど、襲われるのは嫌だなあ……………

「ねえ、別にそんな気にしなくても良いんじゃない？ それにほら、練習相手なら別に僕じゃなくても……………」

「行きます!」  
「へ?」

和心ちゃんは何かを決心したように僕の言葉を遮った。

「えと……どこに行くの?」

「私も一緒に給食屋に行きます! 良いですよねっ、日永先輩!」  
「……え、う、うん」

事態の推移を成すすべなく見ていた歌澄ちゃんはその勢いに圧倒されて思わず頷いた。

「え、えーと……」

なんでそうなるんだろう?

和心ちゃんは刀を抱いてドンドン進んで行く。

「奏先輩、日永先輩、何してるんですか、早く行きましょう!」

僕と歌澄ちゃんは只目を合わせて困った顔をするしかなかった。

三人で校門までいくと人だかりが出来ていた。  
歌澄ちゃんも和心ちゃんもその人だかりには興味が無いようだった。  
た。

うーん、ちょっと気になるけど……ま、いいか。

そう思い素通りしようとした時、聞こえてきた話声に僕の歩みがピタッと止まった。

「あんな美人な人、俺見た事ねえよ」

「凄い……青い髪なんて初めて見た……」

「あの青いスポーツカー派手だなあ」

青い髪の美人に青いスポーツカー……。悪い予感がする……。

「…奏さん？」

「先輩？」

「あ、ごめんごめ……」

人だかりの向こうから聞こえてきた声に動きが完全に止まった。

「そこのお前、そう、お前だ。座留奏って奴を知ってるか？」

なんであなたがいるんですか、鏡さん……。

「えーと、確かさつきそこに……」

そう聞こえたと思うと人だかりが真つ二つに割れ、艶やかな紺碧の髪、切れ長の目、大人の女性として完璧と言える身体を持った女性が現れた。只、その女性は某ゲームキャラである、マ○マネ師匠（ア○イ・v・e・r）のコスプレをしていた。

「ふわあゝあんな美人初めて見ましたよ、奏先輩」

「…マ○マネ師匠？」

やっぱりというかなんとというか歌澄ちゃんはそのコスプレが分かっていた。

「お、いたいた……」

僕を見つけた鏡さんはニヤリと笑って僕の方に向かって来た。

……こういう時は、逃げるが勝ちだよ、うん！

「……ひゃあっ!?!」

「ちよっ、先輩!?!」

歌澄ちゃんと和心ちゃんを両脇に抱えて鏡さんとは反対方向へ全力疾走。

「ふっ、甘いつ!」

一瞬で僕の前に立ち塞がる鏡さん。

何のこれしきっ!

僕は鏡さんの手前でブレーキをかけてすぐさま反転。その反動で抱えてる二人の足が鏡さんを襲う。

「っと、やるじゃないか」

鏡さんが足を避ける為にのけ反った隙に道路の反対側に渡り、店の屋根を飛び越えた。

振り切るようにあっちこっち行きながら走り続ける事しばし、給食屋の前で僕はやっと足を止めた。

「ふう、歌澄ちゃん、和心ちゃん、いきなりごめんね……ってああ  
っ！」

「きゆう……」

「あうう……気持ちわる……」

歌澄ちゃんは気絶して和心ちゃんは顔を真っ青にして口に手を当てて吐き気を堪えてた。

「ああっ、和心ちゃんちょっと我慢して！ 高階さん！ ちょっと開けてっ！」

そう店の中に向かって叫ぶと出て来たのは『何？』と書かれた段ボールを持った、段ボールを持った……マ、マンティコア？

マンティコア 人間の顔、ライオンのような胴体、サソリのような尻尾を持つという古代の幻獣。マンティコアという名はペルシア語で『人喰い』という意味。その文字通りに人肉が好物。

確かこういうのだったと思う。それで、今僕の目の前にいる高階さんの見た目は人の顔、ライオンの体、サソリみたいな尻尾のあるキグルミ。

高階さんはセクシー（？）ポーズをとり『私のマンティコア姿力ワイイ？』と書かれた段ボールを持つてる。

……どう返したらいいんだ？ 正直な話、気持ち悪いけど、それを言っただけいいのかなあ？

「す、すごい前衛的ですね……」

『嬉しい事言ってくれるじゃない』



ここは給食屋の奥にある高階さん家の客間。  
部屋の真ん中に敷かれた布団には歌澄ちゃんが気持ち良さそうに  
寝ている。

和心ちゃんは部屋の隅で壁の方を見て泣いている。

高階さんはマンティコア姿ではなくライオンの頭、山羊の胴体、  
蛇の尻尾のキマイラ姿。そんなキマイラ高階さんはゲロまみれのマ  
ンティコアのキグルミを目の前に膝をついて沈んでいた。

「えーと……高階さん」

『……何か？』

「そのキグルミ取りあえず洗濯したとうですか？」

高階さんは『……うん』と書いた段ボールを残してマンティコア  
のキグルミを持って客間を出ていった。

取りあえず高階さんのフォローはできたかな？ 次は……

「……ふ、フフ……吐いちゃった……先輩の目の前で……吐  
いちゃった……ふ、フフ……」

……く、暗い。今にも自殺しちゃうんじゃないかと思わせるくら  
いに暗い……。

「な、和心ちゃん？」

「……ゲロ吐き女になんの用ですか？ ゲロ臭くなっちゃいますよ  
……」

卑屈になっちゃってる……まあ、無理も無いだろうけど。でも原  
因は僕なんだよね、悪い事しちゃったな……。

「ごめんね、なんか僕のせいで……お詫びと言っちゃあなんだけど  
この用事が終わったら練習に付き合わせてくれない？」

「いいんですよ、こんなゲロ女に気なんか使わないでください……」

和心ちゃんは相変わらず陰鬱な顔でウジウジしてる。

うーん、押しが弱かったかな？

「いいから、いいから。過ぎた事を悔やんでも仕方が無いよ。はい、決定！」

「……別にいいですけど」

和心ちゃんの声はさっきまでと変わらなかったけどよく見ると小さく笑っていた。

機嫌が戻ってよかったよ、さて……

「それじゃあ、僕は店の方にいるから高階さんが戻って来たらそう言っておいてくれる？」

「わかりました」

「それと歌澄ちゃんもよろしくね」

「……わかりました」

なんで最後に和心ちゃんが言い淀んだのか分からないけど……ま、いいか。

「あ、コピック新色出たんだ〜、そういうばトーンにも切れてるの  
あつたよな〜」

やっぱり給食屋は楽しいな〜。

画材を見てると奥から歌澄ちゃん、和心ちゃん、高階さんがやつ  
てきた。

「…奏さん、すみません。気絶しちゃって……」

申し訳なさそうに謝る歌澄ちゃん。

あ……またこんな顔させちゃった……。

「いや、僕が悪かったよ。ごめんね」

「…そ、そうですか？」

「うん、そう」

「…はい」

歌澄ちゃんは申し訳なさそうな顔を笑顔に変える。

うん、良かった良かった。

「……………」

和心ちゃんを見た時、なんだか面白くなさそうに口を尖らせた。  
うーん、やっぱり和心ちゃんなんか機嫌悪いなあ……どうしたん  
だろう？

和心ちゃんが妙に不機嫌な事に首を傾げつつ、会計を済ます為に  
高階さんとレジに向かった。

キグルミを着た高階さんは馴れた手つきでレジを打ってる。  
いつ見てもすごいよなあ……。

『6420円になりました』

「はい」

『丁度お預かりします』

高階さんがお金をレジにしまうのを確認してから歌澄ちゃん達のところに行こうとすると高階さんに引き止められた。

「なんです？」

『あのさ、歌澄ちゃんと和心ちゃんだけ？ 奏君はどっちが本命なのかな？』

本命？ なんの話だろ……。

『何を言ってるのか分からないって顔してるね。だからね、歌澄ちゃんと和心ちゃんのどっちが好きかってこと』  
「なっ!？」

いきなり何を言い出すんだこの人はっ!

キグルミのせいで表情がまったく分からないけどニヤニヤと笑ってるような気がする。

『で、どっちなのかな？』

高階さんはそのライオンの顔をズズイッと僕の顔に近付ける。ど

うしようも出来ない妙な威圧感がある。

「うっ………か、歌澄ちゃん………です」

そのせいなのかついポロツと本音を漏らしてしまった。

「あ………」

『んふふふ、そっか歌澄ちゃんかあ。きっと色々大変だろうけど頑張れよ、青少年』

高階さんはそう書いた段ボールを放置して店の奥へと行ってしまった。

なんか知られてはいけない人に知られてしまったような気がしてならないんだけど……。

僕達三人は給食屋を後にして、学校の道場へと向かっている。

「…和心ちゃんはロボットって好き？」

「へ？ ロボット………ですか？」

歌澄ちゃんの質問に狼狽する和心ちゃん。どう答えたらいいのか分からずに目で僕に助けを求めてくる。

「あ、あはは………」

どうしたらいいのか分からなかったから取りあえず苦笑いで返したら和心ちゃんに睨まれてしまった。

……取りあえず、頑張れ、和心ちゃん。

「き、嫌いではない……と思いますけど」

「……本当！？ ……最近のロボットアニメはCGに頼り過ぎだと思わない？」

「ロ、ロボットアニメですか？」

只ただ困惑するばかりの和心ちゃんと顔をキラキラ輝かせて楽しそうにロボットについて語る歌澄ちゃん。

いやぁー微笑ましいなあ、これで何事もなければ……あ、そうだった。そうだったあゝっ！

「和心ちゃん」

「はい？」

「道場へは裏からこっそり行こう」

歌澄ちゃんと和心ちゃんがぼかんとした顔で僕を見た。

「なんで裏からこっそりなんですか、先輩」

「奏さん、校門にいた女性のせいですか？」

「うん、まあ……そういう訳だから、お願い。あの人は昔色々あったんだよ……」

思い出されるのはいろんな意味で辛かった日々。お陰で猫が尋常じゃ無い程の恐怖の対象となり、女性になりきる事が出来るようになり、他にもあんなことやこんなこと……

「……奏さん、どうしたんですか？」

「えっ？」

ボーっとしてたらしい、歌澄ちゃんが心配そうに僕の顔を覗いていた。

「なんか凄く遠い目をしてましたよ？」

「ああ、ごめんごめん。ちょっと昔の事思い出しちゃって……」

「先輩……それって……」

僕の言葉に不安そうな顔になってしまった和心ちゃん。

やはりまだ多少なりとも不安があるんだろうな。和心ちゃん、小さい頃から慕ってくれてたもんなあ……。

「大丈夫だよ、和心ちゃん。じゃ、さっさと行こっか、稽古やるんでしょ？」

「はい！」

僕は学校の塀をよじ登り、こっそりと道場に侵入した。幸い、鏡さんはいなかったようだった。

「……はあ……はあ……奏、さんも、和心ちゃん、もす、すこい、です」

僕も和心ちゃんもそれほど疲れなかったけど歌澄ちゃんはかなり息を荒げてた。

「大丈夫？」

「……だ……じょう、ぶ、です……」

今にも死にそうな顔の歌澄ちゃんは全然大丈夫そうには見えない。体力が無いとは聞いてたけどここまで無いとはなあ……。

「日永先輩、だらしないですね。水飲み場はあそこにありますんでご自由にどうぞ」

「……あ、ありが、とう……」

歌澄ちゃんはフラフラとおぼつかない足取りで水飲み場に向かう。……あ、危ないな。

和心ちゃんはすっかり呆れ顔で歌澄ちゃんを見ている。

「日永先輩軟弱過ぎです。たかだか2、3メートルの塀を登ったくらいであれば無いですよ……」

「歌澄ちゃんはほら、科学者っていうかなんとか……運動とは無縁の娘だからさ。まあ、僕もあそこまで無いとは思わなかつ……」  
「和心おおおおつ……」

そんな叫びと共に誰かが和心ちゃんに突っ込んで来る。和心ちゃんはそれをひよいと避け、足を突き出した。

ビッタンッ！！

誰かは勢い良く倒れ、したたかに顔を床に打ち付けた。そしてピ

クリとも動かない。

「それじゃあ着替えて来ますね」  
「うん」

倒れてる男を無視して和心ちゃんは更衣室へ向かい、僕は剣道部の練習を眺める。

今は小中高の部員が素振りをしていた。

柳泉学園剣道部。全国でもトップクラスで、大きな大会では小中高大の団体・個人のいずれにもその名前を連ねている。中でも有名なのが『女帝』和心ちゃんと

ガバツ

「はっはっは！ 和心は恥ずかしがり屋さんだなっ！ そこがまた最高にあいくるし……あれ？」

「お前は見苦しいよ、謙治」

和心ちゃんに飛び付こうとしてあしらわれ、鼻血を垂れ流しているのは学年一のモテ男・白羽謙治。剣道界ではその容姿と疾風のごとき連続技から『疾風の貴公子』なんて呼ばれてるらしい。

僕からしてみれば、謙治は『変態シスコンキング』だけどさ。ちなみに和心ちゃんの『女帝』というのは小学校の頃から負けた事が無いからとか。

「奏、お前なんでこんなところにいるんだ？」

鼻血をダラダラと垂らしながらそんなことを聞いて来る謙治。

汚いよ、顔を近付けるな！

「和心ちゃんの練習相手だよ」  
「なんだと……」

謙治はのっそりと起き上がり、竹刀を正眼に構えた。

……っ！ このシスコン男っ！

慌てて謙治から離れると謙治が突っ込んで来る。

「テメエ……よくも俺の和心をたぶらかしなあっ！ 奏といえども許さねえ！！」

怒り狂った謙治は正眼から僕の眉間に突きを放つ。

ヒュゴオツ！ ズガッ！

「うわいつ！？」

竹刀は空を裂き、道場の壁を穿つ。

あつぶな。本当、和心ちゃんが絡むと人が変わるなあ……。  
道場にいる誰もが『またか……』という呆れ顔で僕らを見てる。

「避けるんじゃねえ……」

「避ける決まってるだろ！」

謙治は僕との間合いを一步で詰め、大きく振りかぶり逆胴目掛け  
て振り下ろす。

「天ちゆぶっ！？」

謙治は変な声を上げて倒れる。その後ろには白い剣道着と袴をは

き竹刀を持った和心ちゃんが謙治を睨んでた。

「天誅です。この恥さらし」

竹刀に血がついてるような気がするけど気にしない事にする。

「先輩、竹刀です」

和心ちゃんから竹刀を受け取ると和心ちゃんは防具をつけ、準備を始めた。

取りあえず謙治が邪魔だな、寄せとこ。

僕は動かなくなった謙治をロープでしっかりと縛って脇に転がす。

「よし、これで気がついてても邪魔になんないかな」

「先輩、準備出来ましたよ」

「うん、じゃあやるっか」

「はい」

うう、私って本当に体力が無いなあ……。どうしてあんな塀をひよいひよい登って行けるんだろ？

私が水飲み場から戻ってくると奏さんと和心ちゃんが対峙してる。和心ちゃんは防具をしっかりとつけてるけど、奏さんは防具も何もつけていない。

道場にいる誰もが二人を見てる。

奏さんは下段に和心ちゃんは正眼に構える。

「いきます。いやあああつ！」

和心ちゃんが声を張り上げて面を打ち込む。

奏さんは半歩斜め後ろに下がるだけでそれを避け面を軽く打つ。

「っ！」

和心ちゃんは奏さんの竹刀を振り払い再び正眼に構える。

「相変わらず速いな」

「いやあああつ!!」

パッパーンッ！

あつという間に二人は鏝競り合い。そう思うと今度は和心ちゃんが引き技を放ち、奏さんはそれをあっさりと竹刀で受け止める。

パンッ！ バチィッ！ ダンッ！ バーンッ！

奏さんは和心ちゃんの激しい攻撃をいとも簡単に受け止め、いなす。

「……すごい……」

「だろ？ なんだって俺の妹と親友だぜ？」

「ひゃうっ!?! ……白羽……さん?」

私の足下にロープで縛られて転がってる白羽さんがいた。

「や、日永さん」

「……あの何してるんです?」

「見て分からない? 縛られてるんだよ」

「……どうしてですか?」

何か縛られても仕方の無い事でもしたのかな?

「気が付いたらこうなってた。この縄解いてくれたら助かる」

「……は、はぁ……」

縄を解いて上げると白羽さんは伸びをして身体をほぐし始めた。

「日永さんはさ、奏が三年くらい前まで行方不明になってた事知ってるか?」

「……えっ?」

そんなこと、私は奏さんから一言も聞いてない……。

白羽さんは顔を曇らせて頭をガシガシと掻く。

「あー、あいつ言っってたのか……てっきり言ってるもんだと思っただがなぁ……」

「……あの、行方不明って……」

「気になるって言うのは分かるけど、こればかりは俺の口からは言えない」

そう言った白羽さんの顔は真剣そのもの。

そういえば、今まで奏さんから聞いた話は何なの？

奏さんを見ると笑みを浮かべながら必死に打ち込んでくる和心ちゃんを軽くあしらっている。

「日永さん」

白羽さんは奏さん達を見ながら私に話し掛けてくる。

「奏のこと嫌いにならないでくれよ。あいつ、多分言ったら嫌われるって思ってるからさ」

そう言った白羽さんの横顔はとっても優しい目をしていて付き合い合いの長さを感じさせた。

「…嫌いになんか、なりませんよ」

「そっか、ありがとな」

私は何があっただって奏さんを嫌いになんかなりません、嫌いになるわけ無いじゃないですか。

「はあ……はあ……はあ……ありがとう、ございました……」  
「ふう……お疲れ様、和心ちゃん」

和心ちゃんとの稽古を始めてから一時間半、やっと終わった。

和心ちゃんは一礼して剣道部員の元へ向かい、整列する。僕が歌澄ちゃんのところに行くとハンカチで汗を拭ってくれた。

「お疲れ様です、奏さん」

「ありがとう、歌澄ちゃん」

「ん、んっ！」

突然の咳に驚いて咳がした方を見ると整列した部員が冷めた目で僕らを見ていた。

「「あ………すみません」」

僕達は慌てて脇に避けた。

終了の礼が終わると和心ちゃんと謙治、そして剣道部の部長さんが来た。

「なあ和心、俺が、汗、ふいてぶっ！」

「やめる、馬鹿兄！ ったく……。あの、奏さん、ほんとにありがとうございました」

謙治を伸した和心ちゃんが丁寧にお辞儀する。

「いいえ。それより和心ちゃんの方こそお疲れ様。前より強くなっ

たんじゃない？」

「そ、そんなことないですよ！」

和心ちゃんは恥ずかしそうに手を振る。

「いや、確かに強くなっていたぞ、白羽妹」

部長さんはそのデカイ手を和心ちゃんの頭にポフツと置いた。

「竹刀の振りは速くなっていたし、技のキレも良くなっていた。あと体力の方も付いたみたいだな。やっぱり天才だと思わないか、座留」

「そうですね、僕と違って才能がありますよ」

そう言うと和心ちゃんも部長さんも変な顔をする。

「あれだけ強いのに自分に才能が無いって言うのはどういふことですか？！」

「そうだぞ、厭味にしか聞こえんぞ？」

「そんなこと言われても……僕は只単に場数を踏んでるといふかなんというか……」

実際、僕に才能が無いからなあ……。

「それに竹刀の振りの鋭さだって摺り足のキレだって和心ちゃんの方が上ですよ。それじゃあ歌澄ちゃんが待ってるんで、もう」

「む、またはぐらかされた気がするんだが……」

「私も同感です……」

不満そうに唸る二人を苦笑いで誤魔化して僕は歌澄ちゃんの所に

戻る。

「待たせちゃってごめんね。早く帰って夕飯食べよう」

「…はい。私とってもお腹が空いちゃいました」

少し恥ずかしそうに言う歌澄ちゃん。

あゝ、なんか癒される……。

「じゃっ、さっさと行こう」

「…はい」

僕達は帰路につく。狂乱の宴が待ってるとも知らずに……

15 僕と彼女の先輩と師匠 《天才剣道少女と青い美女》（後書き）

「……………どうも、和心です……………」

雨永（以下・雨）：どもです。作者の雨永です。和心ちゃん暗いね

「……………」  
雨：そんなに暗い顔してべへラアツ!? なっなんでいきなり竹刀で殴るのさっ!

「当たり前だっ! どうして私がゲロを吐かんといけないんですかっ!  
折角……………折角気合いを入れて頑張ったのに……………」

雨：ノリ……………かな? あっ、でも多分今後も似たような事になると思うよ。あははは。

「……………」

ジャキッ

雨：そ、その刀は何かなあ〜なんて……………

「待遇改善っ!」

雨：ぎいやああああああつ!

評価・批評・感想よろしくお願い致します!

16 僕と彼女のキスと宴へ青と酒乱とアル中と主夫。未成年の飲酒はダメ絶対

ついに！ 更・新！ ウイイイイイタアアアアアアアツ！！！！

ついに、ついにやりやしたよ！ やつと更新で「ア○ベイン流奥義

っ！ 冥空斬○剣っ！」

げばあっ！！

「鬱陶しいっ！ 一ヶ月以上も更新しないなんて……私の努力を無駄にする気っ！？ あ、毎度お馴染みになりつつある白羽和心ですうるせえ……私の努力ってゲロっただけじゃねーか

「天誅！！」

ごはあっ！

「さて、それでは第16話、僕と彼女のキスと宴へ青と酒乱とアル中と主夫。未成年の飲酒はダメ絶対！」をどうぞ！」

あ、後書きにお知らせがあるので是非そちらも見てみて下さい！

「ただっ……?!」

「…ただい……っ?!」

家の玄関を開けるとそこには

バタン

僕と歌澄ちゃんは速やかに玄関の戸を閉めた。

「僕は今見ちゃいけないものを見たような気がするんだけど……」

「…私も見ちゃいけないものを見たような気がします……」

なんていうか家に入りたく無い。

あんなものを見たせいかわつめたな嫌な予感がある……。

ぐぎゅる(´▽`)

けつたいな音が鳴ったと思ったら歌澄ちゃんがお腹に手を当てて僕に訴えて来る。

「…奏さん、お腹好きました……」

ぬあ、可愛い……まあ僕もお腹空いてるし……。でもなあー、アレの側は通りたくないな……。

「よし、じゃあ裏……」

裏から行こうとしたら歌澄が玄関に右手をかけていた。左手には僕の腕が。

「あ」

「……………行きます……………」

ガチャ

玄関を開けるとそこには

「お嬢様……………」

「奏君……………」

全裸で縛られ、天井から吊された編集長と要義兄さん。大事な部分には木彫りの象のお面。見苦しい事この上無い。というかゼツ……………タイに関わりたくない。

「た、タスケテ……………」

そんな僕の気も知らず、助けを求める編集長と要義兄さん。歌澄ちゃんは顔を真っ赤にしてオロオロしてる。

「歌澄ちゃん、」

「…は、はい？ な、なんでしょう？ どうしましょう……………」

その顔には後悔が浮かんでる。開けるんじゃないかと、と。

「いい？ 僕達は何も見てない、見ていないんだ。分かるかい？」

「……………はい」

歌澄ちゃんは少しばかり逡巡してから頷いた。

「おい！ 俺達のことバツチリ見てただろっ！ なあおい！」

「奏君！ 歌澄ちゃん！ 助けてよっ！」

「…奏さん、やっぱり助けた方が……………」

歌澄は可哀相なものを見る目で二人を見上げてる。  
いやあー歌澄ちゃんは優しいな。

「歌澄ちゃん、無理だよ。あんな高い所から吊されちゃ……………」

「あ……………」

「ね、だから見なかった事にしよう」

実際どうにもならないしね、あははは。

「……………仕方無いですね……………残念ですけど……………」

歌澄ちゃんは本当に残念そうに俯く。

「お嬢様っ?!」

「歌澄ちゃん?!」

悲鳴を上げる二人。

僕はできる限りの笑顔を二人に向ける。

「と、言う訳で助ける事は無理な訳で、原因も大方姉さんと水波音ちゃんだろうし、下手に助けて人生棒に振りたくないんで」

「それが本音かあああああああつ!!」

僕は歌澄ちゃんと一緒ににこやかに奥の方に去る。

歌澄ちゃんはチラチラと二人を残念そうに見ながら呟いた。

「…ごめなさい、叶井さん、要ちゃん。私は無力です……」

「…いませんね」

「いないね……」

いつも吞めや歌えやの大騒ぎしている筈の食堂に誰もいない。凄  
い静かだ。

なんか……

「…ちょっと不気味ですね……」

「やっぱりそう思う?」

「…はい、こんな静けさは……嫌い……です」

「……歌澄ちゃん?」

歌澄ちゃんが泣きそうな顔で僕の服の裾をギュッと掴む。まるで迷子の子供みたいだ。

「歌澄ちゃんどうしたの？」

「……………や…にい…ん…お…やん……………」

歌澄ちゃんは裾を掴む手に力を込めて身体をカタカタと震わせる。歌澄ちゃんのその様子が僕をどうしようもなく不安にさせる。

「歌澄ちゃん、だいじょ……………」

「ひっく、二人してなあゝにいゝしてんのかなあゝゝ？」

僕はびっくりして声のした方を見ると若魚さんがいた。

「…若魚……………さん？」

歌澄ちゃんも驚いてる。さっき迄の震えもすっかり止まっている。その事に安堵しながら何か様子のおかしい若魚さんに僕は首をひねる。

「若魚さん、なんかおかし……………クサッ！」

「…うっ、すごく臭い……………」

酒臭い。少し距離があるのに酒の臭いが漂って来る。若魚さんどんだけ呑んでるんだよ……………。

「なんだと……ひつく……」

なんだ？ 何やら若魚さんから不穏な空気が……。

「おい、お嬢、奏、ちょっとこっちにこいやぁ……」

いつもの若魚さんからは考えられない程ドスの効いた声。僕も歌澄ちゃんを肩を震わせる。  
怖い……。

「…あつ、そういえば若魚さんって」

歌澄ちゃんが何か思い出したらしい。まあ言わなくてもなんとなく分かるよ……。

「何してんの、ひつく、こっちこいつつってんだろ！」

「は、はいいー！」

若魚さんの罵声に慌てて近寄る。するとガツチリと肩に手を回されてしまった。

「ん？ ひつく、こんな時間まで二人で何してたのかなぁ、返答によつては……」

ミシミシと僕の肩に置いた手に力が……。  
い、痛い……。

「ん？ どうした？ まさか人に言えない事でもしてたんじゃないかな……」

「いだだだだだっ!!」

痛い! すんごい痛い! 肩がっ、肩がもげる!

「…わ、若魚さん! 剣道部に用事があったてその後に画材屋に行つてましたっ!」

歌澄ちゃんの必死の説明に僕の肩に掛かってた力が抜けた。た、助かった、ありがとう、歌澄ちゃん。

「なんだよ、早くそれを、ひっく、言えってんだよお!」

陽気なおじさんの様にガハハと笑う若魚さん。

イメージぶち壊しだよ……お酒って、怖いな……。

「歌澄ちゃん、」

若魚さんに聞こえないように歌澄ちゃんに話し掛ける。

「…はい」

歌澄ちゃんもそれに合わせて小声になる。

「さっきの話の続きなんだけどさ、若魚さんってやっぱり、というか見たまんま……」

「…酒乱……です」

心なしかそう言った歌澄ちゃんは遠い目をしている気がする。

しかし、どうして僕の周りの大人の女性は酒乱やアル中ばかりなんだ?

「なっ?」

「…によ?」

不意に訪れた浮遊感。

何事かと思っただら僕と歌澄ちゃんは若魚さんの両脇に抱えられている。

「さっ、行くぞぉ」

完膚無きまでに酔っ払い親父と化してしまっている若魚さんは満面の笑み。

「あの若魚さん、一体何処へ?」

「決まってるだろ、察しろ馬鹿野郎!」

眉を吊り上げ怒鳴る若魚さん。

ええ〜っ、なんで怒られてんの僕?

「…若魚さん、何処へ行くんですか?」

「講堂行って酒盛り」

「……………」

いやさ、僕と歌澄ちゃんとの態度が違うのは別にいいよ? いや、良くないけどさ。まあ、それはいいんだけどさ、ここまであからさまにしないで良くない? ねえ、若魚さん。

まあ、言っただらきつとこのまま絞め殺されそうだから言わないけどわ。

そんな僕の思いも知らずに 当たり前だけども 若魚さんは歌澄ちゃんに嬉しそうに話し掛ける。

「……でき、要と秀秋の野郎がそりゃもう生意気でね。玄関に吊して来ちゃった」

、じゃないって！ 犯人はあんたかい！

歌澄ちゃんも口をあんぐり開けて驚いてるよ……。

講堂の入口まで来らしく若魚さんが立ち止まる。

講堂に人がいる気配はするけど何やら静まっているようだ。

そして、若魚さんが扉を蹴り開けると

百合が、青と黒の見事な百合が咲いてました。

「~~~~~つふあつ……」

青 何故かセーラー服姿 が黒 彼方さん から離れる  
と彼方さんは色っぽい表情で崩れ落ち、セーラー服な青は周りに  
いたスーツ姿の野次馬達に向かって両手を上げた。

まるで、自分を讃えろとばかりに。

すると、わああああああと野次馬が盛り上がり、呑めや歌えやの  
大騒ぎになる。

「酒えええええっ！」

「うわっ」

「…きやつ」

若魚さんが僕らを落として酒の方へと駆けて行ってしまった。  
若魚さん……。

まあ、この際若魚さんの事はほっとこう。問題は……

「…彼方ちゃん！」

歌澄ちゃんが慌てて彼方さんの元に駆ける。  
そう問題は……

「なんであんたがここに居るっ！！！」

「なんでかって？ 私だから」

さつき迄、両手を上げていた青い女性が振り向いて妖艶な笑みを  
浮かべている。

「『私だから』じゃねえ！！ 鏡<sup>ウツクシ</sup>さん、あんた彼方さんに何してん  
のっ！ あの<sup>ウツクシ</sup>人絶対あれがファーストキスだよ！？」

「うわああああああんっ！！ 初めては好きな人って決めてたの  
にいいいいいいいいっ！！！」

「…あっ！ 彼方ちゃん！！！」

大泣きして講堂を飛び出す彼方さん。追いかけてようとした歌澄ち  
ゃんは

「…わ、若魚さんに水波音さんっ？！」

「ニヤツハア〜、歌澄ちゃあ〜ん」

「酒盛りすんぞ〜」

「…え、ちよっ、二人と、ひゃああああ〜……」

……酔っ払い共に拉致られてるし。

「……え、えーと……ほ、ほら見る！ 彼方さん泣いちゃっただろ！」

「いやあーね、あーいう子見るとついつい食べたくなっちゃってね。」

変わって無い、あれから三年も経ってるっていうのに全然変わって無いぞこの人……。

「ついつい、じゃない！ 大体鏡さん、その格好はなんですか？ セーラー服？ もう三十六にもなるんだからもっと自重し……はっ！」

鏡さんから殺気が……。まずった〜っ、僕、殺されちゃうかも……全国の読者の皆さんごめんなさい、僕こと時雨和雪は夢半ばで倒れそうです……。

「クツクツクツ……良い度胸じゃないか……そんなこと言う奴はなあ……」

僕にとっては最凶に兇悪な、周りのスーツ男達にとっては最高に妖艶な笑顔でそう宣ってくださいだった鏡さん。

ああ、僕の余命が刻一刻と……。

鏡さんはセーラー服に手を掛けて勢い良くはぎ取った。

バンッ

同時に講堂の灯が突然消える。

な、なんだ？

すると講堂のステージの中央がスポットライトで照らされる。

そこにいたのはきつと多くの人が見たことのあるだろっ後ろ姿。

金髪のツインテール。

背中の中の天使のような羽。

セーラー服のような衣装。

も、もじゃ……。

「女性に年を聞きちゃう奴は」

彼女の指が僕を差し、

「××に代わってお仕置よ!!」

イタタタタタ！ 鏡さん、イタイ、イタ過ぎるよ！

まさかとは思ったけど、月に代わってお仕置してくれるセーラー服で美少女な戦士のコスプレかよ……しかもエターナル仕様だし……。

男達は口笛を吹いたりして囃立ててる。

お前ら、鏡さんは三十六歳だぞ……。

「んっふふ」

「うわいっ?!」

セーラー服な美少女の戦士姿の鏡さんが目の前に。

僕の身体が逃げると叫びをあげている。

ヤバイぞ、これ。殺気はもう無いけどよからぬ笑いを浮かべてやがる……。

「ふっふっふっ、逃げた上に舐めた口を聞いた報いを受けるがいい

「!」

鏡さんが僕に飛び掛かった。

「や、やめ……っ、鏡さん、ちょっと、ひゃあああああああああ  
ああ……」

「ま、また……」  
「相変わらず奏ちゃんはカワイイねえ」

周りにいた男達の会話が僕の耳に届いてきた。

「うおっ、めっちゃ可愛いな」  
「ああ、スゲエ可愛いな」  
「なんだって男に生まれたんだろうな」  
「勿体無いよなあ」

……『男』の僕が全否定されてる気がする。そりゃ今はフリフリのヒラヒラのドレス姿だけだよ。

「いつその事性転換してみたら？ 奏」  
「しません！」

まったく阿呆な事言わないでもらいたいよ！  
それにしても、このスーツ姿の人達は誰だろ？

「鏡さん、今更ですけどこのスーツ姿の皆さんは？」  
「さあ？」

知らないのかよ。まったくもう、この人一体何しに来たんだよ…  
…。

「うひゃあっ!?!」

いきなり誰かが後ろから抱き付いてきて、僕の偽子手を揉み始めた。

「フフフフフ、彼等は私の下僕よ」

「ね、姉さんっ!?!」

「ん？ この弾力に揉み心地……。本物そっくりね」

どんなに身をくねらせようと姉さんから離れられない。

「ちよっ、姉さん！ 揉まないでよ!! 後、そこ！ ざわつかな  
いでー!!」

姉さんの下僕 ようは姉さんの会社の社員 の皆さんには僕の  
声は届かず、僕の痴態を肴に盛り上がってる。いつの間にか鏡さ  
んいなくなってるし……。

ううつ、勘弁してよ……。

疲れドツが襲ってくる。もはや抵抗する気力も無い。  
不意に姉さんが僕から離れた。

「飽きた。奏、喘がないとつまらないわよ」

「喘ぐ訳ないでしょ。私は男だし、胸は偽物なんだから」

「ノリで喘ぎなさいよ、変態」

「なっ！」

へ、変態?!

姉さんは口に手を当て、ぷっ、と嘲笑する。  
僕の中で怒りが煮え滾ってくる。

「あら、反論？ 出来る訳が無いわよね」

「なんですって……」

いつもなら怖い姉さんの冷笑が怒りのせいか全然怖くない。  
姉さんが続ける。

「ヒラヒラフリフリの乙女チックなドレスを着て、」

げふっ。

「カツラをかぶって、偽物のチチをつけて、」

ぐふっ。

「拳句の果てには女の子に完全になりきる、」

がはっ。

「そのの、」

ううっ……。

「何処が、」

ああ……。

「変態じゃないって？」

もうさっき迄の怒りも何処へやら、心が折れて、膝をつく。

反論、出来ない……。うう、う……。そういう仕様になっちゃってるんだから仕方無いじゃないか！ 女の子になりきっちゃうのは条件反射なんだから仕方無いじゃないかっ！

「クスクス……私に逆らうからそういう事になるのよ」

「す、すみません……」

「……俺も社長にあんな事されてえ」

「ああ、そっだよなあ……」

「日由社長、素敵過ぎ……」

うつとりしてる姉さんの社員達。

そこ、羨望のまなざしでこっちを見るな……。

姉さんは楽しそうに、それはもうほんと愉快そうに僕を見下ろしてる。

も、もう僕耐えられ……。

「日由ちゃん、それ位にしておきなよ」

「楓さん……」

お、おお……きゅ、救世主だ……。助かった、ああ……ほんとに助かった！

楓義兄さんは天使のような笑顔で僕に手を差し出す。

「ほら、奏。大丈夫？」

「う、うん。ありがとう、義兄さん」

本当にありがとう、楓義兄さん！ あなたが僕の兄になってくれてよかったよ！

楓義兄さんはうんと頷いてからあからさまに不満そうなほっぺを膨らませてなんともイタ……可愛らしい 姉さんを窺める。

「日由ちゃん、そんなにむくれない、むくれない」

「何？ 楓さんは奏に味方する気？」

この上無くイライラしてる姉さんを楓義兄さんが宥める。

「そんな訳無いよ。今にきつと面白いものが見れるから」

「む~~~~」

「まあ僕に任せてよ。歌澄ちゃん！ 奏はここにいるよ~~~~っ！」

はい？ 歌澄ちゃん？ へ？ 一体何が……

「わひゃいつ?!」

突然何かが僕に突っ込んできて押し倒される。

な、何だ？ 何が……歌澄ちゃん?!

僕の顔の前にトロンと幸せそうな表情の歌澄ちゃんの顔。

そして、僕と目があつた途端にゴ○ディオクラッシャー級の破壊力を持った笑顔。

う、うわぁ…………。

その笑顔は反則だつて…………。

「奏しゃぁ〜ん」

歌澄ちゃんは笑顔で僕の名前を呼んだ。

呂律が回つて無い上に酒臭い。

あー酔つてるよ、これ。そういえば水波音ちゃんと若魚さんに拉致られてたっけ…………。

「かゝにやゝでしゃん」

「な、何？」

そう聞いた瞬間、歌澄ちゃんの顔が一気に近付き

僕と歌澄ちゃんの唇が

まるで吸い寄せられるように

…………な、何…………が…………。

何も、分からない。

僕の耳には歌澄ちゃんの息遣いだけが聞こえてくる。視界には歌澄ちゃんだけが映つてる。

唇が温かい。

頭がポーンとしてくる。

なんか…………気持ちいい…………っ?!

「~~~~つ?!」

突然、口の中に何かが入ってくる。  
僕の頭をぐちゃぐちゃにしてやるとばかりに舌に何か絡んでくる。

嫌なのに嫌じゃない、思ったように動けない。  
もう、何も分からない……。

「ぶはふう」

「ふわあつ……はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

歌澄の顔が離れ、僕の視界が開けていく。  
それでも僕が見てるのは歌澄ちゃんだけ。  
ああ、どうしよう、何も考えられないや……。

「奏ひゃん」

「どうひりゃの?」

あーなんか僕も呂律が回らなくなってきた……。

「えへへ」

僕の上でゴロゴロする歌澄ちゃん。

あ〜も〜可愛いなあ歌澄ちゃん。

……………抱きしめちゃえ

「うにゃ?」

僕はギュッと歌澄ちゃんを抱いた。  
柔らかくて、いい匂いで……気持ち良い〜。

「えへへ〜」

歌澄ちゃんは嬉しそうに笑う。

なんか幸せ〜……。

歌澄ちゃんがいきなり目を閉じて唇を少し突き出す。

僕はそれに吸い寄せられるように顔を近付け、そして

ゴッ

鈍い音と共に後頭部に強烈な衝撃。

僕はあっという間に意識を手放した。

「……う……あいた〜」

……なんで頭痛いんだ？ ってか、何で僕は気絶してたんだ？

取りあえず起き上がろうとするとなんだか身体が重い。

一体なんで……

「って、歌澄ちゃんっ?!」

………一体何が？ なんで歌澄ちゃんが僕に抱き付いて寝てるのっ?!

そついえば気絶する前に何してたっけ……うーん……ん？ なん  
だ？ なんか思いたそうとするとピンクのモヤモヤが……ピンク？！

「……い」

ピンクって……なんだ？

「……おい」

ほんとになんだ？ 僕は歌澄ちゃんに一体何を？！

「おい！ 奏！ 聞いてんのかよ！」

「は、はいっ！」

びっ、びっくりしたあ……。

「か、彼方さん。なんですか？」

「死ねえっ！！」

「うわいっ?!」

彼方さんの放った拳は壁をぶち抜いてる。

「いきなり何すんですか!？」

「何すんのかって？ お嬢様の唇を奪った報いだ。俺の『イルアン・  
グライベル』の鎧となれ……」

彼方さんが装備した手甲『イルアン・グライベル（鉄の手袋）』  
からバチバチと雷を纏いだす。

ちよつと洒落になりませんってえ！

「食らえ！ 雷神拳！！！」

彼方さんの拳が再び僕に放たれる。

歌澄ちゃんが落ちない様にしながら緊急回避！

その拳は電撃を迸らせながら壁を穿つ。つてえ！ 実況中継してる場合無いつての！

「ちよっ、彼方さん！ 歌澄ちゃんが抱き付いてるのにそんなことしたら歌澄ちゃんもそれに巻き込まれちゃいますって！！！」

彼方さんは獰猛な笑みを浮かべる。

「心配は要らねえよおっ！ ちゃあ〜んとお前だけ狙って殺る（やる）からなあっ！！！」

あ、『やる』はやるでも殺す方の『やる』なんだ……。

まあ、何はともあれ今は

「逃げろっ！」

「あっ！ 待ちやがれ！」

彼方さんから僕は逃げ出す。

ドンッ、と何かにぶつかった。

「うわっ、と！」

何かと思って見上げると頬をほんのり朱に染めている楓義兄さんだった。

「うわっ……奏……はいいや」

疑問に思う間もなく僕は楓義兄さんに無視された。  
なんか、悲しい……、っと。そんなことより彼方さんから逃げないで。

「しめたっ！……っ?!」

急に彼方さんの声が止まった。

何かと思って振り向くと彼方さんの前に楓義兄さんが立ち塞がっていた。

「なんだよっ！ 邪魔すんじゃねえよ！」

「彼方ちゃん、丁度良い所に！」

「は？ って、酒クセエツ！」

彼方さんは酔っ払いに関わっている暇は無いと楓義兄さん avoidance ようとしたらまたも進路を妨げられた。

「おい、邪魔すんなよ」

「さあ、彼方くん。共に家庭の食卓を預かる身として朝まで語り明かそうじゃないかっ！」

「はあ？」

楓義兄さんっ?! おかしい、おかしいぞ？

楓義兄さんの手には空のワインボトル。

彼方さんが警戒して一歩下がろうとすると楓義兄さんにガツチリと肩を掴まれた。

「あれ？ 彼方ちゃんは僕の話は聞けないってのかなあ？」

彼方さんの顔が引きつった。

「ん？　どうなのかなあ？」

楓義兄さんが、怖い。

彼方さんが目でどうにかしてくれ、と訴えてきてる気がする。

彼方さん、僕は無力ですよ、と首を振ると泣きそうな顔になり、そしてガツクリとうなだれる。

「付き合いますうう……」

「それじゃっ、まずは蛇の料理法について語り合おうじゃないかっ  
！！」

「へ、へビイツ？！」

「その通りっ！　やっぱり家族には美味しくて色んな物を食べて欲しいからねっ！　さあさあ、オールナイトで語り明かそうっ！」

「なんっじゃそりゃあー！！！！」

楓義兄さんが壊れた……。彼方さん、頑張って！！

彼方さんに滅茶苦茶絡む楓義兄さんを後に安全な場所を探してみる。

しっかし、広いよな。

ん、なんだ？　さっき僕と歌澄ちゃんの名前が聞こえてきた気がしたんだけど……。

辺りを見回すと人が一カ所に固まっていた。何かと思って近付いてみると僕と歌澄ちゃんの名前が聞こえてきた。

「奏の顔だいぶいつちやってるわね」

「にははは、奏君の唇、歌澄ちゃんにとりゃれちゃった」

なんですと？

聞こえてきた声は姉さんと水波音ちゃんのもの。二人が何か言う度に周りの人が失笑や爆笑を漏らす。

なんか今日は帰って来てから嫌な予感ばかりだ……。

歌澄をくつつけたまま、なんとかその人ゴミに紛れ込んでみると姉さん達が見ていたのは一台のビデオカメラ。

そこに映っていたのはディーブなキスをしてる僕と歌澄ちゃん。

僕の思考がホワイトアウト。



姉さんはあるつ事が写真をみんなに見せびらかせて……

「だらつしゃあっ！！！！！」

姉さんの手から写真を奪い取り、ビリビリ、ビリビリと破る！

破る！！ 破る！！！！

「よし、こ、今度こそ……」

「ぷっ」

姉さんはそんな僕を見て可哀相なものでも見る様な目付きで鼻で笑う。

「何がおかしいんだよ！！！」

「水波音」

「ういっ〜」

グデングデンの水波音ちゃんが持つて来たのは大量のDVD・Rと大量のちよつと大きいサイズの写真。

「ま、まさか……それ……」

「あんだと歌澄ちゃんの痴態を完全収録した映像のコピーと焼き増しして引き伸ばした写真ね」

僕がそれらを奪い取ろうと近付くと姉さんに釘を刺された。

「元の映像もネガも別の所に大切に保管してあるから無駄。だから、どうぞ？ そのDVDと写真は存分に持って行っていいわよ」

姉さんの『無駄』という言葉が僕の頭にズシンと来た。  
気付くと僕は、

「日由姉さんの人でなしいいいつ!?!」

そう叫んで講堂から出て行っていた。

空を見上げると夜という黒いキャンパスを上弦の月が明るく照らし、星達が星座という名画を描き出していた……なんて、クサイ事を考えた訳で無く、僕は屋敷の外れにあるベランダで少し湿った風に吹かれながらうなだれていた。

歌澄ちゃんは相変わらず寝たままで僕にしっかりとひつついて離れない。

よくまあ落ちないよな、と感心してしまうくらいだ。

「……………ん……………ふう……………」

歌澄ちゃんが小さな声を立てて少しみじろぐ。

歌澄ちゃんは気持ち良さそうな表情で眠り続けている。

「うわっ……………私、歌澄ちゃんとキスしちゃったのかあ……………」

今なら思い出せる。酔っ払った歌澄ちゃんが僕に突っ込んで来て

押し倒し、それで僕の唇を奪ったんだ。それもディープリキスで……。歌澄ちゃんが今起きたら僕は恥ずかしさで死んじゃうな……。どうか目を覚ましません様に！

僕は取りあえず起こさないよう歌澄ちゃんをひっぺがして膝枕をしてやる。このまま起きるまでしがみつかれてもお互い困るしね。空を見上げると月も星も雲に隠れている。

もうそろそろ梅雨か……。ジメジメしてインクが乾きにくいから嫌いなんだよ……。後で若魚さんに頼んで除湿機でも置いて貰おう。

「あ、そういえばまだ女装したまんま……」

早く着替えないと、と思ってると思うと頭の上から声がした。

「奏、こんな所にその子と二人つきりで何してるのかな？」

見上げると鏡さんがそこにいた。

「鏡さんこそ、こんな所で何してるんですか？」

「月でも見ながら日本酒を飲むのって情緒があって素敵だね」

六月に月見酒ですか……。

「阿呆師匠、」

「何だい、馬鹿弟子君」

「何しに来たんですか？」

「何って、仕事に決まってるでしょ？」

「仕事なら私のとこに来る必要は無いでしょ」

そう、例え殺しだろうが護衛だろうが鏡さんがここに来る必要性

は微塵も感じられない。

歌澄ちゃん誘拐が依頼ならとくにやっってる筈だし、歌澄ちゃんの護衛だとしたら若魚さん達が前もって言うてくれるだろう。って事は、

「気まぐれでここに来たんですか？」

この後に聞いた鏡さんの言葉は予想だにしなかった。まさに青天の霹靂というものだった。

「だから仕事だと言ってんでしょ？ 今日から私があんたの保護者の代理」

「……………はい？」

鏡さんが。僕の。保護者代理？

「いやいやいやいやいやいやいやいやいや、そんな馬鹿な話が……………」

「私が依頼の事で嘔吐くと思う？ じゃなきゃ、ここにこないわよ……………」

僕の平穩(?)な生活が脆くも崩れ去ったような気がした。依頼したのはきつと…………

「父さんと母さん……………」

「その通り。まったく面倒な依頼してくれたもんだよ」

「あ、あははは……………」

あの二人は僕に対してちょっと過保護気味な所があるからなあ…………。

「ま、そういう訳だ。ちなみに期間は今日から高校卒業まで。日本に拠点を移したから別の仕事 came たら奏、お前にも手伝わっても……」  
「イヤ」

周りの空気の体感温度が一気に下がる。

ヤバイ、めっちゃ怖い。いや、それでもここで粘らないと大変なことになる！

「どうして私が手伝わないといけないんです？ もうトラウマは増やしたくないんで……」

「ふっ、くく、良い度胸してるな……奏、あんたが私の手伝いをするのにも依頼内容の一つなんだがなあ？」

なんですと？ と、父さんも母さんもなんて事をおおおおつ！！  
不意に鏡さんの声が優しいものになる。

「まあなんだ、三年振りだな。会えて嬉しいよ、奏。元気そうで何よりだ」

ふう、まったくこの人は……。

「私も嬉しいですよ、鏡さん。嬉しいですけど、学校に来る事はないじゃないですか」

「あー、アレは私の親友に会いに行ったついでにお前を驚かせようと思って」

「さいですか……」

あの学校にも鏡さんの友人がいるのか……。世間って狭いな。

「ところで、お前はその歌澄ちゃんが好きなのかな？ 一緒にいる所を見ると随分と楽しそうにしてるし、面食いのお前好みの顔立ちだし」

う、鋭いな……。でも……

「好き……ですよ。ですけど、告白とかする気は無いです。そんな資格は私には微塵も無いから……」

「そうか……」

それつきり、沈黙が落ちてしまった。

なんか、気まずい。

僕は堪らず歌澄ちゃんをお姫様抱っこをして立ち上がる。

「それじゃあ、私は歌澄ちゃんを部屋に返してもう寝るから……鏡さん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ、奏」

鏡さんの優しい声に送られて、僕は歌澄ちゃんの部屋に向かう。

どんなに迷惑かけられても、トラウマの原因になっても僕にとっては親も同然。

みんなには割と鏡さんの傍若無人さを強調しちゃったりしてるけど、やっぱり鏡さんは僕の家族で大切な人。正直な話、鏡さんには今の仕事はやめて欲しい。

たとえ鏡さんが世界で唯一至高の存在だとしても終わりは来るんだから……。

それにしても、明日は早く起きないと大変なことになってる気が

するんだよねあ……。一日酔い祭りになっていませんよじー！

16・僕と彼女のキスと宴へ青と酒乱とアル中と主夫。未成年の飲酒はダメ絶対

はいつ！ いかがでしたでしょうか？ 評価・批評・感想をよろしく願います！

さて、なんとこの作品、読者数が5000人を超えそうなんです！  
それを記念して何か特別な話を書きたいな思っているんですが  
なかなか思い浮かばず……。

ですので、こんなことをして欲しいとか、こんなのが良いのでは  
？ という様なアイデアを募集したいと思っています！  
感想や評価、あるいはメッセージをお願いします。

こんなストコドッコイな作品ですが、今まで読んでくれた方々  
には頭が上がりません。

これからも皆さんが楽しめる様な作品になるよう頑張りますので  
どうかよろしく願います！！

17・僕と彼女の新任教師へ新キャラ登場！……ではありませんん《前書き》

雨永祭（以下祭）：どうもです。やっと更新しました……。遅くな  
ってしまつてどうもすみません。

「どうも和心です。コイツの遅筆っぷりには反吐が出ますね。死ね  
ばいいのに」

祭：一言余計だゲロ女。ところで少し（？）前に名前を変更して雨あめ  
永ながから雨永祭あめながまつりとなりました。

「ネーミングセンスはゼロね」

祭：うるさいっ！ それではそろそろ「17・僕と彼女の新任教師  
《新キャラ登場！……》ではありませんん《始まりますっ！》ぎゃああ  
あああああっ、セリフ取られたあっ！！

17・僕と彼女の新任教師へ新キャラ登場！……ではありません

「いってきまーす」

「……………いってきます」

今日も今日とて僕は歌澄ちゃんと一緒に家を出る。

……………なんか、気まずい。

歌澄ちゃんを見ると顔が熱くなるのが分かる。多分僕の顔は赤くなってる。

普段なら歌澄ちゃんにバレないようにするけど、今日はそんな心配をする必要は無かった。なぜなら、

「……………うう……………頭痛い……………」

歌澄ちゃんは二日酔いで頭を押さえて呻く。かなり具合は悪そうだった。

「大丈夫？」

「……………大丈夫じゃないです」

言いながらフラフラと蛇行している。

昨日の今日だもんな。

朝起きて講堂に行くと要義兄さんが途方に暮れていた。要義兄さんの後ろから講堂を覗くとそこには兵どもが夢のあとでした。

もう臭いこと臭いこと。

他にも、真っ白に燃え尽きた彼方さんが自殺を敢行したりとか酔っ払いの世話とか……………。

朝から忙しかったなあ。

あ、そうそう、要義兄さんと編集長は自力で脱出したみたい。すごいね。

僕が気恥ずかしさと心配とに悶々としていると軽快な足音が聞こえて

「っはよっつー！ 今日も二人はお熱いですなあっつ」

バンツー！

「~~~~~っ?！」

歌澄ちゃんはその場に頭を抱えてうずくまって悶える。

……アレはキツイ。

いつものハイテンションと共にやって来た陽子ちゃんは大きな声で挨拶しながら軽く僕ら二人の頭を叩いた。

二日酔いの歌澄ちゃんにその所行は拷問以外の何ものでもなかった訳でして。

陽子ちゃんはそんな歌澄ちゃんを見てから困惑の表情で僕を見た。

「歌澄どつたの？」

「昨日帰ったら姉さんが社員集めて宴会やってさ、酒に吞まれた若魚さんと水波音ちゃんの毒牙にかかってね」

陽子ちゃんはあー、と納得して歌澄ちゃんの肩をポンと叩いた。

「たはは、二日酔いとは露知らず。すまんすまん」

「……ううん、だ、大丈夫、だよ」

そう言って歌澄ちゃんは起き上がって陽子ちゃんにおはよつと挨拶して、またフラフラと歩き出した。

危なっかしいなあ……。

歌澄ちゃんに気を遣いながら三人で歩いていると陽気な声が僕を呼び止めた。

「やあやあやあ！ 久し振り。今日も元気かねムツツリ奏君！」

「皆っ、久し振りっ 皆のアイドル千央だよっ」

誰がムツツリだ、とか、どこに向かって手を振ってるんだなんていうツッコミをした方がいい気がするけど、ここはまず

「お前ら、取りあえず静かにして」

「む、何故だ？ 我々は久々の登場なんだぞ！」

「そうだよっ！ 奏は主人公だから僕ら端役の気持ちなんて分かんないでしょっ！」

ギャーギャー喚く二人。

「知るかつ！ 大体お前ら昨日も会っただろ！ 訳の分かんない事言うな！ アレを見る！」

僕の差す方向には頭を抱えてうずくまり、プルプルと震える歌澄ちゃん。

「……何、あれ？」

「昨日、酔っ払い共の魔の手にかかった結果だよ……」

二人はなるほど、と納得した後、妙に怖い顔で僕を見た。  
な、なんだ？

「ところで奏」

「どうして岸和田さんといえるのかな？」

「へ？」

こいつらは一体何を……。あ、そういえば前に陽子ちゃんに関わるなみたいなさ……うおっ？！

なんかドロドロしたオーラが……

「あ、長谷川さんに守戸さん。こんな所で奇遇ですね」

笑ってるのに笑ってない。ノリも背筋の凍り付く様な笑いで言った。

「これはこれは文学部の牝犬じゃないか。まったく持って奇遇だね。あのクソアマの差し金かい？」

「私は歌澄と一緒に登校してるだけだよ。後、部長がクソアマって言うのは大いに賛同するけど牝犬って言うのは酷くないかな？」

「そうだな、お前は牝犬じゃないな失礼したよ。そうだな……お前は……下衆女だな。やってる事はセコイしな」

「言ってくれるじゃない。無能女」

「私は万能だよ。下衆野郎」

「私は女よ」

「おや、そうだったのか？」

「当たり前じゃない」

「それは失礼」

「いいえ、気にして無いから。ウッフッフッフ」  
「そうか、ならいいんだ。フッフッフッフッフ」

……こ、怖い。なんでこんな険悪な雰囲気なんだ？ しかもいつの間にか千央はいないし……。  
ん？

遠くから何かけたたましい音が聞こえてくる。  
他の人も気付いたのか皆音のする方向に視線を向けた。  
……………じ、自転車？

向かって来たのは彼方さん以上に凶暴そうな顔をして自転車を漕ぐ女性と半べそでその女性にしがみつくと柄な男。

自転車の速さは亀有公園前にいる不良警官や一億五千六百萬八十万四千円の借金執事に匹敵するようにも見える。

というかこのままじゃ僕ら自転車の轢かれるじゃん。

「歌澄ちゃんっ！」

急いで二日酔いに苦しむ歌澄ちゃんを立たせて一緒に脇に避けると男が叫ぶ。

「都活ちゃんっ、前っ前ええええっ！！」

「え？ あっ！」

ギヤギヤギヤーンとブレーキを掛けて陽子ちゃんのすぐ側に華麗に止まる。

「都活先輩、貴人先輩一体どうしたんですか？ 危なすぎですよ」

「じ、じめん岸和田さん……」

「きゆう……」

誰だろ？ 見た事あるような気がするんだけどなあ……。そんなことを考えてると、

「岸和田さん、早く乗って！」

「どうしたんです？」

「いいからっ！」

陽子ちゃんはひよいと片手で持ち上げられて連れて行かれてしまった。

……もう見えなくちゃった。ん？ あのトコ先輩って呼ばれた人片手で陽子ちゃん持ち上げた？

「歌澄ちゃん、あの人達知ってる？」

「……あああああ……部の先輩……だと思いまふ」

「やっぱり今日は休んだ方が良かったんじゃない……」

歌澄ちゃんは弱々しく手を振る。

「……休めないんです。だって、今日は大学の教授と前に言ったメイドロボットのAIのプログラムを組まないといけないんです……吐きそうっ」

「……その教授って何歳？」

「……62歳」

うわあ、なんだかなあ……。

僕は歌澄ちゃんの背中をさすりながら、ノリに聞いてみた。

「ノリ、さっきの自転車の人達の事知ってる？」

「もちろんだ」

ノリは何だか忌々しそうにあの二人の情報を教えてくれた。

「まず、女の方。名前は翹裂都活<sup>はねさきとく</sup>。通称『柳泉の般若姫』身長176センチ、体重54キロ。特徴はあのかなり長い髪とその前髪から覗く般若のごとき三白眼。そして、人外の身体能力。『柳泉の般若姫』の名はこの辺りの不良共にとって天災と同義らしい」

天災って……あの人は地震とか台風とかと同じ括りなんだ……。ノリは続ける。

「そして、男の方は浅葱貴人<sup>あさぎたかと</sup>。その容姿と人当たりの良い性格から二年のアイドルないしマスコット。身長は156センチ、体重は46キロ。変人奇人超人揃いの文学部で唯一の凡人だ」

天災と凡人のコンビかあ……すごい組み合わせだなあ。つてか、陽子ちゃんも変人奇人超人扱いなんだ……。

歌澄ちゃんを支えながら歩き出そうとした僕をノリが止めた。

「どうしたのさ?」

「奏。もし、文学部の連中 特に部長の峯河幡明凜栖<sup>みねかわはたありす</sup>が訪ねて来たら逃げろ」

ノリはそう言って理由を聞く暇も無く行ってしまった。

それにしてもなんなんだろ、ノリも千央も妙に文学部を毛嫌いしてるような……。

「う、うう……えっぐ、ひっぐ」

……これは何の嫌がらせ？

「奏え、聞いてくれよっ」

教室に入るなり謙治が泣きながら僕にすがりついて来た。

……鬱陶しいなあ。

「どうしたのさ？」

「和心があっ、和心があっっっ！」

涙で顔がグシャグシャになってる謙治。

うーん、何かキモい。こんな変態ロリコンがモテるんだから世の中分らないよなあ。

「それで和心ちゃんがどうしたの？ あと、反吐が出るくらい鬱陶

しいから早く離れろ」

「朝起きたらな、」

スルーしやがった。

「和心がいつもの様に居合いの練習してたんだよ」

## 回想開始

ふふ〜ん 今日イー天気だ！

俺はご機嫌に庭を覗く。

はあ〜和心は今日も可愛いなあ〜

和心は胴着に袴という素敵な姿で人型の濡れ藁に円形に囲まれながら居合いの構えを……あれ？ 濡れ藁が何かおかし……俺の等身大の写真？

そして

「ハアアアッ！」

和心の非の打ち所の無い居合い。

ポトポトポト。

見事に俺の写真の首だけが地面に散らばる。

……………え？

和心は叫びながら首の無い俺の写真達に切りかかった。

「死ねえええええっ！」

袈裟斬りで真っ二つ。

「キシヨイツー！」

縦に一刀両断。

「クソロリコン男っー！」

上半身と下半身がさようなら。

「半径十五キロ以内に近付くなっ!!」

滅多斬りで粉微塵。

「迷惑でしか無いんじゃないっ!!」

逆袈裟斬りでも真っ二つ。

「死につ、さらっ、せえええええっ!!」

刀が濡れ藁を貫いた。

……えーと。

目の前で起きた事が信じられなかった。信じたくなかった。

「ふう〜、スッキリした〜」

和心はスッキリした顔で俺の写真の残骸を蹴散らしながら去って行った。

回想終了

「　　と言う訳なんだよ……」

うーん、なんていうかかける言葉が無い。

「取りあえずあれだ。ドンマイ」

「そんなこと言うなよお〜っ!!」

「うわあ……ますます残念な感じに……。誰か変わってくれないかなあ？」

「周りに目を向けると誰もが見て見ぬふり。」

「……はあ。仕方無いなあ。」

「分かったよ。僕の方から和心ちゃんにそれとなく聞いておくよ」

「本当かつ！ うおーんっ、心の友よおーっ！」

「止める馬鹿」

「劇場版のジ○イアンみたいなセリフを言いながら抱き付こうとした謙治をひっくり返して席にようやく着いた。」

「あ、そうだ」

「謙治は起き上がり僕の前の席に座る。」

「知ってるか？」

「何を？」

「副担任のキーちゃんいんだろ？　なんか実家の畳屋継ぐとかでやめたんだと」

「キーちゃん先生が？　あの人の授業好きだったんだけどなあ。」

「そっかあ、残念だな。にしても随分突然だよな」

「謙治はそうなんだよ、と腕を組む。やっぱり謙治もおかしいと思っただらしい。」

「急過ぎだよな。しかも後任もう決まってるみたいなんだよ。なんかイタリア……だっけかな、そこから来たんだと」

ふーん、イタリアかあ……あれ？ イタリア？ そついえば鏡さんもそつちの方から来たんだよね……。

「つ？！」

「？ どうした、奏」

「い、いや。なんでもないよ」

悪寒が走った。

……いや、気のせいさ。うん、気のせいにきまつてる。そつだよ、そんな訳無いよね。

「お前達、早く席に着きなさい」

自分に言い聞かせてると呉羽先生がいつもの様に入って来た。

特に僕には関係ない連絡。いつもならそこまで終わるけど今日はやっぱり違った。

「さて、もう聞ってる奴もいると思うけど、副担任の嵯峨衣先生さかきぬが家庭の事情で学校を止めた。それで新しい副担を紹介しよう」

なんだか変に緊張してきた。

「では、入って来てくれ」

……なんだろう。今物凄くあの戸が開くのを阻止しないとイケない様な……いや、気のせいさ。うん。あの人がこんなところに来る訳ないじゃん！

ガララッ

僕の思考がフリーーーーズ。  
目に飛び込んだのは鮮やかで艶やかな青。青。青。  
遠くで男子の歓声と女子の驚く声が聞こえる。

「森川鏡もりかわあきじです。今日から君達の副担任になりました。よろしく」

皆は口々に質問を鏡さんに浴びせていく。

だんだんと思考出来るようになって来るところで鏡さんは僕を見てニヤリと笑った。

鏡さん……一体、一体何を

「あなたは一体ここで何してんですかあっ！！！」

クラス中の視線が僕に集まる。でも、それどころじゃない。

「何って、仕事だけど？」

「そうじゃないっ！」

「じゃあ、何よ」

「なんであなたが僕の副担なんですかつ！ 嫌がらせ？ 嫌がらせですかっ！ あんた最低だっ！」

「失礼ね。私の愛を奏は分かってくれないのね。酷いっ！」

こ、この女ア……。

「帰れっ！ 今すぐイタリアに帰れ！」

「あら、そんなこと言っていていいのかな？」

「うるさいっ！ 僕の平穏を破壊する悪魔め！」

この人がいたら一体何をされるか……。すると鏡さんのスーツの胸の辺りから猫が……。

「ッ！！？」

ねっ、猫っ！

鏡さんは壮絶な笑みを浮かべた。

「悪魔呼ばわりとは随分ね……報いを受けなさい。いけ！ タイガ一号！」

「ニャアアアアアアアツ！！」

「イヤアアアアアアアアツ！！」

ねっ、猫がつ、猫があああああつ！！

尻餅をついて目を瞑る。

……………あれ？ 何も来ない？

ゆっくりと目を開けると呉羽先生が猫と鏡さんの襟首を掴んでいた。

「まったく、まだ朝のホームルーム中なんだからあまり騒がないでよ鏡」

「えーっ」

呉羽先生はつまらなそうな鏡さんを一睨みで黙らせて僕を見た。

「座留もよ。気をつけなさい」

「す、すいません」

呉羽先生は連絡は以上、と言って鏡さんを連れて出ていった。

……鏡さんの学校の友人って呉羽先生だったんだ。

ちょっと驚いていると不穏な空気を感じた。振り向くと太郎を始めとした男子諸君。

「……ど、どうしたのかな？」

やっぱり答えるのはクラスの男子代表(?)である太郎。

「どうしたもこうしたもねえ……。姉は学園史上最強最悪超絶美女。友人関係は歌澄ちゃんに長谷川に白羽妹。どれもこれも驚く程の美人揃い。それだけで男子の殺意の的だつてえのに……」

そ、そうだったんだ……。でも、それって不可抗力だよなあ。どうしようも出来ないよなと思つてると太郎が叫んだ。

「あの副担任までお前の知り合いとはどういう了見でいつ……!!」

あれっ？ 語尾が江戸っ子？ ……どうでもいつか。それよりも、

「えーと……」

あー、どうしょ。なんて言えばいいかな……うーん……よし。

「ほ、ほら、僕がここに来る前に世話になつた人なんだよ！」

これなら問題無いはず！ 嘘つて訳でもないし、太郎達の神経を逆撫でする結果には……。

「だからなんじゃあああいつ……!!」

ええ~~~~~っ？

なんだか理不尽な太郎の怒り。一体僕にどうしろと？

「そういう訳だから……者共っ、かかれーっ!!」

というわけで僕はまた太郎を始めとした男子達に追いかける事になった。

ちくしょう、鏡さんのせいだ。

17・僕と彼女の新任教師へ新キャラ登場！……ではありません（後書き）

「和心です。いかがでしたか？ 私としては出番があったので大満足です」

祭：でもこの娘、あの後転んでテーブルに思いっきり腹を打ってゲおっぷはりばあっ！！？

「ふう……ふう……。あれ？ どうしたのかな、この人。……決して腹部に刀が刺さってるなんて事はないですよ？ ええ、もちろん！」

祭：う………嘘っ……げふっ……

「本当はテストは嫌だなあ〜って話で盛り上がる予定でしたが作者が倒れた上に時間が来てしまいました という訳で評価批評感想等を待ってます！ それではまた次回！」

18・僕と彼女のレクリエーションへ始まりはメイド服と共に……（前書き）

祭：…どうも、雨永祭です。

「…どうも、白羽和心です」

祭：いやあ〜アーノルドさんはとてもじゃないけど六十代には見え  
ないね！

「…なんです。藪から棒に」

祭：さつきー3を見てさ。いやあー派手だったなあ〜。でも2の方  
が良かったなあ〜。

「…すっごくいづうでもいいです」

祭：…………すんません。では、どつぞ。

18・僕と彼女のレクリエーションへ始まりはメイド服と共に……

えー、只今の授業はLHR。僕はどうしたらいいんだろうね？

あの後、太郎達の攻撃はやっぱり委員長の鉄鎚で鎮圧された。それで僕の平穩が戻った……訳も無く、鏡さんがことあることにちよっかいを出して来た。そして、極め付けはこれ。

僕の手の中にある中世ヨーロッパ、主人に奉仕する女中の為に作られた可憐で機能的な白黒のエプロンドレス。そう、それは完膚無きまでメイド服だった。

……嫌がらせか？

メイド服とにらめっこしていると鏡さんは楽しそうに話を始めた。

「さて、全員渡った袋の中身を確認したと思う。それらを何に使うのかというと日曜に一年生のレクリエーションがある。その名も

「

チヨークが黒板を滑るように動く。

そこには『大サバイバル大会』と書かれていた。

……はい？

皆キョトンとしてるのがそんなに楽しいのか鏡さんは楽しそうに続ける。

「大サバイバル大会！ 概要はクラス対抗のサバイバルゲームで先に他クラスのリーダーのポイントをゼロにした方の勝ちだ。リーダーは皆メイドの格好をしている」

……はい？ メイドがリーダー？ という事はもしかしてもしかしなくて……。

「という訳で、奏は死ぬ気で頑張りなさい」

う、うそ〜ん……。

「さて、今度は一つ一つ説明していこう。

クラス対抗って言ったけど、実際は普通科と言語科に商業科、工業科、情報プログラミング科がそれぞれ半数ずつの計十チームだ。

次は大会のルールだな。

まず勝敗条件は敵クラスのリーダーのポイントをゼロにするか、配られた服に付いているバッチをクラスの過半数の数を集める事。今度は当たり判定についてだけど、胸、脇腹、膝の三か所。この三つ全てに食らってしまったらその時点でアウト。二つまでなら自軍の補給地点で回復出来る。大会時の服装は今配付した物を着る事。服の改造は禁止だから注意するように。」

服装に関してはアレだけどちょっと面白そう……。

「武器に関しては味方の商業科の生徒が資材を仕入れて工業科の生徒が要望に合わせて造り、改造するという形になってる。もちろん危険な改造は禁止だ。

大会の舞台は一年校舎、一年工業棟、校庭、第二体育館。  
と、まあこんなところだ。何か質問は？」

手を上げた。

……あれ？ 僕だけ？

「はい、奏」

ま、いいか。

「あき……先生、メイド服に意味あるんですか？」

「というかメイドをリーダーにする意味がまったたく無い気がするんだけど……。」

「無いよ」

「な、無いのかぁーっ！」

「予想はしてたけどやっぱりガツクリくるな……。それにしても誰の趣味だよ、これ。」

「僕がガツクリと座ると鏡さんはサイズの確認するからと男子を追い出した。」

「女子の着替えが終わったと言う事で教室に戻ると女子全員が赤いTシャツの上にポケットなんかの収納部分がたくさん付いたジャケット、下は短パンでゴツイベルトには小さなポーチが幾つも付いていた。」

「うーん、素足が眩しいなあ……。」

「はい、次男子だから女子は早く出て行って」

『はあ……い』

「鏡さんの指示で皆が動く。」

「意外と先生してるなあ。」

「女子が出て行くの見届けてると鏡さんにガツチリと掴まれた。」

「あ、鏡さん？」

「お前はそっち」

「え、ええ?!」

何故か僕も追い出された。

なんで……ん？

頭の上にメイド服がパサリ。そのすぐ後にカツラが落ちて来る。  
あれ、これヤバイかも……。

「あとはよろしく」

ガシツ。

委員長が僕の肩をがっしりと掴む。

「ごめんなさい、これがクラスの女子の総意なの」

総意なのって委員長、満面の笑みで言われても……はっ！  
気付いたら完全に女子に囲まれている。  
どうしよう？

僕の目の前に一人の女子が立った。  
それはクラス一大人しい

「うふふふ、座留君、すっごい可愛くしてあげる」

「あ、秋元さん？」

あれ？

おかしい。今僕の目の前に立ってる女の子はクラス一物静かな文  
学少女の秋元遙<sup>あきもとほるか</sup>さんだ。なのにこのテンションは何？

「さあ、お着替えの時間よ」

……何か今、座留の悲鳴が聞こえたような？

「なあ、太郎」

「ん？」

佐々木慶太が話し掛けて来た。なんだか楽しそうだ。

「随分楽しそうだな、慶太」

「あつたりまえだろ、大規模なサバイバルゲームだぞ？　これで燃えなきゃ男がすたるぜ！」

やっぱり燃えてるねえ〜。

「お前そうだろ？」

まあ、やぶさかではねえけどな。でもやっぱり

「そうだけど、やっぱり女子の衣装が萌えるぜっ！！　お前もそうだろ？！」

「おつともよっ！」

二人ばかり笑いをする。やっぱり持つべき者は友人だなっ！  
笑っていると戸の向こうから森川センセの声がした。

「男子達、もう入っても大丈夫か？」

「いいっすよ〜」

森川センセを筆頭に女子がどんどん入って来る。

うーん、絶景かな絶景かな　　やっぱり生足は素敵だな〜。

「眼福だな、慶太」

「ああ、至福の時だな、太郎」

最後に出て来た秋元は途中で立ち止まり振り返った。

「ほら、早く出てこないと」

？　誰かいるのか？　……あ、まさか。

慶太と顔を見合わせる。慶太も気付いたらしい。同時にニヤリと笑った。

積年の恨み晴らしてくれるわっ！！

秋元がもう、と唸って教室を出る。

そして、出て来たのは

ぎゃあ~~~~っ！ や~~~~め~~~~て~~~~！  
予想外に力の強い秋元さんに引っ張られる。  
なんでこの人こんな力強いさつ？！  
気付くと僕はクラス全員の視線を浴びていた。

「あ……………」

頭が真っ白になりかけたところで気が付いた。

最初は呆気を取られてるだけだと思った。でも違う。もしかして……み、見とれてる？

「ちよっ、ちよっと勘弁してよ……………」

最初に動いたのは太郎だった。

「あ、あんた誰？ あれ？ 座留が出て来ると思ったんだけど……………」  
「わ、私は奏だよ？」

太郎は動かない。そして、

「ぐふっ」

太郎が倒れた。

な、なんで？

太郎が倒れた事に動揺していると太郎の側に佐々木が駆け寄った。

「どうしたっ?!」

「お、俺……………一体……………どうし……………ゲフッ」

「太郎、どうした？ どうした太郎うつ！ 太郎おおおおつ！」

僕そつちのけで盛り上がる太郎と佐々木。

何、この茶番……。

呆れ返つてると鏡さんに引つ張られる。

「さて奏。せつかく着替えたんだし皆に自己紹介しなさい」

「え？ 嫌だよ」

なんで今更自己紹介なんて……。なんて思つてると鏡さんが耳元でささやいた。

「そんなに猫と遊びたい？」

「すみませんでした」

ああ、弱いな僕……。でも、ダメなものはダメなのです。

さて、自己紹介かあ……。うう……。

僕は皆の前に立ち、エプロンドレスの裾を摘んで一礼。

「今回、大サバイバル大会のリーダーとなりました座留奏と申します。皆さん、よろしくお願い致します」

口からついて出て来たのは良いとこのお嬢様を思わせる丁寧な言葉。  
皆ポカンと僕を見てる。

ああもう、最悪だ。鏡さんがつくづく恨めしい！

「……可愛い」

誰かが、呟いた。

それを皮切りに男子の自己嫌悪の叫びと女子の楽しそうな笑い。

……ああ、どうしよう。

「ヤケクソになったら？」

「……心読むとか止めて下さい」

鏡さんは誰よりも楽しそうに偉そうに座ってた。

「大体、ヤケクソって……」

「まあ、ヤケクソってのは微妙だったな。あれだよ、こういってイベントはバカやったもん勝ちなんだからさ」

はにかんだように笑う鏡さんがなんだか眩しかった。

確かに……そうかもしれない。たまには、いいかな。

そう思うとこの女装も悪くは無いと思えるから不思議だ。

試しに自己嫌悪に身悶える佐々木の肩をポンと叩く。

「ん？」

「慶太さん、どうしたんですか？」

振り向いた佐々木に心配そうな顔を送ると、

「あれは男だ。あれは男だ。あれは男だ。あれは男だ。あれは男だ。

あれは……」

ブツブツと呪詛のように同じ言葉を繰り返してる。

……。

もう一人、同じように話し掛けると佐々木と似たような反応が返ってきた。

……ヤバイ。すっごい楽しい！  
楽しくなってきたところで鏡さんが大きく手を叩いた。

「早く座って。あ、奏は前にいなさい」

「あ、はい」

全員座ったのを確認して鏡さんは笑いながら言った。

「衣装合わせはすんだね。私から一言送ろう」

鏡さんはトマトを取り出す。そして、

「負けたらお前らの命は無いと思え」

言いながらトマトがグシャアッ！ と無残に握り潰された。  
それは負けたらこうなるという鏡さんからのメッセージ。なんで  
トマトかは知らないけど。  
それにしても、

『……………』

皆顔真っ青じゃないですか。

「鏡さん、鏡さん」

「ん？」

「理由も無しに脅しは無いですよ。皆怯えていますよ？」

「ふう〜、皆肝っ玉が小さいねえ」

鏡さんは呆れた声でそんなこと言ったけど普通はちびりそうになるくらいに怖いと思う。平気なのは多分、ノリとか千央とかくらい

だろうな。

「ま、いいか。理由はね　私がこのクラスの優勝に十万賭けてるからさ！」

さらりとトンデモない事を言った鏡さんに僕は反応出来なかった。

「それから優勝したチームには、海外旅行に匹敵する商品がある！」

その言葉にクラスの心は一つになった。なんてつたつて『海外旅行に匹敵する商品』。そんなものをチラつかされたらやる気を出さない訳がない。

もちろん、僕だって同じだ。

『おつ  
』

スパーンツ！！

戸が、勢い良く開いた。

多分皆、『おつしゃあああああああああつ！　勝つぞおおおおつ！』みたいな事を叫ぼうとしたんだろう。隣のクラスから同じような叫び声が聞こえる。

でも僕らは大きく口を開けた中途半端な状態で固まっている。視線は戸に釘付け。

そこにはセミロングの色素の薄い髪を持った美女が仁王立ちしていた。そして

「君達、我々文学部プレゼンツ『大サバイバル大会』は楽しみかい？　私は部長の峯河幡明凜みねがわはたありすだ。座留奏くんはいるかな？」

18 僕と彼女のレクリエーションへ始まりはメイド服と共に……（後書き）

祭：最近、自分の人生が何処を向かってるか分からない。

「……さつきから何妙な事はつかいいだすんですか」

祭：この小説がどこに向かっているのか分からない……。

「ちよつとーっ！ しっかりしろ作者ああっ！」

祭：いや、しっかりしないといけないってのは分かっているんだよ。

でも……ねえ？

「ねえ？ って言われても困るんだけど……」

祭：まあ何にせよこれからも頑張ります！

「評価・批評・感想など待ってます！」

19・僕と彼女のレクリエーションへ序章の終わりは勇者の王のマイソロジー

祭：ハイハイハイ！ 面白いぜっ！ 電○コイル！

「……何このハイテンション。あ、どうも。毎度お馴染みになりました和心です」

祭：いやあー侮り難しNHK！ 流石は日本○き籠もり協会だね！

「ちつがああああうー！！ 牙○ゼロ式！」

祭：ブホラアッ！！

「日本放送協会でしょっ！ 未代まで謝り続ける！」

祭：な、何……そのひょうげ……ぐふっ

「失礼しました。では、本編始まります」

19・僕と彼女のレクリエーションへ序章の終わりは勇者の王のマイソロジー

なんとというか文学部部长・峯河幡明凜栖先輩はなんてタイミングで訪れてくれるんだと思う。よりにもよって女装してる時に来なくても……。

峯河幡先輩はキョロキョロと教室を見回す。

「おや、座留奏くんは何処かな？」

当然、クラス中の視線が僕に集まる。

ううっ、居づらい……。

「ん？ 君は？」

皆の視線が僕に突き刺さっているのに気付いて峯河幡先輩が僕に話し掛けてきた。

そういえばノリがこの人に会ったら逃げろって言ってたけど……ムリ、だよな。

「あの、私が座留奏……何ですけど」

僕の言葉に峯河幡先輩は目を見開く。

そりゃ驚くよな、とというか驚かない方がおかしいしね。というかもしかして僕今ドン引きされてるんじゃない……。

「座留奏くんは男だと思ったけど……」

マジマジと舐め回す様に僕を見る峯河幡先輩。

あれ？ なんかこの人近寄って来てない？

そう、なんだかジワジワジワと距離が詰まってる気がする。そして、僕が心持ち後ろに下がるよな体勢になった瞬間

「　　っ?!」

峯河幡先輩に飛び掛かれてモミモミと胸をまさぐられた。

「なっ、何やってっ」

「ふーむ、これは……なんと！　どんなプロでも本物と間違えてしまう偽乳業界の風雲児っ！　『デラックスウルトラリアリティーウォーターボインちゃん』！　余りの人気に製造が追いつかず、今ではどこを探しても見つからないというのに……」

ツッコミ所が盛り沢山な峯河幡先輩の話を聞きながら離れようともがくけど全然、まったく、これっぽっちも先輩から逃れられない。おかしい、なんだこれ。

ひとしきり超レア(?)らしい偽乳を揉んだところで僕はようやく開放された。(ちなみに文句を言おうとした時、耳を甘噛みされたのだけれど、それが思いの外気持ち良くて、癖になりそうなのは僕と君との秘密だよ！)

満足げな先輩はうんうんと頷いて僕の肩に手を乗せた。

「座留奏くん。君はなかなか面白い。長い付き合いになりそうな予感がするよ」

そう言っつて峯河幡先輩は離れようとしたのか、肩から手を退け一歩下がった。

「っ!?!」

下がったところでどうしたんだろ、一瞬驚いたような……？ それに、傲岸不遜、唯我独尊、そんな感じの峯河幡先輩の雰囲気揺らめいた気がした。

それから峯河幡先輩はよく分からない動揺をしたままそれじゃまた会おう、と教室から出て行った。

……なんなんだろ？

……どうも、歌澄です。私視点はちよっぴり久し振りですね。ちょっと緊張する。

今の時間はLHR。

黒板には『大サバイバル大会』って書かれてる。面白そうとは思うけど題に捻りが無いなあって思う。そんなことを思っていると友人の有寺夏夏子あじていかほこ、愛称・なっちゃんなっちゃんが話し掛けてきた。

「ねえねえ、歌澄。腕が鳴るわね！」

そう言って腕をブンブン鳴らして回すなっちゃん。

「…そうだね。私も楽しみ」

「流石っ、話分かるね！ ところでさっ、あたしはそういう武器とかは全然詳しくないからあれなんだけどさ、歌澄はどんな武器作ってみた？」

武器……武器かあ……えーと、えーと……武器はロマン、ロマンはロボット、ロボットはつまり

「…そう！ ビューンって飛んでく鉄人！」

「……へ？」

私のセリフにキョトンとするなっちゃん。

あれ、私、変な事言ったかな？ うーん……あ、もしかして

「…無敵のドでかい守護神の方が分かりやすかった？」

「歌澄、”武器”についての話なんだけど……」

………あ。

「…ごめん。武器ならやっぱりドリルかハンマーだよ」

「………なんで？」

なっちゃんはなんだか呆れたように私を見る。

むく、私そんなにおかしい事言ったかな？

「サバイバルゲームだよ？ 普通は銃とかじゃないの？」

「……それはそうかもしれない」

でもなあ、そこはやっぱり譲れない。だってロマンだもの。

なっちゃんとそんな風に武器談義に花を咲かせてると先生が私を呼んだ。

「日永！」

「…なんですか、先生？」

先生は何故か申し訳なさそうな表情。その後と言われた言葉に私は愕然とした。

「すまないが、お前は他の工業科の生徒達と一緒に活動出来ないんだ」

……………え？

「……………な、なんですか？」

そ、そんな…………。私だって皆と一緒にやりたいのに…………。そんな私の思いを察してくれてるのか先生は本当にすまなそう。

「悪いな。でも、主催側からの要請でな」

「……………主催、側？」

その時、たーんっ！ というけたたましい音と共に教室の戸が開く。

「文学部副部長の生瀉いがたはるき流生だ。日永歌澄はいるか？」

そこにいたのは美形の部類に入るのにどこことなく関わりたくない雰囲気を持った男の人だった。

「…私です」

「そうか、では安部教諭、日永歌澄は借りて行きます」

え？ じゃあこの人が主催者？

私は困惑するなっちゃんとすまなそうな先生に見送られて、生瀉

先輩に引きずられるように教室から出て行った。

……文学部部室？

ズルズルと生瀉先輩に引つ張られた私は気がつくとも文学部部室の前にいた。

「部長！ 不肖この生瀉流生、貴方の為に日永歌澄を連れて来ました！」

「うむ、ご苦労流生」

生瀉先輩の妙に大袈裟なセリフに答えたのは威厳のある綺麗なアルト。

でも、なんだろ？ その声には威厳の他に根拠の無い自信とかが含まれてる。

生瀉先輩が戸を開けるとそこは

「……すごい」

本当にすごい。壁には額縁に入ったカ○ボーイビ○ップの原画とえーとよく分からないけど向日葵の絵が、真正面には豪華な机と椅子。私から見て左側の壁際にあるハンガーラックには多種多様な衣装。メイドとかサモ○イ○の姫様とかス○ロボの○ナとかがかかっている。他にも冷蔵庫やソファなんかも置いている。

とてもじゃないけど一部活動の部室とは思えない。

ちよつとS○O○団っぽい部屋を見回した後もう一度正面を見た。

正面の豪華な机と椅子にはセミロングの色素の薄い髪の毛の女の人が女王然と優雅に座ってた。

「やあやあ、君が日永歌澄だね。私は文学部部長の峯河幡明凜栖だ。以後よろしく」

「…どうも」

ありす先輩は私をシゲシゲと見つめてフフツと笑う。

「ふむ、聞いていた通りあまり感情を表に出さないみたいだね。そして、華奢で可愛いときた。桜満開のギャルゲーに出て来る私と同じ名前のキャラを彷彿させるね」

「……変な人だなあ。」

「…あの、頼みたい事ってなんですか？」

この人のせいで私はサバイバル大会に出れないんだ……。ちょっと腹立つ。

そんなことを思った矢先予想外のありす先輩の言葉に私は驚いた。

「ロボットを、作らないかい？」

ロボット！

「い、いいんですかっ？」

「ああ、これを」

ありす先輩から一枚の紙が渡される。

そこには三つの事が書かれてる。

「そこに書かれた事を前提としてやってもらいたい」

……フフ、フフフフフ！ ヤバイ、ちょっと興奮してきた！

「フフフフフフ！ 任せて下さい！ 期待以上の、最高のモノを作りますからっ！」

「ありがとう。材料や人員は君の言う通りのモノを用意させるから遠慮なく言ってくれていい。では期待してるよ」

私はありす先輩が言い切る前に文学部部室から飛び出す。

フフフフフ、どうしようかな？ 茶○丸みたいのがいいかな？

それともジ○ング？ いやいや、ボル○オツグの方がいいかも……。

どんな素敵なロボットを作ろうかと心躍らせながら私は校庭の隅にある作業小屋へと駆けて行った。

19・僕と彼女のレクリエーションへ序章の終わりは勇者の王のマイソロジー

祭：いかがでしたか？　今回は新キャラの有寺夏夏子あしでりかなこさんに起こしていただきました

『どうも、有寺夏夏子といます！　しかし、かなこの漢字はどうにかならないんですかね？』

祭：どうにもならないよ。

『死ね作者』

祭：笑顔でそんなこと言うなよ怖いよ！

『さて、自己紹介しちゃうよ』

祭：無視っ！？

『名前はもういいよね。身長は163、体重は秘密。スリーサイズも秘密だけど胸は結構あるんだ。好きなものは可愛い”こ”とビーフシチュー。嫌いなものはムサイ男とケバ女。以後よろしくね！』

祭：はい、真性のレブハアツ！

『それじゃ、次回もお楽しみに』

和心「あれ？　後がきの私の出番ってこれだけ？」

閑話・女男とノツポ女の過保護な奮闘記へ青の親心と剣道少女の叫び

scene 1・女男は告白して両刀使いと呼ばれる

どうも、皆のアイドル守戸千央です。僕の視点でやるのは初めて  
でうまく出来るか分かんないけどよろしく

と、まあ冗談はともかくとして。今、僕の気分は最高に悪い。  
隣りを見ると愛しのノリも機嫌が悪い。

「ところで奏」

「どうして岸和田さんといえるのかな？」

「へ？」

僕とノリの不機嫌な声と言葉に奏は訳が分からないといった感じ  
に驚く。

まったく、あれ程関わらないように言ったのに！

僕はノリと目で合図してこっそりとその場から抜けだし、すぐそ  
ばの路地裏へ向かう。

そこには案の定奴がいた。

「やっぱりいたな。みなとたける 奏尊」

文学部書記湊尊。成績は優秀、運動神経は良し、顔はまずまず、  
体型は至って普通。但し、何故かパシリ口調。そして、湊流舞闘術  
の継承者。

「やっぱりバレてたっすか」

湊尊は別に堪えた様子も無くヘラッと笑いながら僕を見る。  
気に食わないね。

「そんな顔しないで下さい。可愛い顔が台無しですよ？」

……ほんつとに気に食わないね。何この歯の浮くようなセリフ。

「あんたさ、天然ジゴロって言われない？」

「な、何で分かるんすか!？」

驚く湊尊。

「たち悪いなあ、コイツ。一体何人の女を泣かせてるのやら。」

「そんなのはどうでもいいよ。前から言ってるだろ、奏には近付く  
なって」

「相変わらず過保護すね。奏くんは君らのモノじゃないっすよ？」

……ほんつとにコイツは何処までもムカつく奴だな。

「知ったような口を聞くなよ。お前に何が分かる」

「なら、君には奏くんの何が分かるんすか？ 趣味や性格、境遇な  
んて上辺だけでしか無いっす」

ああ言えばこう言うな。

「そんなの分かる訳ないでしょ？ 奏の思ってる事なんて精々十の  
内の一か二しか分からないね。」

いいかい、湊尊。僕はね、奏に嫌われようがウザく思われようが  
奏が好きなのさ。しかもlikeじゃない、loveだ。もちろん  
ノリの次に、だけどね。

そういう事だから、もう奏に手を出すなよ」

……む、なんでそんなに微妙そうな顔になってるんだよ。どこまでもムカつく奴だな。

湊尊は苦笑いしながら僕にそれはもうかんに触る事を言ってくれた。

「……守戸って、バイだったすか？」

言うに事欠いてバイとな……。

手近な石を三つ拾って湊尊目掛けて全力投球。確実に当たる様に一つは右肩の付根辺り、一つはみぞおちに、一つは腰の左側に投げた。

「ウワツと！」

それと同時に湊尊との距離を詰める。

僕はそのまみぞおちと右肩付根の石を叩き落とす湊尊の脳天目掛けて鞆を叩き付けた。

「ぶっ！！」

間抜けな声を上げて崩れ落ちた湊尊。

ふっ、ザマアみる。僕をバイ呼ばわりするからだ。

loveにも色々とあるの知らないのか馬鹿者め！

僕は倒れ伏した湊尊を放置して、怒りに鼻息も荒くその場を去っていった。

scene 2 . ノッポ女は妨害して勝負パンツに出会う

まったく、文学部の連中はどこまで目障りなんだろうな。

……おっと失礼。千央の愛しのハニー・長谷川矩子だ。

さて、私は今どこにいるのかと言うと、ずばり校内だ。校内をうるついている訳ではもちろん無く、我等がB組いる。ただいまの授業はLHR。その内容は『大サバイバル大会』と呼ばれる柳泉学園の高等部一年生によるレクリエーションの説明を受けている。

このレクリエーション、内容も賞品も悪くわない。ただ忌々しい事に文学部主催なのだ。まったく、あの女くたばってくれないだろうか……。そうそう、何故かは分からないがこのレクリエーション、下の学年の連中には教えてはいけない事になっている。配付された袋にしっかりとそう記述されていた。

まあ、誰一人それに気付いてる様子は無いが。

しかし、森川さんは本当に良い仕事をしてくれた。奏の女装スキルの高さには何時見ても感動させられるよ。よし、後で遙に入れ知恵しておこう。

フッフッフツ、これで『私達』の『奏フォトグラフィコレクション』がより一層充実する事だろう。

そんなことを考えているとポケットの携帯端末 携帯電話ではなく、電話機能が付いた高性能の小型PCだ が二回振動した。  
……動いた。

念の為、携帯端末を確認すると画面には『般若と凡人が動いた』とだけ書かれていた。

さて、行くところかな。

こつそりと廊下に出る。

まだ、いないか。まあ、般若と凡人の事だから恐らく

廊下の窓から上を見上げると般若姫こと翹裂都活が浅葱貴人を背負いながら今まさにこちらに降りようとしていた。

下から見上げたのがいけなかった。

……し、白のTバックとは……都活嬢は、な、なかなか大胆、なのだな……。……わ、私もあれ位大胆にいった方が千央は喜ぶだろうか……。し、しかし……。やはりあそこ迄えっちい下着は抵抗が……ムムムツ……。ち、千央に聞いてみるか？ いや、ダメだ恥ずかし過ぎるな。

「あの一？」

ぐむむむ……。いけない、白Tバックが頭から離れない。都活嬢はなんて下着を学校に穿いて来るのだ……。

「長谷川さん？」

「え？」

呼ばれて振り向くと不思議そうな顔の都活嬢と浅葱貴人が私を見ていた。

や、やってしまった……。私とした事が何たる失態！ めあああ

ああっ！ 自分が許せん！ はっ！ こんな時こそ平常心だ。

目を瞑り深呼吸。自分を無にする。

よし。

目を開くと二人がいない。

見るとまさに教室に入ると戸に手をかけようとしている所。

っ！ させるかっ！



なかなか素敵な笑顔で素晴らしいアドバイス。  
ここは素直に礼を言うべきか。

「都沽嬢、ありがとう。そういう訳だから」

軽く腕を振ると袖からピアノ線が飛び出し、まるで生きているか  
の様に都沽嬢に巻き付く。

簡単に言えばボンレスハム寸前の状態だ。

「都沽ちゃん!？」

浅葱貴人は慌てて近付こうとして止めた。  
フフツ、賢明だね。

「は、長谷川さん、これはどういう……」  
「どうもこうも無いだろう、都沽嬢。散々話たと思ったんだけど……」  
「私達はね、君達に奏と接触して欲しく無いんだよ」

浅葱貴人は忌々しそうに私を見る。それから口を開いた。

「前から思ってたけど君達は どうして僕ら文学部を座留くんから遠ざけようとするんだい？ いくら幼馴染みと言っても異常だよ」

「……はあ。何を言うかと思えばそんなことが。」

浅葱貴人に言おうとして気付く。翅裂都沽は手に鉄製の小手を着けていた。

ちっ、なんて物を！

もう一度腕を振り、都沽嬢の両手を縛る。

「っ!？」

「都沾ちゃん！」

「二人共動くんじゃない。動けば戯○シリーズのジ○ザグよろしく君達二人をバラバラにする」

完全に動けなくなった都沾嬢と浅葱貴人。ひとまずこれで良いだろう。

それにしてもあのクソ女、一般人に『イルアン・グライベル』なんて物騒極まりない物を渡すなんてどういう神経してるんだ？

……ひとまず気を取り直そう。

「さて、浅葱貴人。君の問いに答えようか。

はつきり言って君達文学部は奏の精神衛生上よろしくないんだよ。特にあのクソ女部長」

なんだか心底納得した様子で頷く二人。

……思ってた以上に人望は無いようだな。

「それから、私達がしている事は異常かもしれない、傍からみたら過保護かもしれない。でも、そんなのは関係無い。私達は奏が好きなんだよ。likeじゃなくてloveだけだね」

びつくりするくらい微妙な顔の二人。

……失礼な奴等だな。

ま、いいか。

「とにかく、そういう訳だから奏には手を出さないで貰おうか」

「冗談。座留奏は何としても我が文学部に入って貰うよ」

答えたのは都沾嬢でも浅葱貴人でも無かった。  
後ろを振り向く。

「峯河幡……明凜栖……」

どこまでも忌々しい最低の『魔女』が勝ち誇った笑みを浮かべてそこにいた。

「貴人、都沾。足止めご苦労様」

峯河幡明凜栖が指を鳴らすと解けない筈のピアノ線が解けて床に落ちた。

……足止め？ くそっ！ やられた！！

その場で立ち尽くす私の脇をすり抜けながら峯河幡明凜栖は言った。

「彼は面白い。ますます部員にしくなっただ」

そう言い残し、都沾嬢と浅葱貴人を連れ立って去っていった。

一体アイツらはどこまで私達をイライラさせれば気が済む。ほんつとにムカつく。後で奏に当たってやる。

私は苦虫を潰した様な顔でこっそりと教室へと戻っていった。

scene 3 . 女男とノッポ女は青に過保護っぷりを披露する

今は放課後、カウンセリングルームなる所に私、長谷川、守戸の三人はいる。

おっと、自己紹介が遅れた。森川鏡だ。鏡と書いてアキラと読む。よろしく。

用があるからこの二人を呼んだんだが……。

「……………」

何でこんなに不機嫌？

「不機嫌そうな顔して、何があったの？」

忌々しそうな顔で答えたのは長谷川だ。

「奴に、奴に奏との接触を許してしまった……つく、私は何て失敗をってしまったんだ……………」

「奴って誰さ？」

その問いに答えたのは守戸。こっちは憤っているのか知らないけどブルブルと身体を震わせてる。

「『魔女』だよ。森川さん」

……………はあ？

「何で『魔女』がこんなと……………」

いや、学校が学校だけに可能性は無きにしも非ずか？ 確かに『魔女』は『八魔神』最年少だったしな。

「で、学校の何処のどいつが『魔女』？」

やっぱり気になるものな。あの小憎たらしい小娘の正体っていうのは。

……ん？ そういえば今日授業中に奏に会いに来た変な生徒がいたな。もしかしてアイツか？ 何つつたけな……えーと……み、みね、みね……。

「文学部部長の峯河幡明凜栖ですよ」

「あー、そうだ。峯河幡明凜栖か。確かにアレが魔女だとなんか納得出来る」

それにしても、随分と悔しそうだな。ってか私そつちのけで反省会をしてるんじゃない。

取りあえず手を叩いて反省会を中断させてこつちを向かせる。

「取りあえず今は魔女の事はどうでもいい。聞きたいのは奏の事だ。私の元を去ってからの三年間、家やその他の事はアイツの家族から電話やら何やらで聞いているけど学校の事は分からない。だから、奏の幼馴染みで、奏や私達と似たような位置にいて、私と面識のあるお前達に聞こうと思って呼んだんだ。」

という訳で話してくれ」

長谷川と守戸は顔を見合わせると頷き合い、どこからともなく、パソコン、スクリーン、プロジェクターを持ち出し準備。

そして、部屋を暗くしスクリーンに映ったのは創角ポップ体で書かれた『奏フォトグラフィコレクション』の文字。

「……これは何？」

「フッフッフ、これは私達が隠し撮りしてきた奏の成長記録だ」

「ちゃんと日付とコメントが付いてるから安心して見てね」

……安心出来ないなあ。ってか弟子よ、盗撮に気付けや。そうこうしていく内にスライドショーは始まった。

一枚目は何の表情も浮かんでいない奏。コメントは『ついに奏が戻って来た』。

二枚目は家族と幼馴染み達に囲まれて無表情の奏。コメントは『皆で撮った写真。奏喜んでるかな?』。

三枚目は水を掛けられて無表情で怒っている奏。コメントは『奏が怒った。次は笑ってくれるかな?』。

四枚目、五枚目とスライドショーは順調に進んでいく。十八枚目。泣きそうな笑顔の奏。コメントは『嬉しい』。

その後の写真から奏の表情に変化が出てきた。笑ったり、怒ったり、泣いたり……最初こそぎこちなさがあったもののスライドショーが進む程ぎこちなさが無くなっていく。

……昨日も思ったけど、本当に表情豊かになったな。

それからしばらくして、スライドショーは奏とその幼馴染み達の写真で幕を閉じた。

部屋の灯が戻ると二人はどうだとはばかりの表情だった。

「ああ、すごいよ。すごいけどな、お前らバカだろ?」

「なっ!」

「言つに事欠いてバカだと?」

憤慨する長谷川と守戸。

当たり前だろうよ。

「三時間ものスライドショーを見せる奴をバカと言って当然だろうが!」

「バカじゃないよ!」

「そう、これは私達の奏への溢れる愛の結晶さ!」

愛、ねえ……。

「なんてーかさ、お前ら息子を溺愛する両親って感じだな」

それはもう気持ち悪いくらいに。

そんな私の思いを知らずに当然だとばかりに踏ん返り返る二人。

「もちろん、溺愛してるとも」

「僕は奏を超愛してるからね。毎朝奏の通学路の半径一キロ圏内から猫を駆逐、その後通学路の掃除をして」

「学校では奏に近付こうとする文学部及び色ボケた勘違い女共の妨害し、奏の為の昼食の場所から奏の害になると思われる者共を排除」

「そして、放課後は奏と遊び、夜は奏を狙って来る不屈き者共を殲滅してるんだ」

「奏は全く持って抜けているからな。私達が気を抜くとすぐに悪い虫が付いてしまう」

「日永歌澄、岸和田陽子、それからあのクソ女にはしてやられたよね」

うーん、見事な過保護っぷり。しかし、ここまでとはなあ……。

「そうだな。奏は休日も結構外出するからな、暴漢共の駆除には苦労させられる」

「そうだよね、後逆ナンしようとする女共もなかなか減らないんだよね」

……あれ、こいつらの話を聞く限りだと結構大掛かりな事してるよな。

「長谷川、守戸。奏はお前らのしてる事気付いてるのか？」

「いいや」

「ちつとも気付いて無いよあれは」

……あんのバカ、後で折檻してやる。

extra・今日も剣道少女は××を吐く

「ふう〜、今日はちょっと調子悪かったな……。昼のサバがアレだつたかなあ……」

和心がぼやきながら歩いていると後ろから声を掛けられた。

「おや？ 和心ではないか」

「やつほ〜、和心ちゃんも今帰り？」

矩子と千央だった。

「ノリねえ、ちーにい！」

二人の方に駆け寄る和心。駆け寄って何も無いところで転んだ。

「「あ」

矩子と千央の声。  
和心の転ぶ先には車止めのポール。

「うっ！！」

不運にもポールが和心の腹にめり込んだ。痛々しい。

「……………」

何も言わずに可哀相な視線を送る矩子と千央と崩れ落ちる和心。  
そして

「うっぶ　　）　　〒　　@　　£！」

盛大にぶちまけた。  
地面に広がる汚物。幸いな事に誰も通らなかった。

「う、うう……………」

聞こえて来たのはすすり泣き。二人には掛ける言葉が見つからない。  
が、いたたまれなくなり千央が尋ねた。

「和心ちゃん……………大丈夫？」

返ってきたのは泣き声。恥も外聞も無い泣き方だった。

「う、うう、うわああああああああんっ！　こんな、こんな  
な役回りなんてもう嫌ああああああああつ！」

矩子と千央の憐憫の視線を受けながら、和心の心底からの叫びは

柳泉市の夜空に消えていった。

閑話・女男とノツポ女の過保護な奮闘記へ青の親心と剣道少女の叫び

(後書き

さて、今回重要？なキーワードが出ました。その説明したいと思いません。

『八魔神』：世界に八人しかいない魔法使い達の総称。内『魔狼  
フエンリル』、『魔女 ウイツチ』、『魔帝 シーザー』、『  
魔灯 シーファイア』は『四魔』よんま。『白龍 フォーエレメンツ  
』、『刻龍 フォーディメンションズ』、『甲竜 アブソリュ  
ートガード』、『誓竜 エタニティ』は『四神』ししんと呼ばれて  
いる。

さていかがでしたでしょうか？

評価・批評・感想をよろしく願います。

20・僕と彼女のレクリエーションへ各クラスの現状と色々…前編 (前書き)

祭：お待たせ、

『しまったあっ！』

祭：本当にごめんなさい。色々と忙し『言い訳すんな』はい。

『さて、今回は私、有寺夏夏子からお知らせです。今回は後書きも読んで下さい。お願いします！』

祭：本当にお願いしま『うっさい！』ぎゃふん！

『それでは始まります！』

## 20・僕と彼女のレクリエーションへ各クラスの現状と色々：前編

case1・Bチームの場合「ワッショイ！ 今日から君は『リ  
か』ちゃんだ！」

あれから数日、いよいよ『大サバイバル大会』は目前となった訳  
だけど……。

「奏くん、今度はこの服なんか良いんじゃないかな」

「あ、こつちのカツラなんてどう？」

「え、こつちの方がいいよ」

……誰か助けて。

僕は今、クラスどころかサバイバル大会のチームの女子達に玩具  
にされてる。

ノリはそれはそれは楽しそうに僕を見てる。いや、助けてよ。

「ハハハ、奏。すっかり我がBチーム（チーム名募集中）の着せ替  
え人形だな。『り〇』ちゃんと呼んでやるっか？」

「なんでここでひぐ〇しが出て来るんだよ」

「いや、人形の方だったが……よし！」

「あ」

ヤバイ、墓穴掘ったかも……。

ノリは心底楽しそうに僕の周りにいた女子に指示を出した。

「ストレートのロングヘアのカツラと巫女服。あと、鍬を用意し

る！」

あつと言つ間に用意されたカツラと巫女服と鍬。  
不気味な笑みを浮かべながら迫る秋元さん。  
ま、マジで怖い。

「ちよつ、これ以上は……いや、やめ」

こうして僕の強制コスプレショーはいつまでも続いた。

Case 2・Aチームの場合「DS王子は今日も行く！」

「進捗状況は？」

「戦闘部隊は七割程の仕上がりです。武装はほぼ完了しましたが、  
簡易トラップの作製に手間取っていて商業科の皆さんが買い出しに  
行っています」

皆さん、初めまして。おかもとれいや岡本玲夜です。このクラスの委員長をやっ  
ています。

僕の隣りで我がクラスの近況報告をしているのが副委員長であり  
幼馴染みであり秘書でもある恋人のきっかわあさや橘川麻夜。

僕達は今、教室で二人きり。他の人達は訓練やら何やらで出張っ  
ています。

「ねえ、あーや」

「なんでしょうか？」

「敵しそうな女性といった面持ちのあーや。そんなあーやを見ているとどうしようもなくいじめたくなります。」

「超愛しているよ。だから、今ここであーやを食べてもいいかい？」

「言いながら腰に手を回して顎をクイツと持ち上げる。」

「！！！？」

顔をトマトより真っ赤にして心底慌てて僕の手から逃れるあーやはドガツガラガツシャツボタンドテッ！！ っと机を盛大に蹴散らし転ぶ。

「な、なななっ！ 何をするのよっ！ 何考えてるのよっ！ こゝ、ここは学校なのよ！？ そ、そんな破廉恥なっ！」

ク、ククツ、クツクツクツ、超可愛い。超萌える

僕は内心で口角を思いつき吊り上げて笑い、残念そうな表情をあーやに向ける。

「あーやは、僕の事、嫌いなのかい？」

「うっ……そ、そんなこと無い……けど……」

「なら」

僕はすぐさまあーやを抱き上げてやる。あーやは軽く身体を強張らせたけど、顎を上げた途端に力を抜き潤んだ瞳を僕に向ける。

「……や、優しくして……ね？」

その圧倒的で規格外で全てを超越する艶やかで美しく可愛らしい表情に僕の理性はミクロ単位の塵と化し、欲望の権化となる。そして、いざ、禁断の楽園へ突き進もうとあーやの制服に手を掛け

「タァーーンッ!!」

「玲夜殿っ、敵情視察の報告に来た……で、あり、ます……」

入って来たのは僕の友人であり、生粋のミリタリーオタクである安部森三。あべしんぞう愛称・モリゾー。

クツ、フフ、クフフツ、どうしてモリゾーは引きつった笑み浮かべてるんだろっね？

僕の腕の中にあるあーやはどうしたの？ と訝しげな表情を浮かべてる。フフ、流石は僕のあーやだね。あーやは一回のめり込むとしばらくそこから抜け出せないんだ。だから、モリゾーなんて見えちゃいない。

「あーや、ちょっと待っててね」

「早く……戻って来ないと嫌だよ？」

それは目眩がするくらいの甘えた声。

「うん、すぐ戻って来るよ」

僕はそつとあーやを座らせてモリゾーに近付く。

「れ、玲夜殿っ、お、落ち着いて下され！」

僕はそれを無視して近寄る。

僕の名前は岡本玲夜。このクラスの委員長であり、モリゾーの友人であり、愛しのあーやの幼馴染みで恋人で御主人様。そして、一年の頂点に立つものだ。

「貴様は、許さん……」

「れ、玲夜ど」

case3・Cチームの場合、突っ走れ熱血単純王！ 君ならきつとなんとか出来る！〜

オイッス！ 俺の名前は朱刃炎斗<sup>あかはえんと</sup>。柳泉学園高等部普通科一年C組の委員長をやったんだ！ 好きなモノはバスケットとカレーとハンバーグ、嫌いなモノはウジウジした奴。

身長は179で体重は76、成績は下の下なんだ！ よろしくな！

「ちよつとえつちゃん、明後日の方向を向いて何元気な一人言言ってんの？」

「えっ！？ 何が？」

「……いや、何でもないよ」

「？」

何だっただんだべ？ ま、いつか！ そんなことより、さっき俺に話し掛けたのは俺の親友の浅井英開<sup>あさいひでひら</sup>。皆からはナガマサって呼ばれ



case 4・Dチームの場合、我こそは第六天魔王なり！！  
だから、泣き虫って言うなあ！〜

俺の名前は緒波おはな信乃。自分の事を俺なんて言ってるがこれでもれつきとした女だ。皆からはノブナガって呼ばれてる。理由は俺が不良（？）でちまたでは『第六天魔王』なんてけつたいな呼ばれ方をしてるからだ。今回、大サバイバル大会のDチーム（名前募集中）のリーダーになったんだけど……

はあ、どうしたもんかなあ……。

俺の目の前で膨れっ面してるのは俺の可愛い可愛い双子の妹の緒波市乃。

「なあ、市乃」

「フンッ！」

「う……………」

市乃は俺を徹底的に無視をする。これがもう昨日からずっと続いてるんだ。本当にどうしよう？

「なあ、のう。俺、どうしたら良い？」

「もう行かせてやったら良いじゃない」

そう言ったのは俺の親友の『こと西羽戸にしわくこ濃姫。余りにも姫様っぽいから濃姫とか姫さまとかって呼ばれてる。まんまだから本人は不服みただけだ。

「それはダメだ！　俺はあんなチンチクリン認めて無いんだから！」

俺の言葉にのうは呆れた溜め息を吐いて俺を見る。

「あのね、どうしてアンタは妹の事となると即断即決の超頑固になるかね……。市ちゃんが男と付き合いたいかそんなこと言えば『ダメだ。ダメダメ絶対許さん。男は皆獣なんだ。絶対絶対ダメなんだ。今からそいつを消して来る』って。どうなんだい、それは？　信乃の気持ちも分かるけど、もうちょっと市ちゃんを信じたらどうだい？」

説教じみたのうの言葉。そんなこと、言われなくたって分かってる。分かってるんだ。でも、でも　っ！

「それでも市乃をアイツに合わせる気は無い！　意地でも合わせない！」

教室に居た連中が俺を見るけど、そんなの知ったこっちゃ無い。

「俺はどんな男であろうとそいつが男で有る限り渡す気はねえっ！　」

ドガンッ！！

突然、机が吹き飛んだ。そこには、完全無欠にキレた笑いを浮かべた市乃がいた。

「姉さん、何をふざけた事を言ってるの？　私は、姉さんのモノじゃないっ！　だから、姉さんに私の恋愛に口出す権限だっ！　ない！」

「！」

なんだかもう、止まらない。心無い言葉が口を吐いて出た。

「うるさいうるさいっ！ 市乃はお姉ちゃんの言う事だけ聞いてれば良いんだよ！ そしたら、そしたら」

俺みたいな事にはならないんだ！！

「うるさいっ！！」

市乃は叫び、俺を睨み付けて

「姉さんなんか大ツツツツツ嫌いつ！！」

そんな捨て台詞を残して市乃は出て行った。

ハハ、ハハハ、大ツ嫌い……か。

自分が言った事を思い出す。かなり酷い事を言ったと今更ながら思う。

「信乃」

のうの声。どこか咎める様な声で私の心に突き刺さる。

「言い過ぎだよ。あんな事言われたら誰だって怒る」

そんなの、分かっているさ。十分過ぎる位に分かっている。

視界がだんだんぼやけて来た。

さっきの市乃とのやり取りが頭の中をグチャグチャにしてだんだん訳が分からなくなっている。

唯一つ、大嫌いという言葉だけが確かなモノとしてそこにあった。

「信乃も分かっているんでしょう？ だったら今すぐ」

「……ひっく、えぐ、あっ、うう、わああああああああああ  
あああつー！」

私は恥も外聞なく泣いた。もう、大サバイバル大会なんて空の彼  
方だ。

20・僕と彼女のレクリエーションへ各クラスの現状と色々：前編（後書き）

case 5・Eチームの場合（後書きの理由は作者と田仲の会話だから）

皆さん、どうも初めまして。

俺の名前は田仲勇一<sup>たなかゆういち</sup>。成績、スポーツ、容姿、ありとあらゆる事の中の中。以前見たアニメにあったキャッチフレーズ『その普通普通だね』が素で似合う奇蹟の普通男です。ただ、言い替えるのであれば努力しても普通止まりで努力が一切報われる事が無いという事なので、時たま猛烈に虚しくなります。

……えっ！？ Eチームはこれで終わりですか？

はい、はい、はあ、そうですね。特筆すべき点は無いです。そんなことはありませんよ！ ええ。我がクラスにはフェンシング部、水球部、クリケット部の若きホープ達が……えっ？ それじゃダメ？  
そうですね、残念です。

……よし！殺ろう！

はいっ、それでは皆さん、私が作者への復讐を誓ったところでさようならです。また会える日を楽しみにしています。

さようなら

祭：や、やっと、やっと出来た……。

「遅過ぎよっ！ あ、皆さんお久し振りです。和心です」

祭：……色々あったんだよ、進学の事とか学校行事とか。もうちょっとで大学進学の為の試験あるし。面倒から夏夏子さん、後よろ

「なっ、ちよ、私がいるでしょっ、作者あっ！」

『はあくいつ！ 呼ばれて飛び出た夏夏子です。取りあえず今回ようやっと新キャラが出切ったというか出過ぎというか……どう思いますか、和心ちゃん！』

「出番が更に削られそうで不安です……ってえっ！ 違うそうじゃないっ！ アンタのせいで私の出番がああああっ！！！」

『フフ、まあまあ、落ち着きなつて。そんな傷心な和心ちゃんを私が癒してア・ゲ・ル』

「な、なによ、その手はっ！ なんで近寄っ

『あん、もう可愛い過ぎイイっ！』

「いっ〜やあ〜っ！」

## 21・僕と彼女のレクリエーションへ各クラスの現状と色々：後編

case6・Fチームの場合、無気力少年、ヤル気を出して空回  
る。

やはり、言語科の無気力エース・日比谷ひびやあきたか暁喬だよ。ハハツ、何だ  
ってオレがリーダーなのかね？

ま、普段全くヤル気の無い俺だけだよ、流石に『海外旅行に匹敵  
する賞品』は気になるじゃん。だからヤル気満々なんだけど……

「なあ、美園ちゃん何か手伝う事無いか？」

委員長の倉武美園くらたけみそのちゃんはそう聞いたオレを何か冷めた目で見て、

「無いけど？」

あれ？ 何でこんな冷たいんだ？

「そ、そっかあ、残念」

よし、諦めて今度はあつちの佐東に……

「なあ、なんか仕事ないか？」

「ねえよ」

……なんだかにべもない。

あつれ？ やっぱりなんか冷たい……。うーん、取りあえず、

「ねえ、慧子ちゃ  
「無いよ?」

うーん、素敵な笑顔でサラリと……ってかまだ全部言っただけだ……。

「そ、そっかあ、ありがとう」

何故だ? 見てるとオレに手伝える事がかなりある様に見えるんだけどな。……うーん分らん。オレってそんなに嫌われてたっけ? いやいや、しょっちゅうサボってヤル気の無いオレだけどコミュニケーションだけは自信あるんだけどなあ……。  
ん? ガラリと戸が開き、我が悪友・三嶋京滋みしまけいじが工具やら材料やらが入った袋を持って立っていた。

「お疲れさん〜 頼まれたモンと差し入れ買って来たぜ」

? 差し入れってアイツ何にも……。  
すると京滋の後ろから同じく悪友の貴水楽賢たかみらくたかが段ボールを二箱持って立っていた。

二人はオレの側まで来て荷物を下ろし、ラクタが差し入れのジュースを配っていく。

あ、そうだ。

「なあ、京滋」

京滋に尋ねてみる。

「んー、どうしたんよ?」

「なんで誰もオレに仕事くれないんだ? リーダーで女装までする

のに……」

そう言つと京滋は心底呆れた顔で、

「昨日お前がやった事を思い出せ、スーパーぶきつちよ男」

……………あ。

昨日、オレは皆の仕事を手伝つた。手伝つて、資材を壊し、武器を壊し、罫を壊し、工具を壊した。

そりゃ手伝わせて貰えないよな………つてか忘れてんなよオレ。

そして、ジューズを配り終えたラクタが、

「自業自得」

一言でオレを斬つて捨てた。

……………泣きたい。

case7・Gチームの場合、人は見掛けによらぬもの。ネガティブなヒロイン願望者の杞憂

み、皆さんこんにちは。甘太いのり（あまたいのり）って言います。

気分は鬱です。

どうしてワタシがリーダーでメイド服を着なければいけないのですよつか？ 大体ワタシなんかリーダーをしたら開始五秒で負けて

しまいますよ。他のクラスの皆さんがこぞってワタシに襲いかかって来るに決まっています。

そして、ポイントが無くなっても攻撃し続けるに違いありません。そんなワタシを助けてくれる人はいるのでしょうか？ いや、いないに違いありません。……ああ、反語表現なんて使ってしまった。ごめんなさい、怒らないで下さい。でも、でも、もしワタシを助けてくれる人がいるならそれはきつと逞しく凛々しい人に違いありません。きつと白馬に乗ってワタシをお姫様抱っこなんてしてくれるのです。でもこんなのは有り得ません。

はあ……明後日なんて来なければい……

「いのりさん」

「はい、なんででしょうか？」

「補給地点のバリケードについてなんだけどさ、こんな感じでいいかな？」

そう言っ**て**バリケードの設計図をワタシに渡したのは阿部沙莉さん。あへさり

設計図には穴の開いた板が描かれていました。

「こういうのに使うバリケードってどんなのにすればいいのかわからなくて」

「これで問題無いと思いますよ。そうだ、上手い事跳弾を相手に返せる様に出来ませんか？」

沙莉さんはなるほどと呟いて、

「それは面白いかも！ 流石いのりさんね！」

とワタシなんかを褒めて行ってしまいました。

……………どうしよう？ ワタシがあんな提案をしたせいでサバイバル大会に間に合わなかったり、何か勝負中にそのせいで問題なんて起こったら……………。

ああ、王子様どうかワタシを殺して下さい……………。明後日を永遠に亡き者にして下さい。

### Case 8・Hチームの場合〈貧乏苦学生の困惑〉

……………えーと、これはどういう事なんだろう？

私の目の前ではHチームの皆が物凄い勢いで働いている。それはもう私の入る余地が無いくらいに猛烈な勢いで。

うーん、幾ら考えても分かんないや。

あ、自己紹介してなかった。

私、まえそのこまつ前園湖松こまつつて言います。年齢は16歳で身長は158くらい。体重とかスリーサイズは……………えと、秘密、ということでお願ひします。

私の肉親は兄しかいないんですけどその兄が困った人なんですよ。その理由は

タァーーンッ！！

「まつうつ！！」

戸が盛大に開いて、そこには長身の男の人　お兄ちゃんの前園まえぞ利家。のとしや

「お兄ちゃんっ！」

お兄ちゃんは泣きそうな顔で私に駆け寄って来た。

「まつうっ！ 大変だ！」

「大変じゃないよ！ あれだけ私の所には来ないようって言ったのに！」

「だ、だって……」

お兄ちゃんは困った様に言い淀んで私を見てくる。その姿が余りにも情けなくて思わず私は叫んだ。

「だってじゃないの！」

お兄ちゃんの格好は寝癖は直して無いし、ヨレヨレのジャージ姿でサンダルを履いてるといふ有様。

「大体その格好は何？ いつもあれほどちゃんとした格好で来る様に言ってるでしょ？」

そこまで言って、

「コマちゃん、ちょっと落ち着きなよ」

私の幼馴染みでよき理解者の佐々木音祢ちゃんささきねに止められた。

「だって音祢ちゃん、お兄ちゃんが……」

そんな私に音祢ちゃんは苦笑いして私を諭すように言った。

「それは分かるけど、クラスの皆が置いてきぼりくらってるから」  
「えっ……」

言われて見るとクラスのほとんどが呆気に取られてる。  
……………。

「音祢ちゃん、ありがとー。助かったよー」  
「いやいや、別に私は犬千代さんを助けた訳では……」

そんなお兄ちゃんと音祢ちゃんの会話。  
なんか……どっと疲れた様な気がする。取りあえず説教は家に帰  
ってからにしよう。うん。  
溜め息を一つ吐き、私はお兄ちゃんに尋ねた。

「それで、お兄ちゃんは一体何しに来たの？」  
「大変なことが起こったんだ」

物凄い深刻そうな表情に思わず息を飲む。周りもつられて息を飲  
む。

「た、大変なことって？」  
「よしひで吉英兄さんから連絡が来た」  
「う………そ………」

信じられなかった。  
どうして？

その疑問が思考をどんどん埋めていく。  
そして、思い出す。

家族五人、幸せに暮らしていたあの頃。

「とにかく来て！」

驚きに硬直する私の手を掴んでお兄ちゃんは走り出す。  
連れて来られたのは職員室にあるお兄ちゃんの席。

お兄ちゃんは机の上のパソコンを操ってメールの受信ボックスを  
開くとそこには、

『明後日、帰る。』

P・S 鏡に《甲糸》を準備するように言っといてくれ』

……… どういう事？

疑問ばかりが湧いて出る。

どうして今まで連絡が無かったの？

<sup>かがみ</sup>  
鏡って？

甲糸って？

なんだか、家族が戻って来るっていうのに不安で溜まらない。

この不安は何なんだろう？

case 9 . Iチームの場合、女男は独り寂しく

つままない。

ほんと、つままない。

どうも、守戸千央です。

もうこのつまんなさ、どうしたらいいんだろっね？

このチームはなんていうかつままない。他のチーム同様に作戦会

議に武装やトラップの準備に大わらわ。そして、リーダーは

「守戸くん！ 君には相芽あいめくんと共に他クラスの偵察をするように言ったじゃないか！ ちゃんとしたまえ！」

仕切り屋のクソブチメガネ。まったくもってつまんない。

ってか僕に指図するなっ、バーカバーカ！

……はあ、虚しい。

あーあ、なんでノリと違うチームなんだよ……。

そんな鬱屈とした気分で追い出される様に教室を出ると凜々しい顔の相芽くんが腕を組んで壁に寄り掛かって立ってた。

「遅いぞ、千央」

うーん、相変わらずニヒルな感じだなあ。

「ごめんごめん、じゃあ行こっか」

「ああ」

偵察に来たのはBチーム、つまりはノリがいるチーム。

『ストレートのロングヘアーのカツラと巫女服。あと、鍬を用意しろ！』

聞こえてくるノリの美声。でも姿は見れない。僕らがいるのは教室の前で、目の前にいるのは多賀太郎と佐々木慶太。

「太郎邪魔だから今すぐ消えて無くなれ」

「随分だなおい！」

太郎が怒るけどそんなの知ったこっちゃない。  
僕は太郎の襟首を掴んで全力で揺する。

「うるさいうるさい！　なんでお前がノリと一緒にチームなんだよ  
おっ！！」

「うおっ、馬鹿っ、やべっ！！」  
「あ」「あ」

ゴチツという鈍い音とあ、という佐々木と相芽くん。それから白  
目向いて気絶した太郎。  
やった！

「ノリ、今行くよ！」

僕は意気揚々と一歩踏み出し

「ふぎゅっ」

相芽くん襟首を引っ張られて変な声が出た。  
い、息が……。

相芽くんは何の感慨も無く僕の襟首を引っ張り続ける。

「ちょ……相……芽、くん……ぐるじ……」

僕の願いをまったく意に介さずに相芽くんはフツとニヒルに笑  
った。

「ウチのマスケットがすまなかつたな、慶太」

「お？ あ、いや、別にいいけど……」

と、佐々木は突然の詫びに戸惑いながら頷いた。  
「ってか僕はマスコットじゃなくてアイドルだ！」

「ところで、お前達のリーダーの座留に伝言頼めるか？」

「伝言？」

「ダメか？」

「いや、いいけどよ」

ちよつと！ 何勝手に話進めて ぐぐぐぐつ！？

思わず暴れたらぎゅつと更に襟首を引つ張られてますます息が苦しくなる。そんな僕を尻目にして相芽くんは佐々木に伝言を伝える。

「『WJ』が出回っているという噂があるから注意すること、例のぶつが用意出来たこと。この二つを伝えてくれ」

「あ、ああ」

じゃあなつて言つて僕を引きずつて歩き出す……つてえ！

「相芽くんっ！ ちよつ、何してんの?!」

「帰るんだが、どうかしたか？」

「どつしたもこつしたも偵察するんでしょ?!」

「長谷川に会いたいただけだろう？ 我慢しろ」

僕の主張を完膚なきまでにバツサリ斬り捨てて相芽くんは歩き続ける。

どんどんどんどん遠ざかる1年B組。

ああ、ああ……っ！

「ノリ〜っ、ノリイ〜っ!」

case10・Jチームの場合〜いじめられっ子の存在意義〜

明後日なんて来なければいいのに……。

大体、どうして俺がチームのリーダーをしないといけないんだ。何をしたって全然ダメで、やることなすこと全部笑われる様な俺が……。

今だっつてこうしてアイツらに仕事押しつけられて……。

「はぁ……」

とにかく押しつけた買い出しは終わったしあとは帰るだけ。

「ん?」

一瞬、視界の端に白い何か横切った。いつもなら別に何か横切ったな、程度にしかならないのに何故かどうしても気になった。

後ろを振り返ると白いモノが路地裏の入口に消えていった。

慌ててそこに向かうとそこには真っ白なローブに身を包み、顔をフードで隠した奴が立ってた。

その異様な姿に尻込みしながらなんとか尋ねる。

「お、お前なんだ?」

「君こそなんだい?」

予想外の切り返しに思わず、

「あ、いや、その……」

と言いだんだ。

すると、突然白ローブは茶色い瓶を取り出して俺に差し出した。

「あなた、色々と疲れていませんか？」

「は？」

「これを一度服用するだけで疲れが取れるし、色々の良い事もありますよ」

そう言って白ローブは無理矢理茶色い瓶を手渡す。

「えっ、いや、ちよっ……え？」

目を疑った。一瞬目を離しただけなのに白ローブが跡形も無く消えていた。

なんだったんだ……？

疑問に思いながら茶色い瓶を見る。

そして。

「ゼエ、ゼエ、あ、新しい道に目覚めるところだった……」  
祭：「ごくるーさん。」

「他人事だと思つてコノヤロー！」

祭：「まあまあ。それにしても……キャラ増やし過ぎたなあ……。」

「これからやってけるの？」

祭：「うーん、分かんないねえ。せつかく作つたんだし出来る事なら使い捨てにはしたくないなあ。」

あ、でもあの中に君と歌澄ちゃんのライバルとなるキャラが二人ばかりいるし、今後の物語に深く関わってくるキャラもいるよ。よかったね

「何がよかったのよっ！ ライバル増えるってどついう事よあっ！」

祭：「ツンデレに秀才美少女だよ。強いよ〜」

「うぎゃあああああっ！ そりゃマズいっ！ 家帰つて対策立てなきゃっ！」

祭：「……あーあ、帰っちゃった。でも、ぎゃああああは無いよね〜。」

はてさて、ようやく役者は揃いましたが大会が始まるまで後一話です。驚く程の遅筆っぷりですが楽しみにしていただければ幸いです。

それでは第22話：僕と彼女のレクリエーション《メイドとロボと邂逅と》でお会いしましょう。

さよなら〜〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8748a/>

---

僕と彼女のなんとかかんとか

2010年10月15日07時20分発行